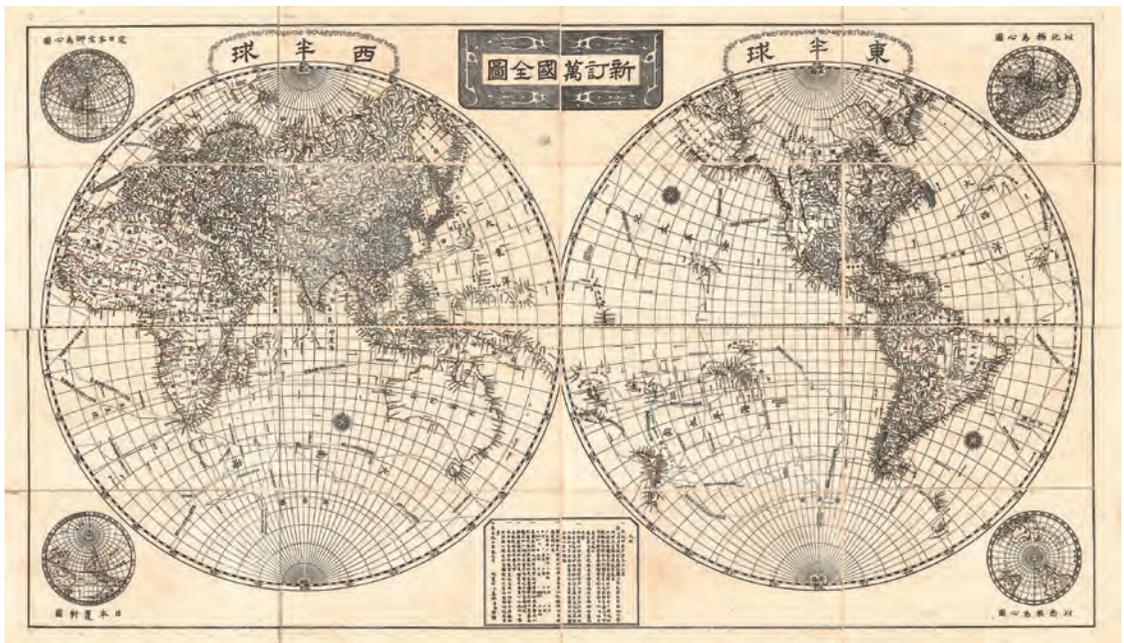




杏雨書屋企画展示

「杏雨書屋の古地図 一地図の歴史と日本のかたち―」

2024年9月30日(月)～2025年9月26日(金)



凡例

- ・本書は2024年9月30日(月)から杏雨書屋常設展示室で開催される企画展示「杏雨書屋の古地図 ―地図の歴史と日本のかたち―」の展覧図録である。
- ・洋書・洋図の表題の後ろの「」内には表題の和訳あるいは略称を記した。
- ・地図の寸法は料紙の縦横の寸法をミリメートルで示し、図郭線内の寸法を示す場合は()内に記した。
- ・展示替えなどの都合により、本図録に掲載している資料でも展示されていない場合や、掲載図版と展示場面が異なる場合、また管理番号が異なる版が展示されている場合がある。
- ・資料保護、あるいは同一資料の別場面を示すため複製を展示する場合は説明パネルにおいてそれを示す。

表紙図版

新訂万国全図 (二宮255) : 33頁参照

杏雨書屋の古地図 ―地図の歴史と日本のかたち―

15世紀初頭、ポルトガルのエンリケ航海王子が企画した西アフリカ探検で始まる大航海時代。その探検航海は1490年代のコロンブスの西インド諸島到達、ヴァスコ・ダ・ガマによる喜望峰経由のインド航路発見などの成果を生んだ。16世紀に入ってさらに激しくなったスペインとポルトガルによる領土獲得競争は、更なる重要な地理的発見をもたらした。1513年、バルボアはパナマ地峡を踏破して太平洋に出たことで南北アメリカが地続きであることを見出し、1519年から22年のマゼラン艦隊による世界一周は地球が球形であることを証明した。その後、イギリス、オランダ、フランスなどの西欧諸国、さらにロシアも参入した新航路の開拓や領土獲得競争はさらなる地理的発見に結び付き、地球の全貌が徐々に明らかになっていった。そして1543年(一説には1542年)、インドのゴアを拠点としていたポルトガルの商人が種子島に到達、西欧人はついに日本を「発見」するに至った。

大航海時代の地理的情報を取り込んだ最初の世界地図は、1569年にネーデルラントの地理学者・メルカトルにより作製された。その地図に使われた投影法であるメルカトル図法は最短距離が曲線になるものの、航海時の舵角の誤りを改善する効果があり、海図・航海用地図として汎用された。その後17世紀から19世紀前半まで新たな地理的発見は続き、測量技術の発展も相俟って、最新情報を取り込んだ世界地図や地域図、航海図が次々と作製されていった。探検の歴史は、ある意味地図の歴史ということもできる。

一方、中国の書物から仏教的な「世界」を見てきた日本人は、ポルトガル人から見せられた世界地図を見て驚いたに違いない。その後、鎖国下の江戸前期日本においては官製地図が細々と作製されるにすぎなかったが、長崎から入ってくる情報を基に、18世紀後半から儒学者らにより日本地図が、先進的な蘭学者らにより世界地図が作製され始めた。幕府もロシアの南下を契機に正確な地図作製を企図し、幕命により天文方・高橋景保が1810年に作製した『新訂万国全図』は、英国製の最新地図を底本とし、伊能忠敬、最上徳内らによる蝦夷測量情報や、松田伝十郎、間宮林蔵らによる樺太探検の結果も盛り込んだ当時最新の世界地図であった。日本地図としてはその約10年後、伊能忠敬らによる17年間の全国測量を基にした「大日本沿海輿地全図」が完成するに至った。

今回の「杏雨書屋の古地図―地図の歴史と日本のかたち―」展は、五代武田長兵衛氏による杏雨書屋創設以来、六代武田長兵衛氏、武田科学振興財団が蒐集保存を継承してきた古典籍に含まれる古地図類のコレクション展である。単独の地図のみではなく、地誌等の書籍に所収あるいは付随した地図も含めて展示した。本展開催の契機となった「新訂万国全図」や、その底本となった「アロウミス方図」(日本で唯一の現存図)は比較的近年(2009年)に架蔵されたもので、今回が初展示となる。未知の世界に挑んだ探検家の夢や冒険心と艱難辛苦、また学者や地図作製者の情熱と苦悩などに思いを馳せていただければ幸いである。

杏雨書屋

目 次

I. 西欧で作製された世界地図・日本地図	3
II. 中国・朝鮮で作製された世界地図・アジア周辺図	19
III. 日本で作製された世界地図	27
IV. 日本で作製された日本地図・日本周辺図	45
V. 肖像画・人物来歴	61
VI. 世界地図・日本地図作製に関する年表(杏雨書屋所蔵品関連)	66

I. 西欧で作製された世界地図・日本地図

1 INDIAE ORIENTALIS, INSVLARVMQVE ADIACIENTIVM TYPVS.

「東インド図」 1570年頃 アントワープ 392×480 mm (常陸561-3)

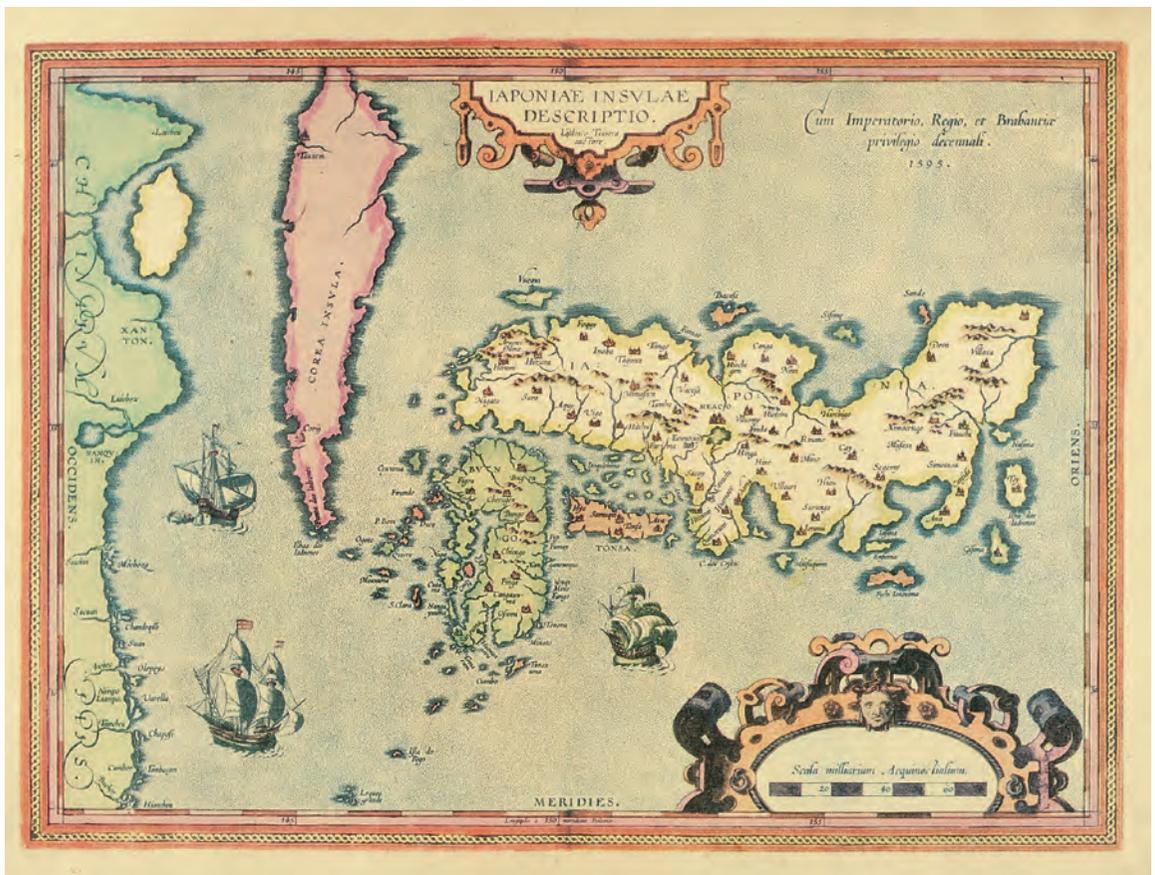
オランダの地図製作者アブラハム・オルテリウスの地図帳『地球の舞台』に掲載された「東インド図」。インドから東南アジア、日本、北アメリカまでが描かれている。本図において日本列島の形状はまだ極めて不正確で、1つの大きな島の南北に列島が連なっている。ただよく見ると大きな島の北端に Miaco (都)、南端に Cangoxina (鹿兒島) とあり、ポルトガル人の情報から日本の地名が認識されていたことがわかる。またジャワ島の南に描かれた海岸線はオーストラリア大陸の一部として示されており、オーストラリアの存在を初めて示すと共に、ヨーロッパ人の南太平洋探索への意欲を掻き立てたという意味で重要な地図となった。

アブラハム・オルテリウス (1527-98) : オランダの数学者、地理学者、地図製作者。メルカトルの親友で欧州各国を旅行して地図を収集し、1570年に『地球の舞台』というラテン語版の世界地図帳を編集・出版した。本地図帳はベストセラーとなり、6か国語に翻訳され、1612年までに42版を重ねた。



2 IAPONIAE INSVLAE DESCRIPTIO. 「日本図」 1595年 アントワープ 392 × 480 mm (常陸 561-1)

ポルトガルのイエズス会宣教師ルイス・テイセラによる日本図。銅版筆彩。テイセラはスペイン王室付きの地図製作者でもあり、本図はオルテリウスが1570年から発行する地図帳『地球の舞台』の1595年版に掲載された。原図は行基図(45頁参照)とされる。比較的形の整った日本の地形を西洋で初めて紹介したもので、以後の日本図の基となった。北海道を除く日本列島が東西に描かれ、朝鮮半島が島として描かれるなど曖昧さは否めないが、九州の形状、地名などには詳細さが認められる。



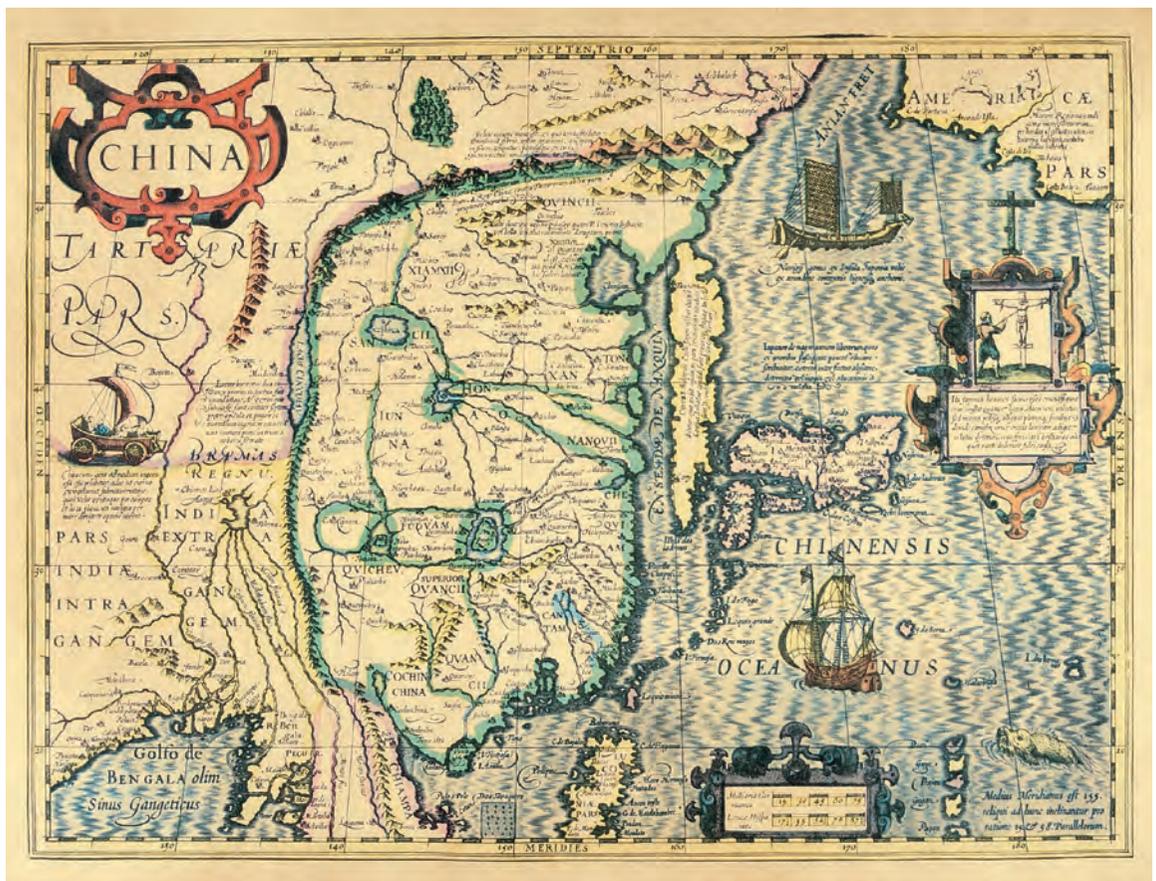
3 IAPONIA.「日本図」 1606年初版 アムステルダム 392×480 mm (常陸 561-2)

フランドルの地図製作者ヨドクス・ホンディウスが、同じくフランドルの地図製作者ゲラルドゥス・メルカトルから譲り受けた地図帳の原図を基に、1606年に改定発刊した地図帳に掲載した銅版筆彩の日本図。テイセラが1595年に作製した日本図をほぼそのまま採用しているが、タイトルや右下の縮尺、九州西方海上の帆船が海獣に替えられるなどの変更点がある。また、朝鮮は島のまま表されているが、島なのか大陸と陸続きなのかは不明という注釈が記載されている。



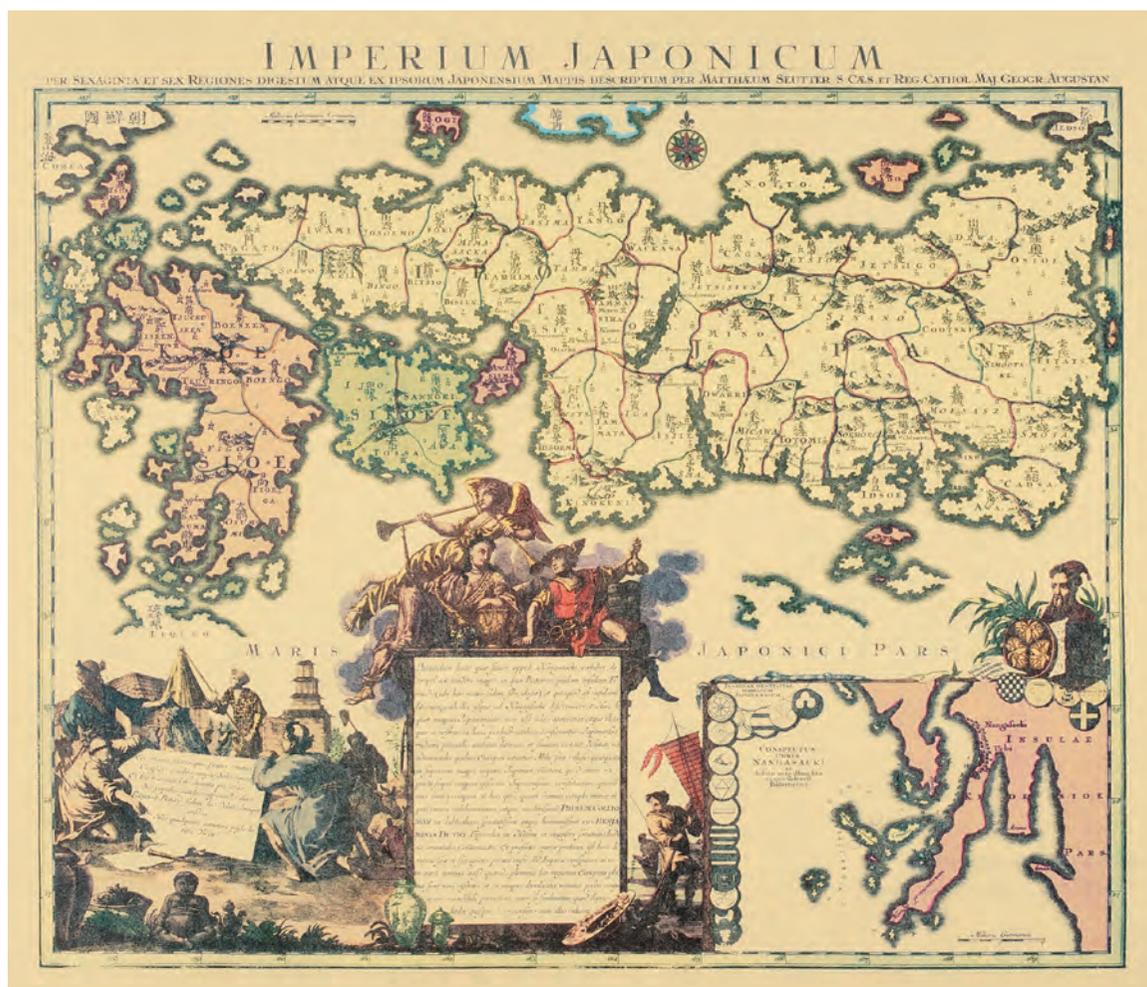
4 CHINA.「中国図」 1606年初版 アムステルダム 390×480 mm (常陸 561-5)

ゲラルドゥス・メルカトルの地図帳(アトラス) 収載の中国図。中国を中心に、朝鮮、日本から北アメリカの一部までを描いたもの。前頁の「日本図」と同様、初版は1606年刊のホンディウスの地図帳に掲載された。帆船や海獣、中国の帆のある車などのイラストに加え、日本の東には当時弾圧を受けていたキリシタン殉教の様子も描かれている。日本近海には前頁の「日本図」と同じく「日本船の帆は葦を編んでできており、錨は木製である」との説明書きと共に小型の船が描かれているが、形としては和船ではなく、中国のジャンク(唐船)のような形状で描かれている。まだ日本の情報が少ない時代であったことをうかがわせる。



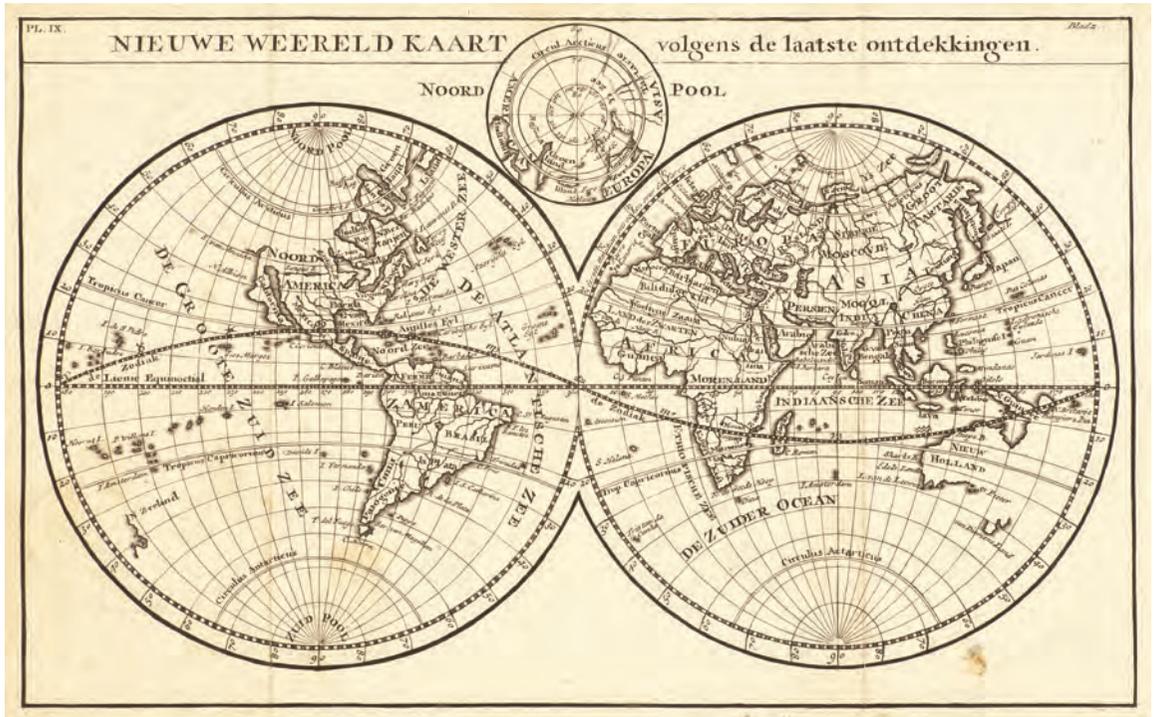
5 IMPERIUM JAPONICUM.「日本帝国」 1745年 アウグスブルク 390 × 478 mm (常陸 561-4)

1715年にオランダ・ユトレヒト大学の東方学者であるアドリアン・レランドによって出版された日本図の1745年改訂版で、アウグスブルクの出版者マティアス・ゾイターの新地図帳に掲載されたもの。中央下の献辞と左下の詩文以外は1715年版とほとんど変わっていない。16世紀末から定番となっていた「テイセラ型」とは全く異なる日本の形が用いられており、レランドは1700年初頭に入手した日本製の日本地図を参考にしたとされている。66の地域名として漢字が用いられ、その読みが併記されているのが特徴で、西欧で作製された日本地図で漢字が書き込まれた最初の作例とされる。右下に紋章図案の装飾と共に、長崎の拡大地図が挿入されている。その上に描かれた人物は三つ葉葵の紋章を持っていることから徳川将軍を表していると推察される。



7 Filozofische Onderwyzer; of Algemeene schets der hedendaagsche
Ondervindelyke Natuurkunde. 「現代自然科学の哲学的講義あるいは概論」
1744年 アムステルダム (二宮117)

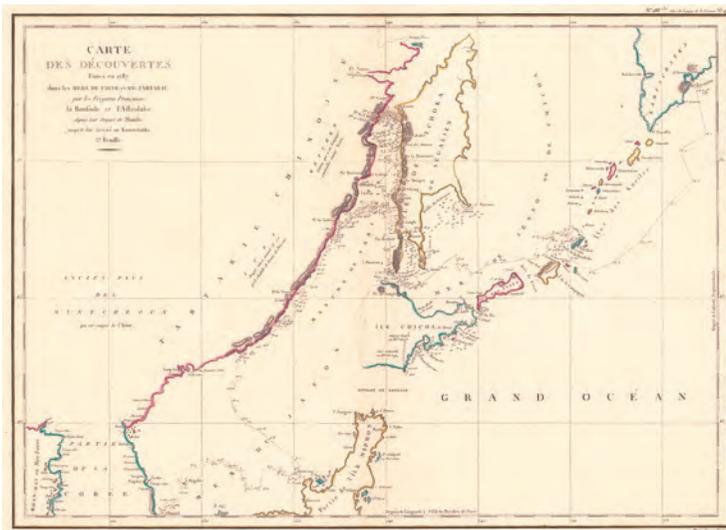
ベンジャミン・マーティン著の窮理書に「最新の発見による新世界地図」というタイトルの両半球図(マーティンの地球両半球図)が収載されている。本図では北米大陸北西部は未確定、カムチャツカから千島・カラフトにかけての日本北辺部分は全く不正確である。またオーストラリアとニューギニアは陸続きとなっており、オーストラリア東部は未確定となっている。



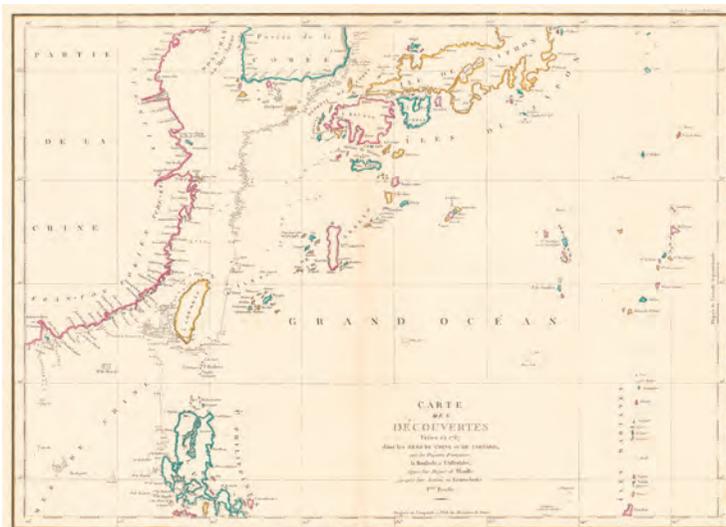
マーティンの地球両半球図(172×278 mm)

8 Carte des decouvertes faites en 1787 dans les mers de Chine et de Tartarie , par les Fregates Francaises la Boussole et l'Astrolabe, depuis leur depart de Manille jusqu'a leur arrivee au Kamtschatka. 1ere. feuille.
 「ラ・ペルーズ オホーツク海周辺発見地図」 2帖 1797年 (二宮264)

フランスの探検家ラ・ペルーズの航海記録を基に作製され、1797年にフランスで出版(1799年には英国でも出版)された東南アジア図。彼の艦隊の航跡が日付と共に詳細に描かれており、マカオを出発後、朝鮮海峡を通過、鬱陵島を発見し、朝鮮半島を測量後日本海を北上、さらにサハリン(樺太)西岸を南から北上したが海峡の発見に至らず引き返したことが判る。さらに日本とサハリンの間の海峡を通過、千島列島を経てカムチャツカ半島のペトロパヴロフスクに到達した。彼が通過(発見)した海峡(現・宗谷海峡)はその功績を称え、ラ・ペルーズ海峡と命名された。現在、海峡を望む宗谷岬の丘の上には「ラ・ペルーズ顕彰記念碑」が建っている。本図は当時の当該地域の最新情報を含んでおり、ヨーロッパ人の日本を含むアジアへの興味を掻き立てたと考えられる。



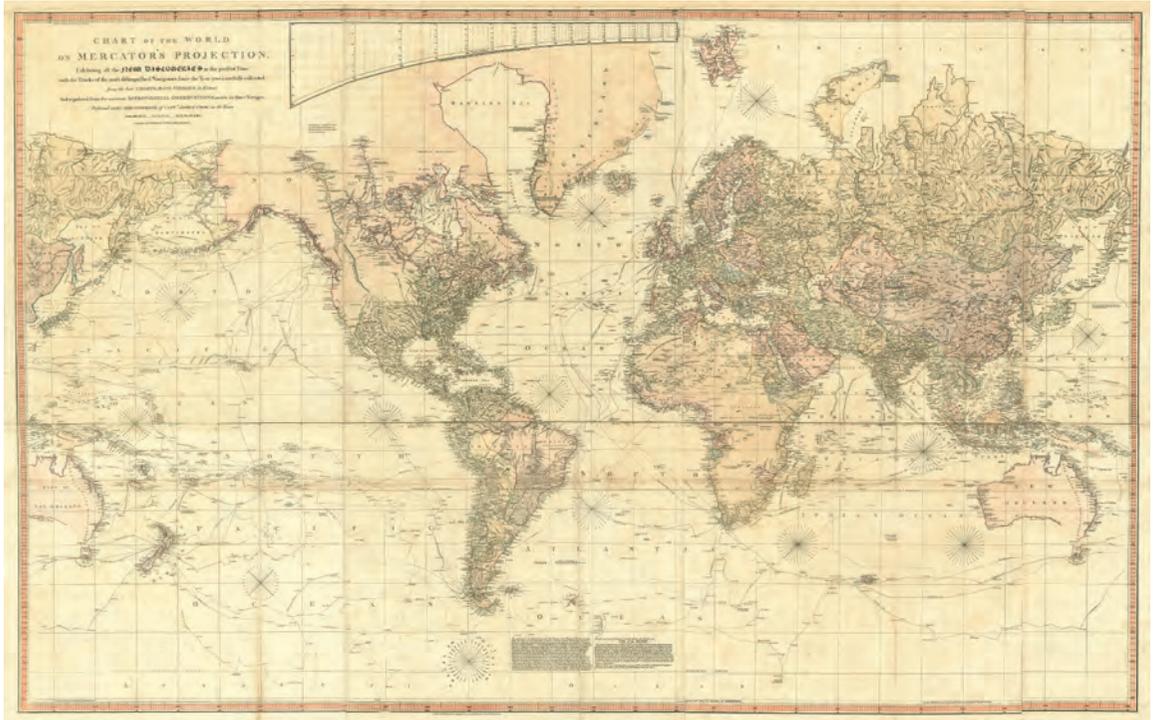
690 × 1030 mm



680 × 1030 mm

9 Chart of the world on Mercator's projection, exhibiting all the new discoveries to the present time : with the tracks of the most distinguished navigators since the year 1700, carefully collected from the best charts, maps, voyages, &c. extant, and regulated from the accurate astronomical observations, made in three voyages, perform'd under the command of capt[n]. James Cook, in the years 1768, 69,70,71.--72,73,74,75.--76,77, 78,79 & 80. 「アロウスミス方図」 1帖 アーロン・アロウスミス
1790年初版(1800年頃増補版) ロンドン 1325×2100mm (二宮263)

英国(イングランド)の地図製作者・銅版印刷業者であるアーロン・アロウスミスが作製・出版したメルカトル図法による大型世界地図。初版は1790年。そのタイトルはすこぶる長く、和訳は「現在までの新知見をすべて示したメルカトル投影世界地図。1700年以降の有名航海探検家の航路を最良の海図、地図、航海記などから慎重に収録し、1768、69、70、71年と72、73、74、75年と76、77、78、79、80年にジェームズ・クック船長指揮下に行われた3回の航海における正確な天文観測で補正した」(二宮陸男著『高橋景保と新訂万国全図』より抜粋)。その後、ウィリアム・ウェーク、ラ・ペルーズ伯、マシュー・フリンダースなど数多の探検家が航海で得た情報を取り入れて適時増補・改訂された。本図は中央にヨーロッパを配し、右端と左端にそれぞれ異なったアジア東北部(日本周辺)を描いているという特徴を有する。文化元年(1804)、ロシア使節レザノフ長崎来航時にオランダ通詞・本木庄左衛門正栄が入手、その後幕府に献上された「万国全図」とはこの「アロウスミス方図」であり、高橋景保の「新訂万国全図」の底図となった。現存する「アロウスミス方図」は世界的に見ても数少なく、日本では本図が唯一の現存図である。

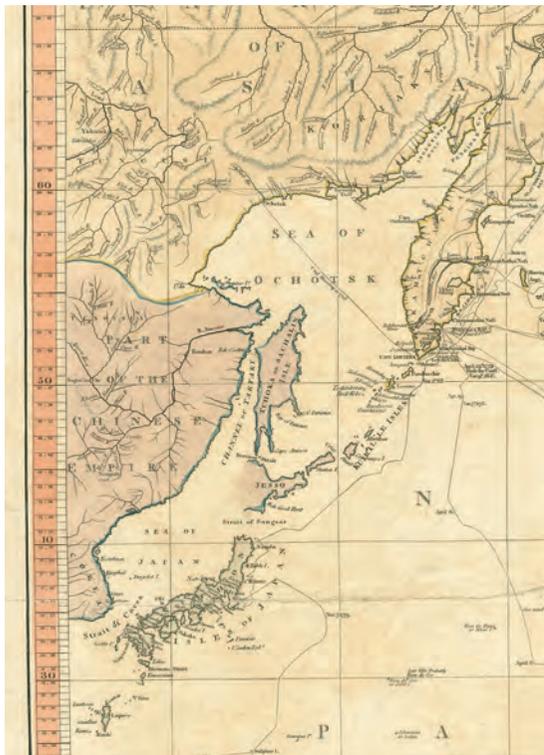


展示品が1800年頃の増補版であることは、アロウスミスによって同時期に出版された数種の海図類において、タスマニアがオーストラリアと地続きではなく島であると改訂されたのが1799年後半であること、また両端に描かれた日本北部（蝦夷・樺太周辺）が、右端は1784年頃のクックの航海図「北太平洋図」型、左端は1799年以降採用されたラ・ペルーズ型を描いていることなどから推定される。本図は『北夷考証』（34頁参照）で言及された「*諳厄里亜国1780年製世界地図」の数々の特徴を全て有し、日本に唯一現存するアロウスミス方図であることから、高橋景保が底本とした品そのものである可能性がある。因みに景保が「1780年製」と記したのは彼の誤解であり、『北夷考証』に記載された様々な特徴から、彼の用いたアロウスミス方図は1800年頃の増補版であることが判明している。

* 諳厄里亜はアンゲリア(=イングランド)の音訳



オーストラリアとタスマニア



左端の日本北辺部分

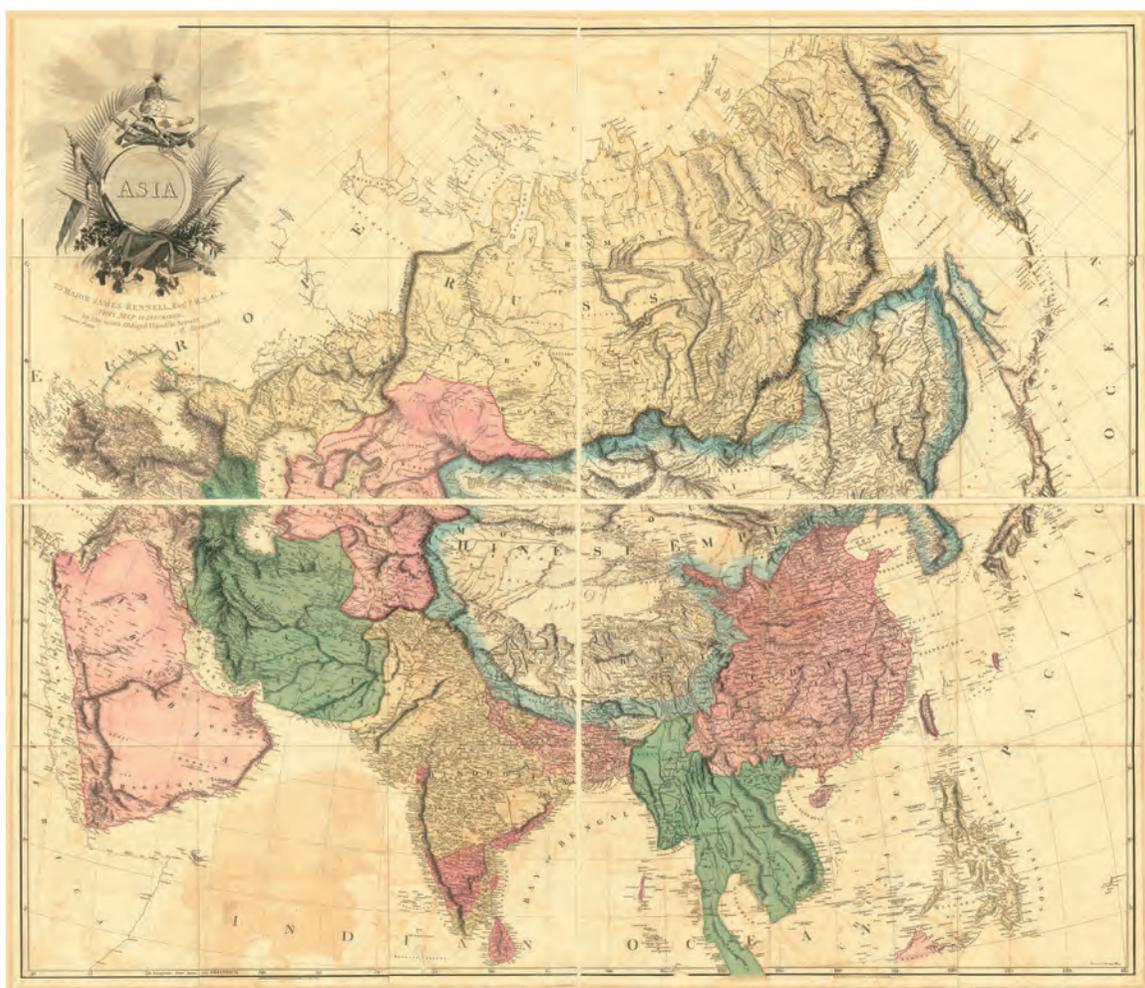


右端の日本北辺部分

10 Asia. To Major James Rennell, Esp. r. F. R. S. &c. &c. This Map Is
Inscribed, by His much Obliged Humble Servant A. Arrowsmith.

「アジア図 (レンネル地図)」 1 帖 アーロン・アロウスマス 1801 年
ロンドン 1272 × 1490 mm (二宮 262)

標題と献辞にあるように、1780 年に自身の測量結果に基づいてベンガル地図をロンドンで刊行したレンネル少佐に敬意を表してアロウスマスが作製したアジア全域図で、レンネル地図とも呼ばれる。樺太はラ・ペルーズの地図のままで、日本海を北上するラ・ペルーズの航跡が描かれており、間宮海峡のすぐ南に浅瀬があることが記され、ラ・ペルーズがそこから引き返した航路が記されている。千島列島は詳細に記載されているが、北海道はまだ不正確である。高橋景保が文化 6 年 (1809) に作製した「日本辺界略図」(36 頁参照) は、大陸部分、朝鮮、渤海の海岸線は本図を基にしているが、樺太、北海道、南千島の島々については日本人が調査した情報を盛り込んで、より精確さを求めた。



11 The World from the Discoveries & Observations made in the Latest Voyages & Travels. 1帖 1808年 ロンドン 296×482mm (二宮265)

ロンドンの地図作成者ロバート・ウィルキンソンによる世界両半球図の1808年版。オホーツクからアラスカまでの太平洋北部およびオーストラリア海域は当時ヨーロッパでは最新のアロウスマス図に準じ、日本北辺はラ・ペルーズ型、ニューギニアとタスマニア(当時 Van Diemen's Land)は共に島として描かれている。この世界両半球図は1790年代に Map of the World from the latest Discoveries というタイトルで発刊され始め、1800年頃からはこのタイトルに変更され、1825年に彼が亡くなるまで更新され続けた。



12-1 Voyage Round the World, in the Years 1803, 1804, 1805, 1806

「世界周航記」 1冊 1813年 アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン著 (二宮101)

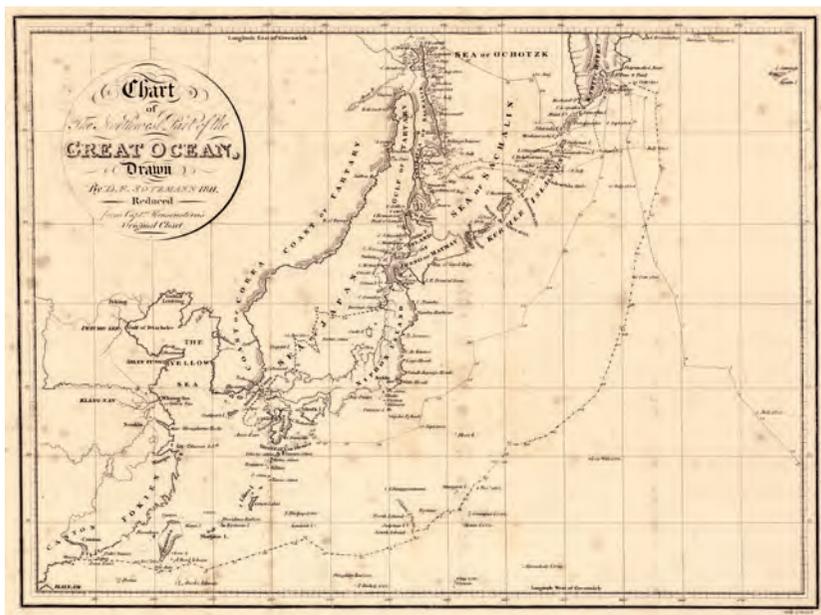
エストニア出身でロシア海軍提督だったアーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルンは、1803年から1806年にかけて行われた世界周航についてまとめた航海記を1810年から13年にかけて、ロシア語、ドイツ語、英語で出版した。石巻の漂流民・津太夫らの長崎送還やロシアの第2回遣日使節全権大使レザノフの長崎派遣にも協力したが、彼の真の目的はクックやラ・ペルーズの探検以上の地理学的発見や学術的成果の獲得であった。彼は当時未知であった日本海北部海域の解明を目指し、サハリン東岸を測量しながら北上、ラ・ペルーズとは逆にサハリン北端から南下して西岸調査を試みたが深度不足で更なる南下を断念、海水の比重測定結果からサハリンと大陸の間に海峡は存在しない(だろう)という結論に達した。それは誤りではあったが、彼の収集した詳細な測量データは当該海域の地理学の進展に大きく貢献した。

12-2 Chart of The Northwest Part of the GREAT OCEAN, Drawn By D. F.

SOTZMANN 1811. 「ゾッツマンの太平洋北部の海図」 1811年

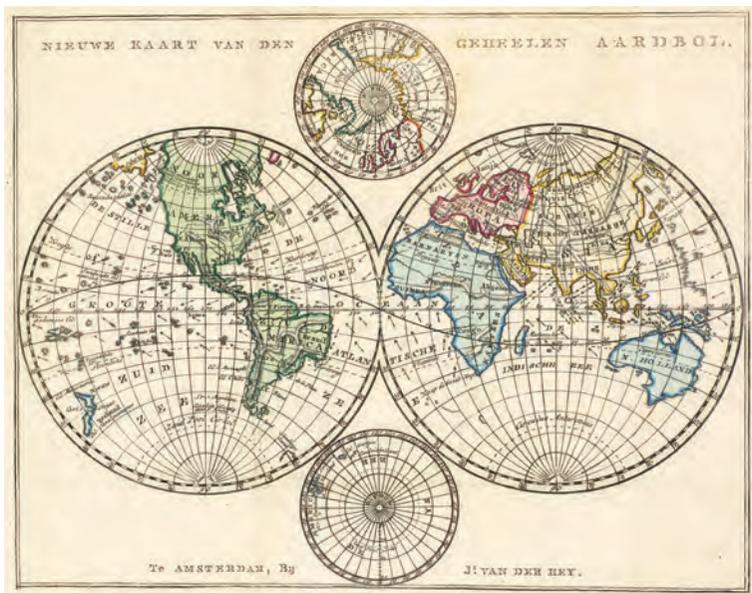
ダニエル・フリードリッヒ・ゾッツマン作製 (244 × 330 mm)

クルーゼンシュテルンの『世界周航記』所収の日本近海図。クルーゼンシュテルンの原図と測量情報等を基に、ドイツの地理学者・地図製作者であるダニエル・フリードリッヒ・ゾッツマンが1811年に作製したもので、1804年から1806年にかけてカムチャツカから長崎、中国広東、日本海からサハリン(樺太)東岸を探検したクルーゼンシュテルン艦隊の旗艦ナジュダ号の航跡が年月日と共に詳細に描かれている。そこには1805年にクルーゼンシュテルンがサハリン北端からアムール川河口口まで到達しながら、更なる南下を断念したこと(間宮海峡を発見できなかったこと)がはっきりと示されている。従って、本図ではサハリンはアムール川河口南部で大陸と浅瀬でつながっているとして描かれているが、サハリン東部は正確に描かれ、ラ・ペルーズや、アロウスミスの地図とは一線を画している。

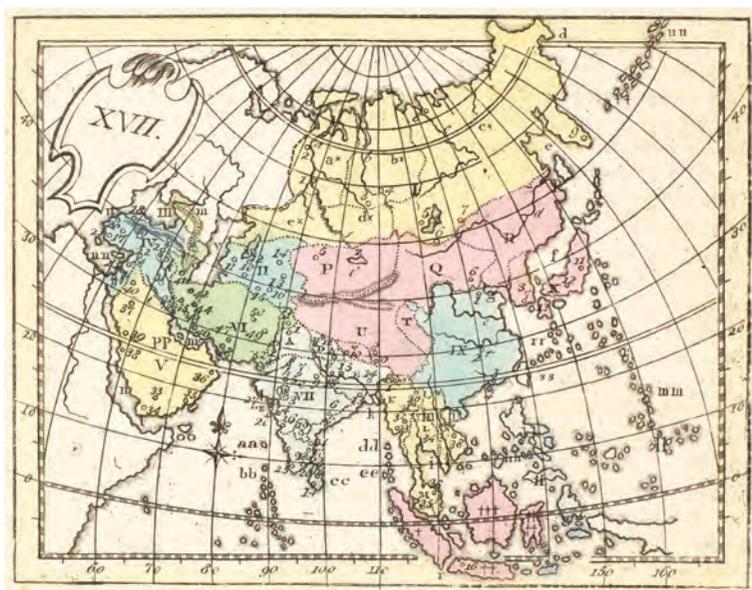


13 Geographische Oefeningen; of Leerboek der Aardrijkunde, met XX Genommerde Kaarten. 「プリンセン地理学教科書・付図」 1冊 1816年
 ピーター・ヨハネス・プリンセン著 (二宮155)

オランダ・ハーレルムの教師で地理学者のペーター・ヨハネス・プリンセンが中学生向けに執筆・出版した地理学書。1816年の初版が人気を博し、翌1817年には早くも第2版が刊行された。ヨーロッパ32章、アジア5章、アフリカ、アメリカ各2章、オーストラリア1章の計42章で構成され、日本は第37章に配置されている。本編に併せて地図20枚が織り込まれている。嘉永4年(1851)に杉田玄瑞訳で出版された『地学正宗・正宗図』(42頁参照)は本書1817年版を底本としている。



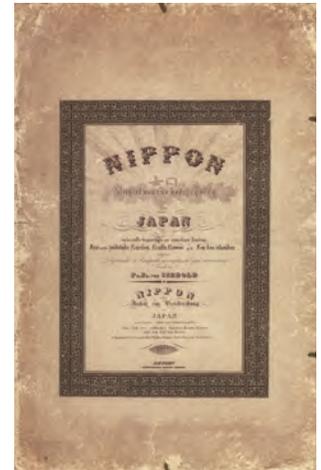
(190 × 241 mm)



(92 × 120 mm)

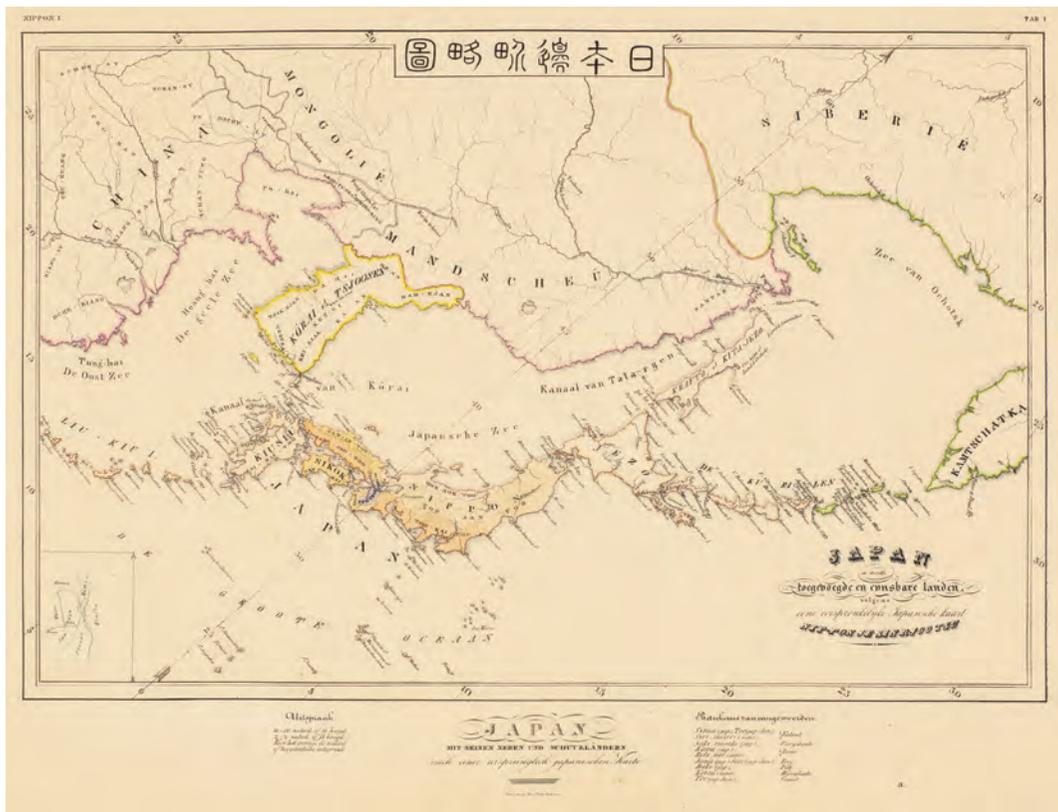
14-1 NIPPON「日本」 1832年～ フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト著 (洗心348)

ドイツ人医師・シーボルトが5年間の日本滞在中に収集した資料を基に、地理、歴史、文化、宗教、言語、政治・経済、農業など広範な分野について日本を紹介した書籍。1832年から分冊で発刊され、1852年の第20分冊まで予約者に頒布された。未製本。



14-2 JAPAN mit seinen Neben und Schutzlandern, nach einer ursprünglich Japanischen Karte. JAPAN EN DESZELFS toegevoegde en cynsbare landen volgens eene oorspronkelyke Japansche kaart. 「日本とその隣国および保護国」

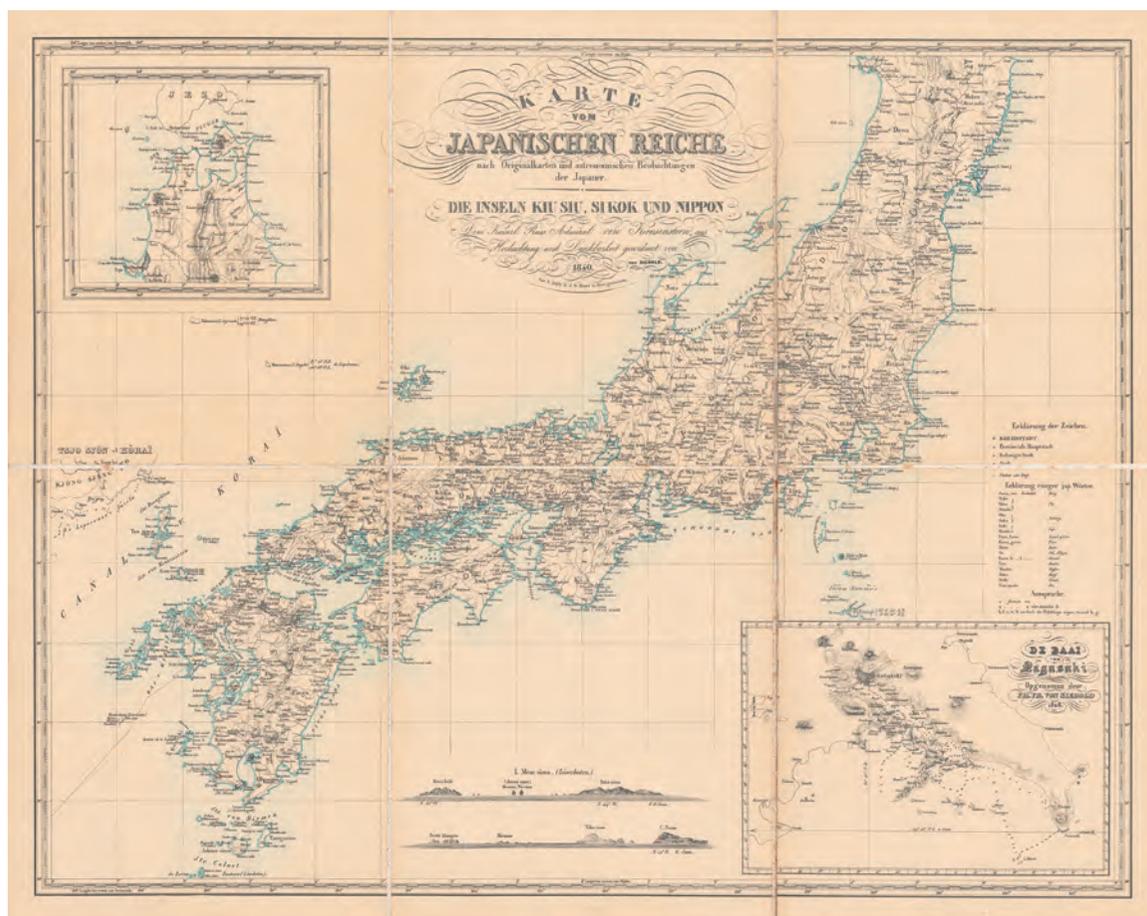
1832年にドイツ語で発刊された『日本』に記載された日本周辺図。高橋景保が1806年に作製した「日本辺界略図」を底図として地名のみローマ字化、あるいはオランダ語訳したもの。地図上部のタイトルは漢字がそのまま残されている。ヨーロッパ人にとって地理情報が不十分であった日本北辺地域について、サハリン(樺太)を半島ではなく島としてはっきり描くなど、当時世界最新の日本北方図として、『日本』に収録された地図の中でも最も重要な地図の一つとされる。右下のオランダ語タイトルの最後に「NIP-PON JE SIN RJOO TSU」とあり、シーボルトは本図を「ニッポン エシン リョウツ」と読んでたと推定される。



380×592 mm

15 KARTE VOM JAPANISCHEN REICHE. nach Originalkarten und astronomischen Beobachtungen der Japaner, DIE INSELN KIUSU, SIKOKU UNT NIPPON Dem Kaiserl Russ. Admiral von Krusenstern, aus Hochachtung und Dankbarkeit gewidmet von 1840, VON SIEBOLD. 「日本人作製による原図および天文学観測に基づく日本地図」 1 舗
 フィリップ・フォン・シーボルト 1840年 ベルリン 640×805 mm
 (洗心 348)

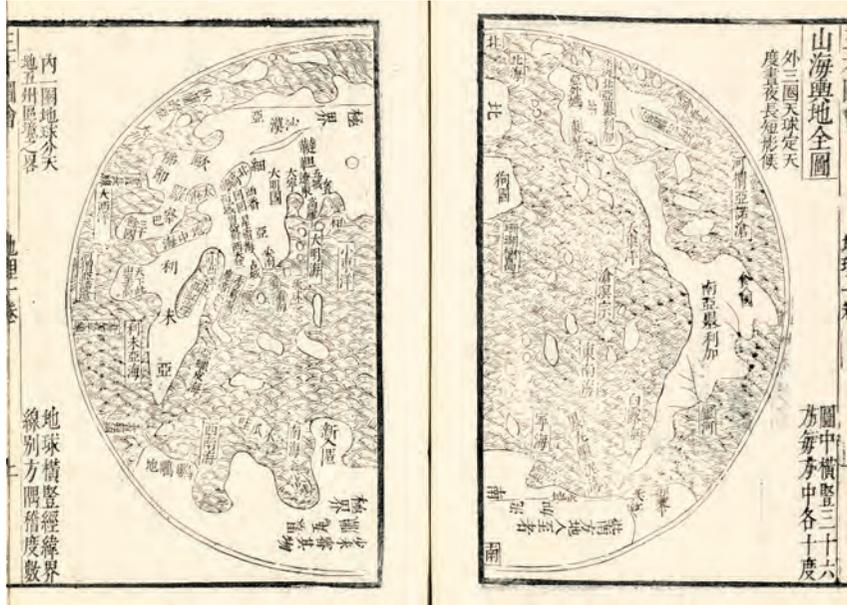
副題に DIE INSELN KIUSU, SIKOKU UNT NIPPON Dem Kaiserl Russ. Admiral von Krusenstern, aus Hochachtung und Dankbarkeit gewidmet von 1840, VON SIEBOLD. 「四国、九州、および日本図、ロシア帝国クルーゼンシュテルン提督に敬意と感謝を捧げて、1840年刊、シーボルト」とある。シーボルトが1823年から1829年までの日本滞在中に収集した資料・情報を纏めて作製した日本地図で、原図は伊能忠敬らによる「大日本沿海輿地全図」とされる。右下枠内に1828年シーボルト作製の長崎港の詳細図が挿入されている。石版による彩色地図で、最初は1840年に単独の地図として発刊されたが、1850年頃からシーボルト著『NIPPON』の附図となったらしい。地名はMIJAKO(京都)、JEDO(江戸)など、ドイツ語音のローマ字で表わされている。経度は伊能図と同じく京都を0度としているが、グリニッジを0度とした数値も併記されている。



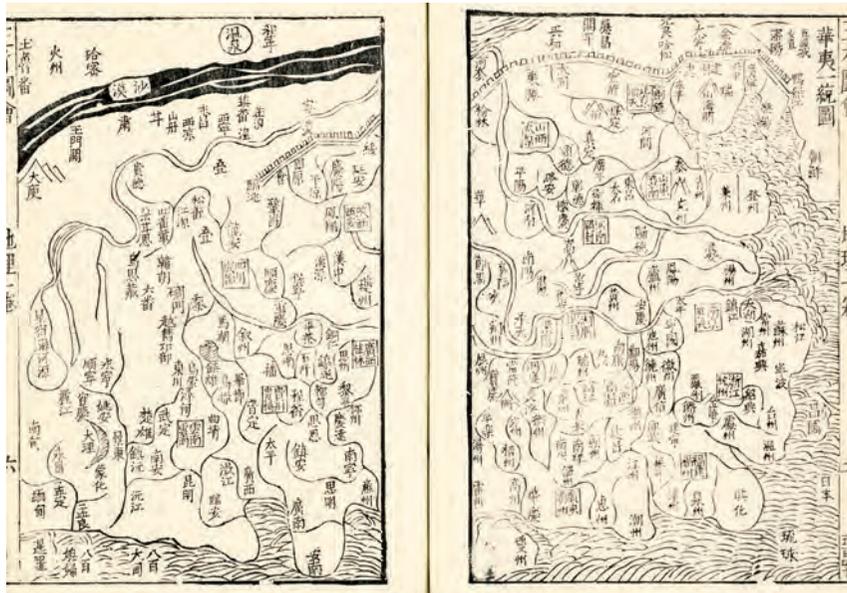
Ⅱ. 中国・朝鮮で作製された世界地図・アジア周辺図

16 三才図会 106 卷 王圻 / 王思義編 万曆 35 年 (1607) 成立 (杏雨 3155)

王圻とその子・王思義によって編纂された類書(百科事典)で、明の万曆 35 年 (1607) に完成、その 2 年後に発刊された。全 106 卷。天文・地理・人物・植物など 14 の部門に分類して図説されている。「地理」の冒頭に掲載された「山海輿地図」には大明国の東に丸い島で「日本」が描かれている。



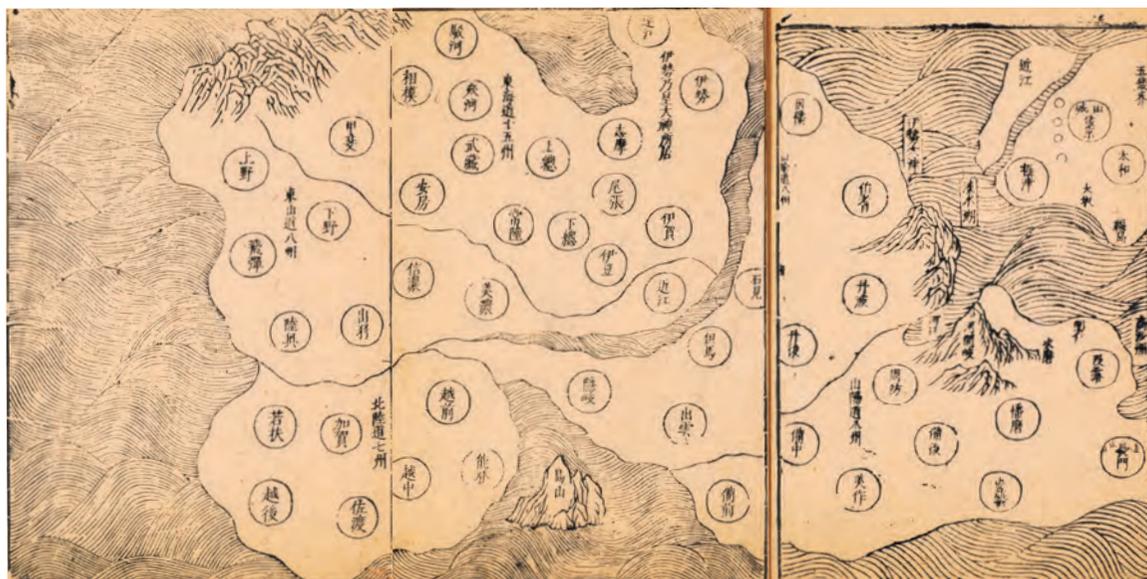
山海輿地全図



華夷一統図

17 武備志 240 卷 茅元儀撰 天啓元年 (1621) (洗心 166)

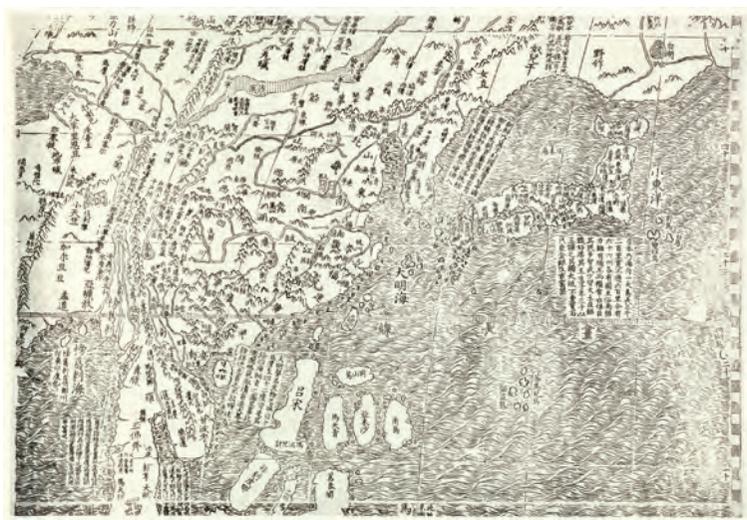
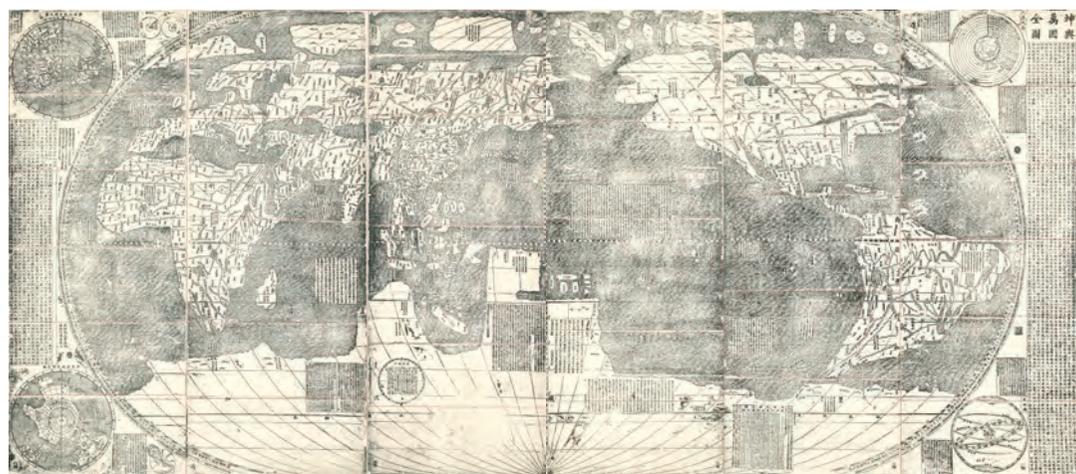
明の茅元儀が編纂した全 240 卷に及ぶ兵法書。倭寇について詳記した『徐海本末』を著した祖父・茅坤の影響を受け、幼少の頃より兵学を研究し、2,000 点以上の書物を参考にして戦術を詳述した本書を完成した。兵訣評、戦略考、陣練制、軍資乘、占度載の 5 項目から成り、地図・陣図をはじめ数多くの図譜が収録されている。中華中心の「輿地総図」は巻 220・海防 2 に、「日本図」「朝鮮図」は巻 223・四夷に掲載されている。日本図は琉球から東北までが描かれているが、形は想像図に等しく、記載されている分国名こそほぼ正しいが、その位置関係は不正確である。



日本図 (琉球部分を除く)

18 利瑪竇坤輿万国全図 1 舗 マテオ・リッチ 万暦 30 年 (1602) 初版 北京 (二宮 261)

明末の万暦 30 年 (1602) にイタリア人のイエズス会士マテオ・リッチ (利瑪竇) が万暦帝の命で作製し、北京で発刊した中国最初の世界地図。中国を図の中央に置き、漢字表記であることが特徴である。リッチは 1584 年に広州でアブラハム・オルテリウスの世界地図を漢訳した「山海輿地全図」を作製したが、航海者からの情報を踏まえた度重なる改訂の末、縦長の部分図 6 幅 1 組で縦約 180 cm 横約 420 cm の大図を完成した。坤輿とは乗り物 (輿) としての大地 (坤) の意で、地球を意味する。本図右側の第 1 幅の右端に標題とリッチの序文が記載され、地球図の右の上下隅にプトレマイオスの地動説を基にした「九重天図」と「天地儀」が、左の上下隅に北極と南極を中心とした半球図がそれぞれ描かれている。その他日食・月食図と解説、季節毎の太陽出入赤道緯度など、様々な自然科学に関する情報が記載されている。本図は中国人の世界観 (中華思想) を変えたばかりでなく、日本にも輸入され、鎖国後は本図が唯一の地理的情報源として日本の知識人にも大きな影響を与えた。原本は単彩だが、日本では彩色写本も作製された。展示品は日本で寛永 3 年 (1626) 初版刊行されたものの臨川書店による平成 8 年 (1996) 復刻版。全体図は 23 % 縮小版で、赤線は原寸大の本復刻版が全 32 枚で構成されていることを示す。

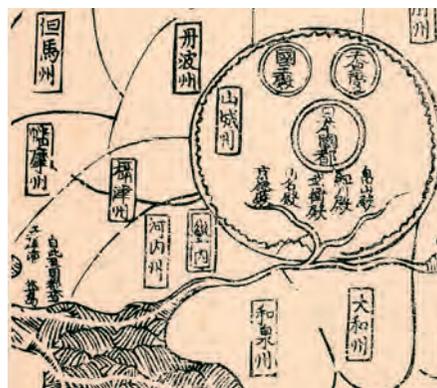


部分拡大図

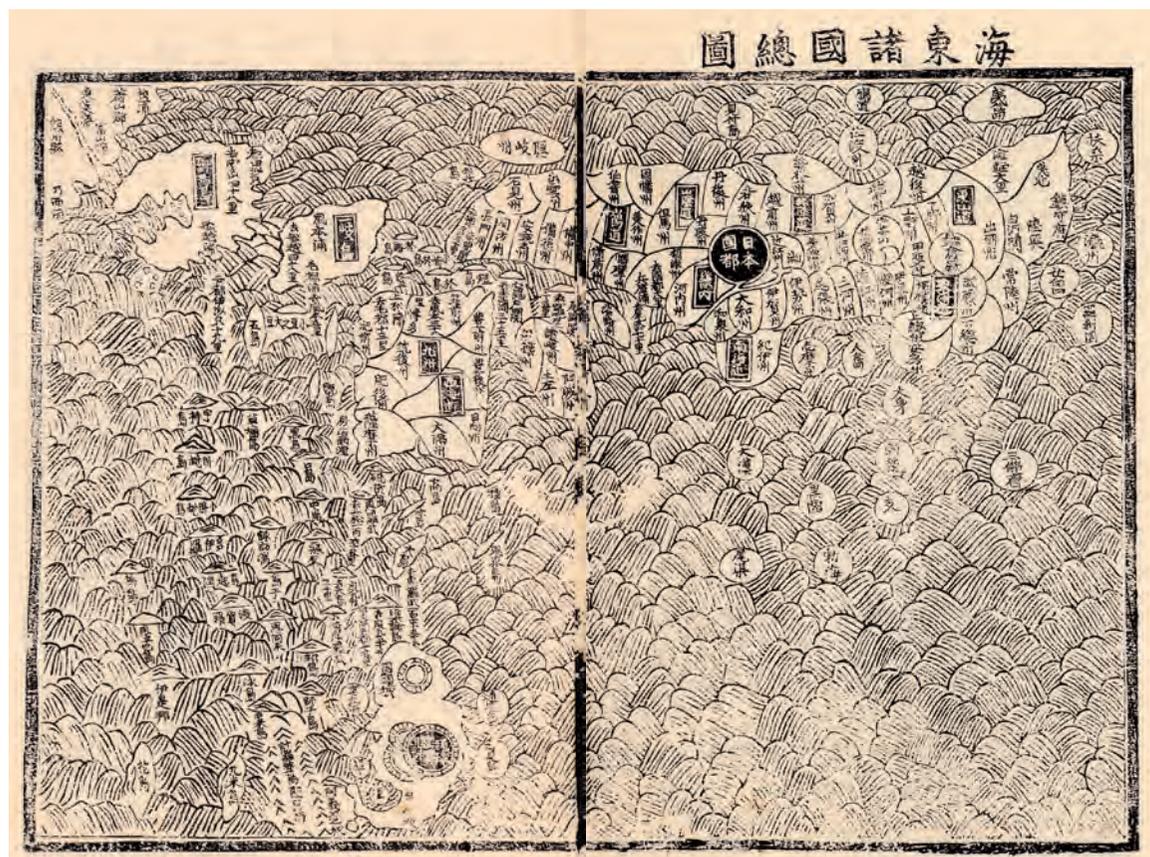
19 海東諸国記 1巻 申叔舟著 成宗2年(1471) 初版 (三木515)

李氏朝鮮の宰相・申叔舟が第9代国王成宗(在位1469~1495年)の命を受け、日本国および琉球国について記述した漢文の歴史書。日本の皇室、武家、地理・地名、国情、言語、通交の沿革などが記載されている。冒頭に「東海諸国総図」「日本本国之図」「日本国西海道九州之図」「日本国一岐島之図」「日本国対馬島之図」「琉球国之図」等の木版図が載る。申叔舟は1443年の第3回朝鮮通信使来日時に書状官として随行していた。「東海諸国総図」の右端に「夷島」が1つの島として描かれているが、これが蝦夷地(北海道)が地図上に表された最古の例とされる。「日本本国之図」では京都が日本国都として大きな円形の枠で描かれ、その中に武衛殿、畠山殿、細川殿、山名殿、京極殿と有力武家の名がみえる。また兵庫浦に「自此至国都十八里」との添え書きがあり、彼らにとって重要な港であったことがわかる。

杏雨書屋所蔵本(三木515)は朝鮮総督府朝鮮史編修会が同会所蔵印本に拠り、朝鮮史料叢刊第2として昭和8年(1933)に景印・発刊したものである。



日本本国之図(部分)

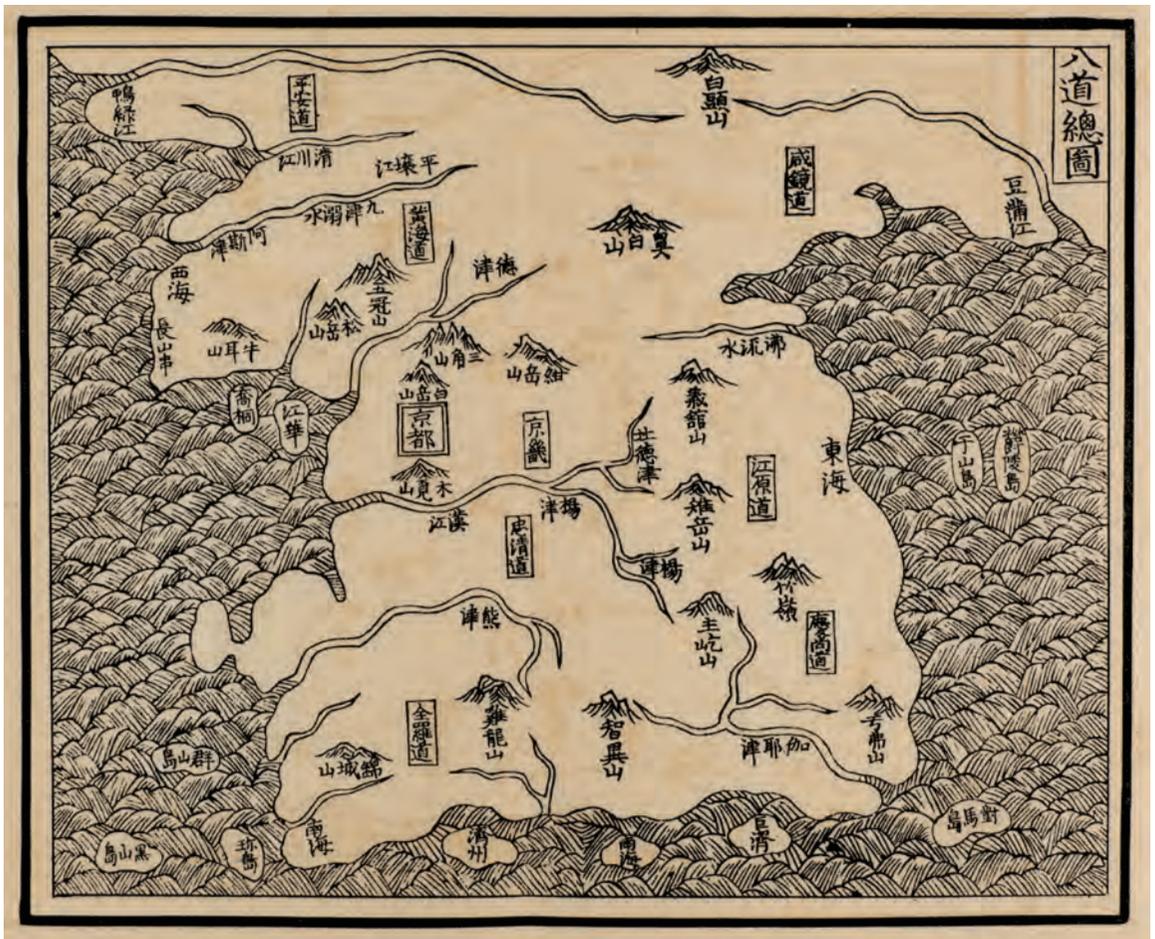


東海諸国総図

20 新增東国輿地勝覽 55巻 中宗 25年 (1530) 刊 盧思慎等撰 李荇等増補 (三木 509)

李朝第9代の成宗が盧思慎、姜希孟、梁誠之等に命じて編纂させた『東国輿地勝覽』は朝鮮各道の歴史、地理、風俗、物産等を詳述した地理書で、成宗12年(1481)に50巻で完成したが刊行されなかった。その後、新たに到来した明書『大明一統志』を参照・校訂して55巻とし、さらに校訂・増補が繰り返された結果、中宗25年(1530) 標題に「新增」を加えた『新增東国輿地勝覽』55巻が刊行された。巻1 京都の前に「八道総図」が、各道冒頭に道別図が挿入されている。

杏雨書屋所蔵本(三木 509) は昭和5年(1930)に朝鮮史学会より、同会第3回出版図書として編集・発刊されたもの。



八道総図 (170 × 210 mm)

21 輿地全図 1帖 朝鮮刊 18~19世紀 (洗心26)

天下図、中国図、東国八道大総 京畿道、忠清道、全羅道、慶尚道、江原道、咸鏡道、平安道、黄海道、日本国図、琉球国図の13図から成る地図帳。天下図は16世紀から19世紀にかけてよく作られた伝統的な世界地図の形式に則っており、中央に既知の世界である朝鮮、中国、アラビア半島からアフリカ大陸が描かれ、その周りを海が囲い、さらにその外側に想像上の土地と海が取り囲んでいる。中国図は黄河・揚子江の2大河川と崑崙山などの山岳、明の2都13省、古代からの9州・11国のほか名所旧跡等の地理情報を、1枚に収めるため変形させているが概ね実際に即して記している。一方日本国図は、南を上にして京都を中心に地理情報を記しているが、概略感は否めない。



天下図 (300 × 345 mm)



中国図 (270 × 340 mm)



東国八道大総 (270 × 340 mm)

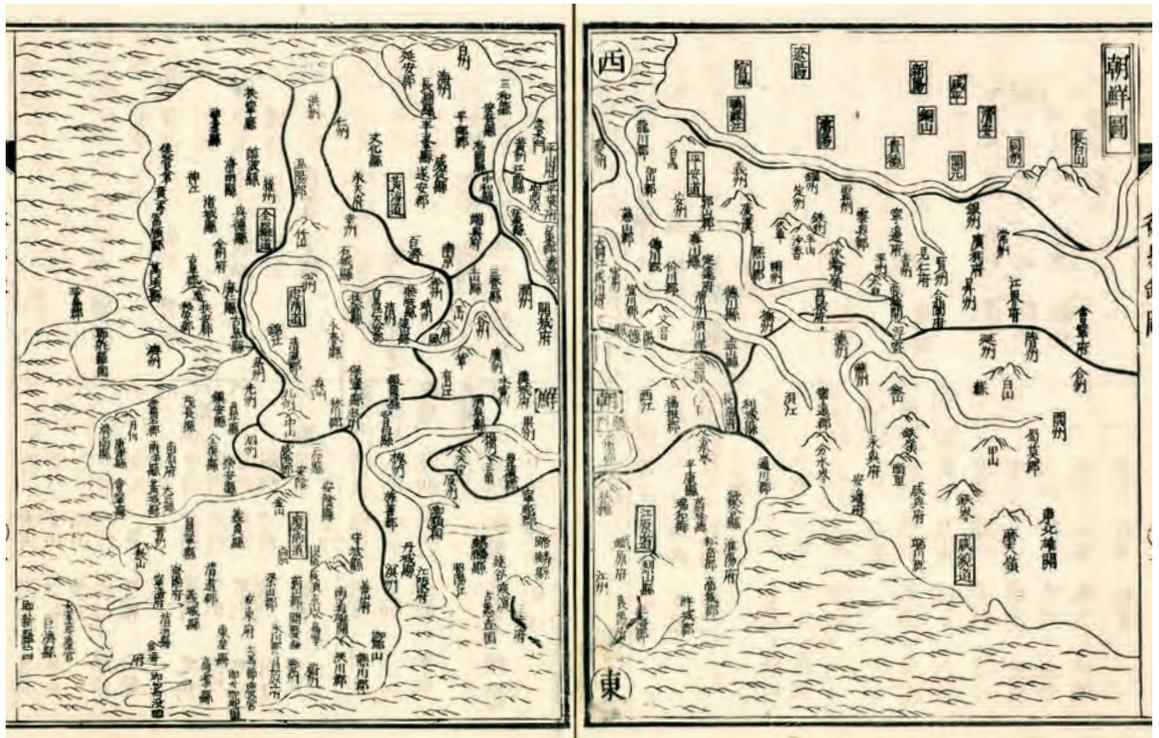


日本国図 (283 × 340 mm)

22 懲毖録 柳成竜撰 1599~1604年頃成立 元禄8年(1695)刊 4巻
 (三木 539)

李氏朝鮮の宰相・柳成竜^{リュソンリョン}の著した史書、懲毖録^{ジンビロク}には、壬辰・丁酉倭乱(文禄・慶長の役)について、その予兆を含めて一部始終が詳細に記録されている。柳成竜が隠居した1598年から没する1607年までの間に書かれたものとされ、日本では元禄8年(1695)に京都の大和屋伊兵衛が朝鮮刊の2巻本を4巻に分け、訓点を施し、貝原益軒の序文を付けた和刻本を発刊し広く読まれた。1712年、本書刊本が日本で出回っていることを察知した朝鮮が日本への書籍禁輸処置に踏み切ることとなった曰く付きの書籍。現在貴重資料として韓国国宝第132号に指定されている。

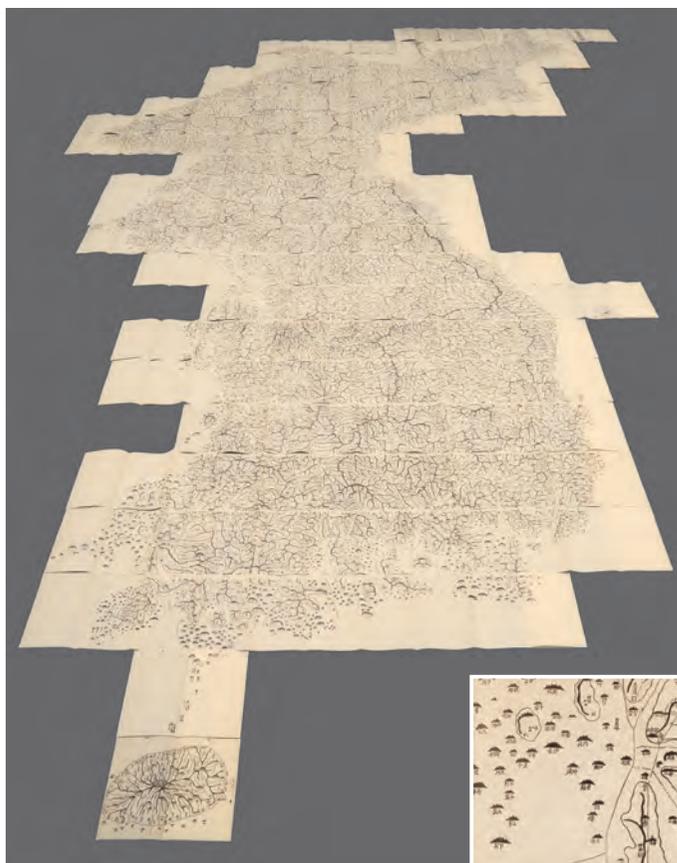
掲出の朝鮮図は本書の冒頭に掲載されているもので、大まかな山川と共に朝鮮国内にある41郡、58州、33府、69県の位置が示されている。



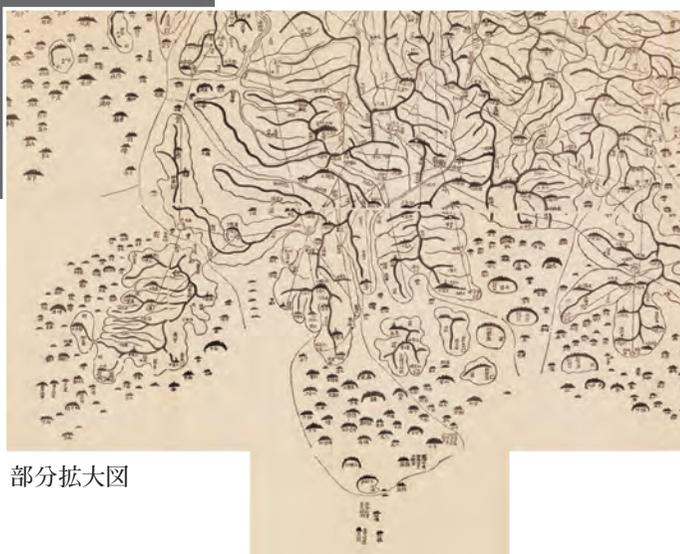
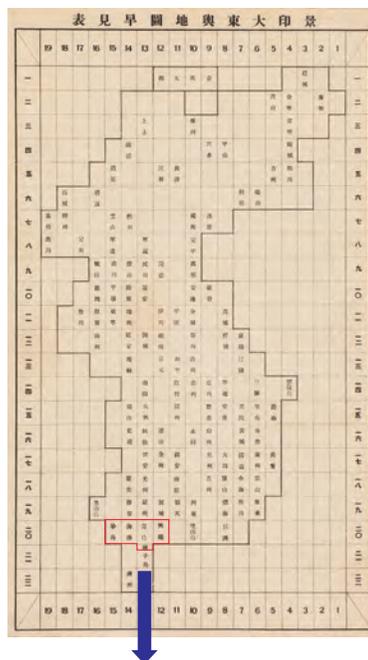
23 大東輿地図 金正浩著 1861年成立 (三木 512)

李氏朝鮮の地理学者・^{キムジョンホ}金正浩が1861年に完成した朝鮮全地図。木版22帖で16万2000分の1に縮小された朝鮮半島全域がほぼ正確に描かれている。22帖の小図を繋げると縦約7メートル、横約3メートルの大図となる。図中には当時の行政拠点があった都市をはじめ、城郭、駅、牧場、王陵等の施設、山と河川、10里毎に目盛りの入った道路、行政区域境界線が記されている。本図の特徴は山々が尾根線で繋がって描かれていることで、これは韓国で「山岳投影法」と呼ばれている。

杏雨書屋所蔵本(三木 512)は、朝鮮総督府朝鮮史編修会所蔵印本に拠り、京城帝国大学図書館所蔵印本を参考にして昭和11年(1936)に京城帝国大学法学部が発刊したもので、原本の約3分の2の大きさである。



小図22舗展開図



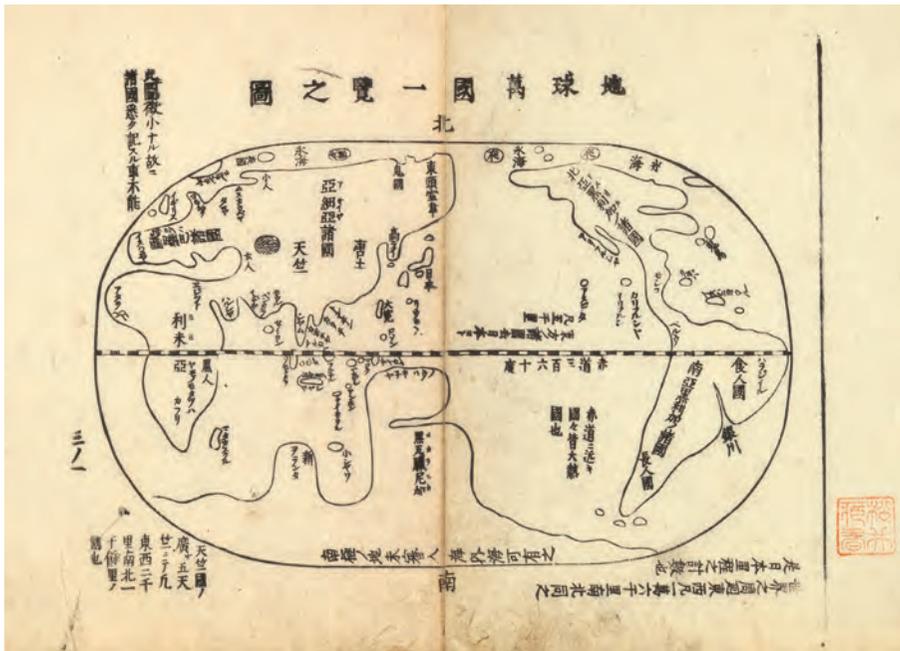
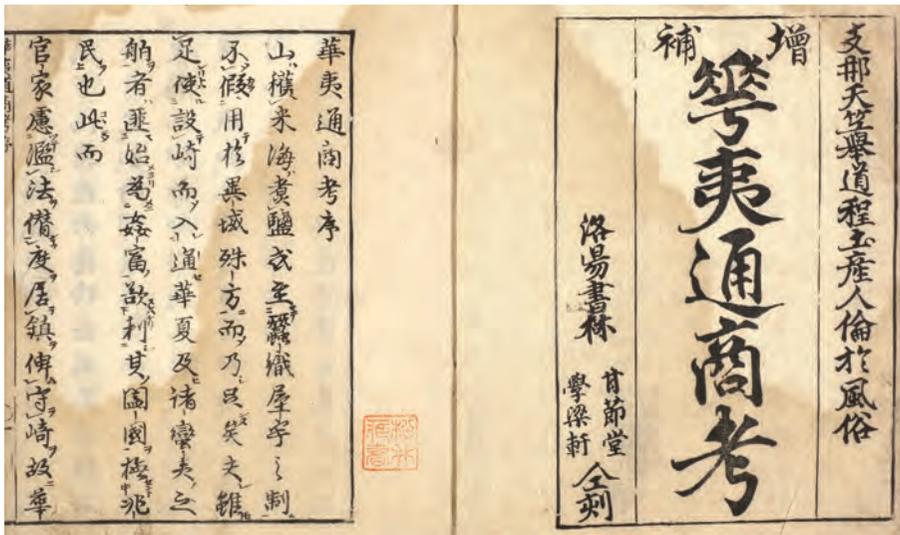
部分拡大図

Ⅲ. 日本で作製された世界地図

24 増補華夷通商考 5巻 宝永5年(1708)刊 西川如見著 (常陸16)

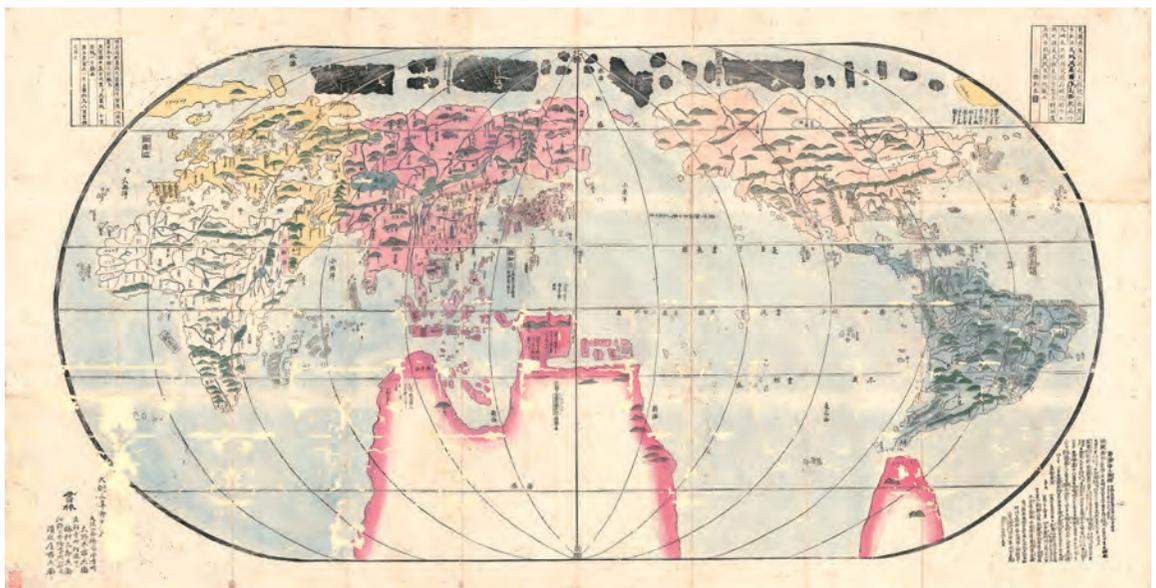
主として通商の立場から外国の地誌を記した日本初の世界地理書。鎖国下、オランダを介して交易していた国々の長崎からの距離、特産物、暮らしや風俗を記す。本書は元禄8年(1695)刊の初編の誤りを修正し、さらに巻五の「外夷増附録」に46か国を書き足した宝永5年(1708)増補版で、本書により南北アメリカおよびアフリカが日本で初めて紹介された。掲載の「地球万国一覽之図」は1602年にイタリア人のイエズス会士マテオ・リッチが作製した楕円形の「坤輿万国全図」(21頁参照)を考慮したであろう世界略図である。

西川如見：江戸時代中期の天文学者、地理学者。本名忠英、通称次郎右衛門、号は如見、求林齋。長崎の貿易商家に生まれ、儒学を南部草庵に、天文学を小林謙貞に学んだ。



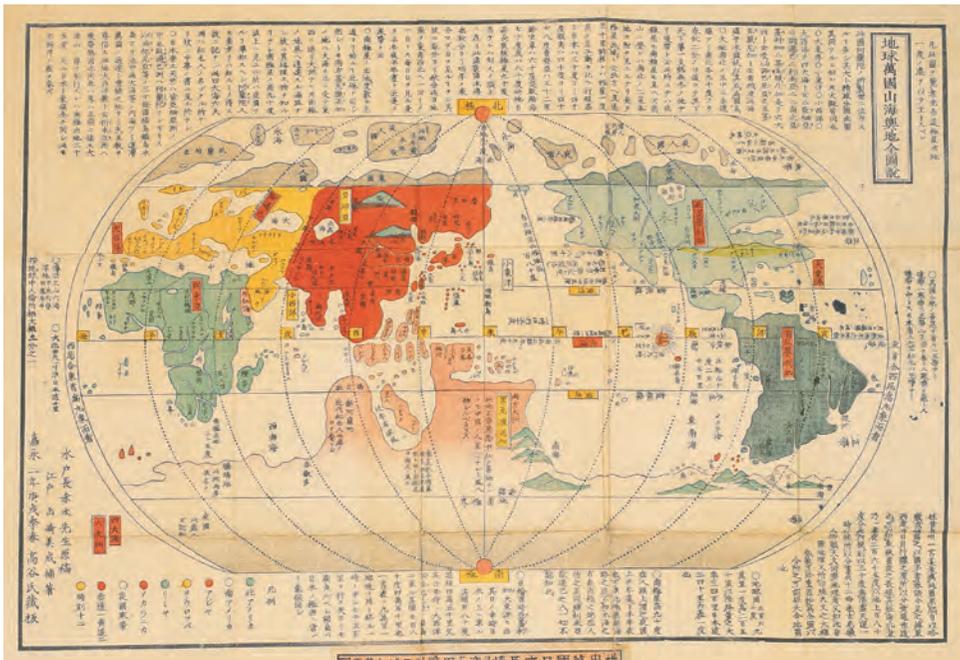
25 万国地球細見全図 1 舗 天明3年(1783)刊 三橋釣客著
850 × 1660 mm (小曾戸 2444)

三橋釣客が天明3年(1783)頃に作製し、大坂で刊行されたマテオ・リッチ系の大型世界地図。「地球一覽図」とも呼ばれる。マテオ・リッチが作製した楕円形の「坤輿万国全図」の流れを汲む。日本の東の海は小東洋、オーストラリアは新ヲランダと記され、北極方面は夜人国として黒く塗られている。また、南極方面の大陸・メガラニカは横に押しつぶされた形で、南米大陸の南にスメラントという大陸が描かれている。また、「坤輿万国全図」では大陸の一部とされていた「野作」を島として描き、天竺(インド)が大きく描かれている。地図右下の余白には、南京 340 里、釜山 140 里、ルソン 1,080 里、ベルシャ 5,100 里、ポルトガル 11,730 里、オランダ 12,900 里など、長崎から世界各都市までの海上距離が例示され、左上には天竺(インド)と唐土(中国)の広さ(東西と南北の距離)が記されている。

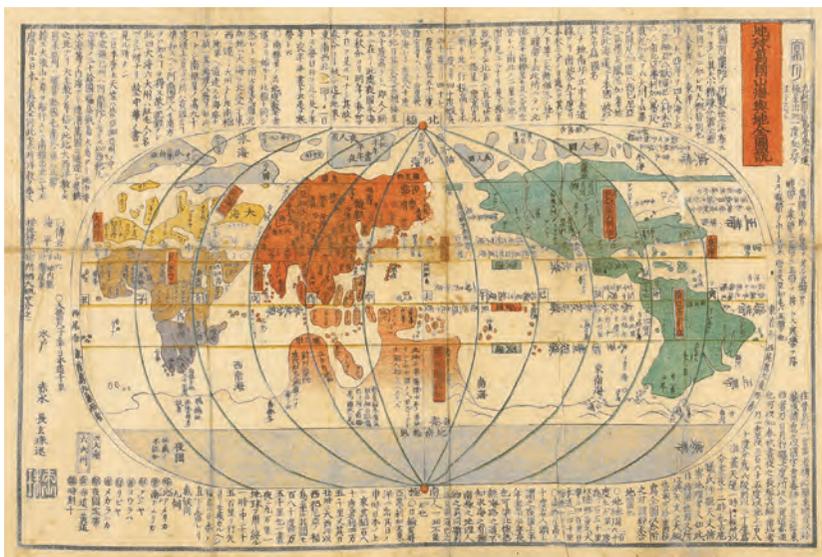


26 地球万国山海輿地全図説 1 舗 天明8年(1788)頃成立 長久保赤水著
(常陸 430、431)

長久保赤水が天明8年(1788)頃に作製したマテオ・リッチ系の、縦横約 100 × 150 cm の大型世界地図。享保5年(1720)に日本で初めて刊行されたマテオ・リッチ系世界図である原目貞清作の「輿地図」を参考に作製された。「輿地図」に比べて本図では天明5~6年(1785~86)の最上徳内らによる蝦夷地探検情報から蝦夷、千島列島が正しく図示されている。ただ本図は赤水没後も刊行され続け、19世紀前半には地図に対する興味の高まりも相まって、小型の異版や、刊行年や版元の記載がない模倣版(海賊版)などが多数発行された。掲出図は嘉永頃発刊の小型版。小型版故か、千島列島付近の表記は簡略化されている。常陸430は嘉永3年(1850)刊で、地図の下部に添付があり、世界各地への距離が現地人物図と共に記載されている。常陸431の出版年は不明。



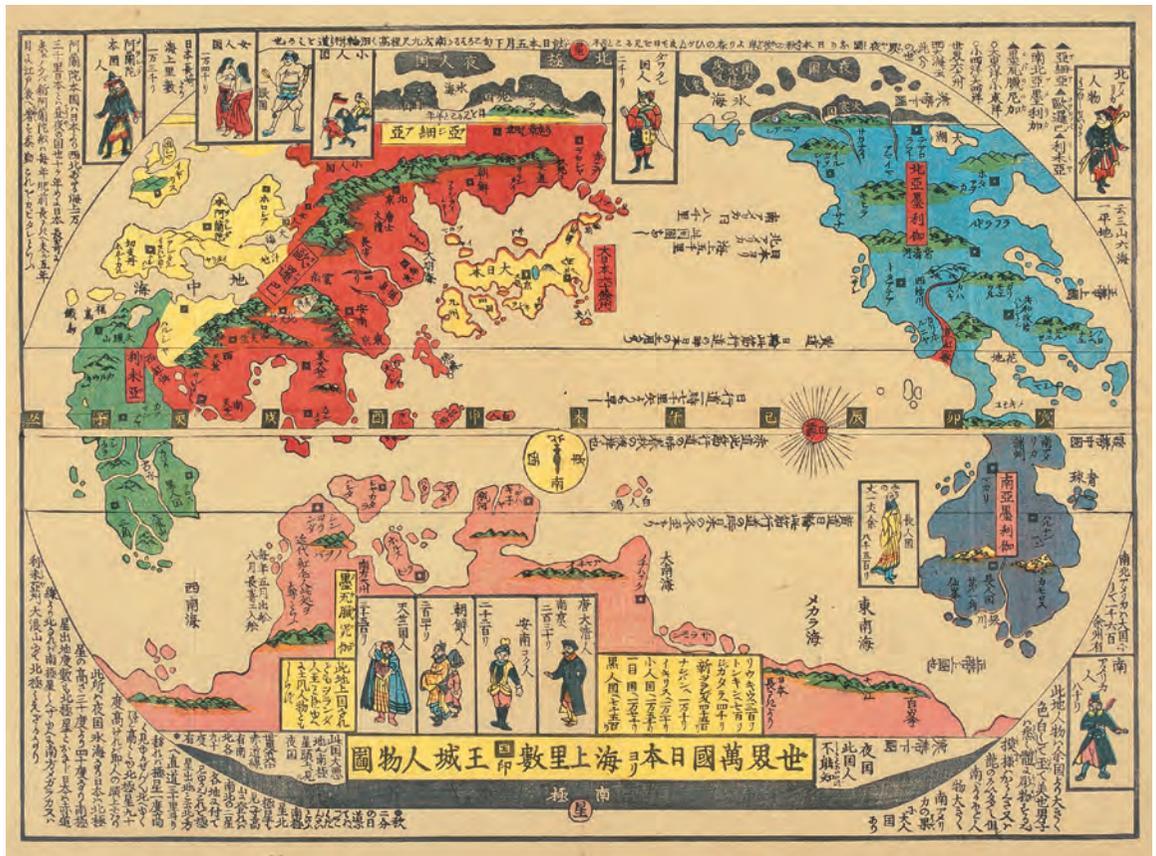
常陸 430 450 × 640 mm



常陸 431 334 × 468 mm

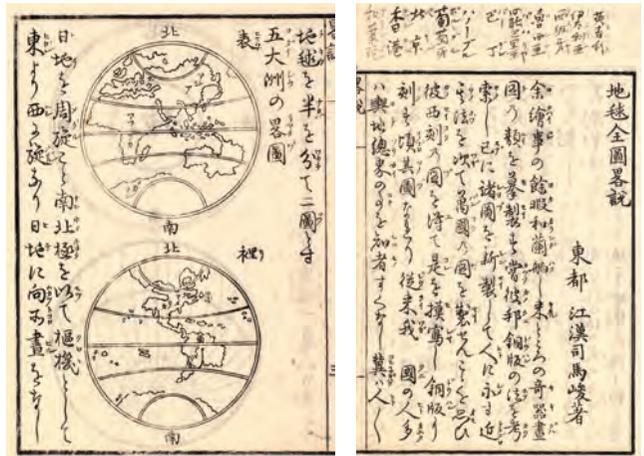
27 世界万国より海上里数図王城人物図 1 舗 著者不明 嘉永年間か
 370 × 510 mm (常陸 437)

木版彩色のマテオ・リッチ系卵形世界図。北極、南極を含め、地球上のすべての大陸が示されているが、「小人国」「女人国」「一目国」などの想像上の国名は中国古来の世界観からのものと思われる。付属情報として日本から世界各地までの距離が示され、彼の地の人物像が描かれているのは前頁の常陸 431 と同様であるが、想像上の国々についてもそこまでの距離と人物図が描かれているのは滑稽でもある。地理的に正確な地図類がある程度幕府の統制下に置かれる中で、このような通俗的な世界地図が庶民の興味を満たすため多量に印刷、販売された。



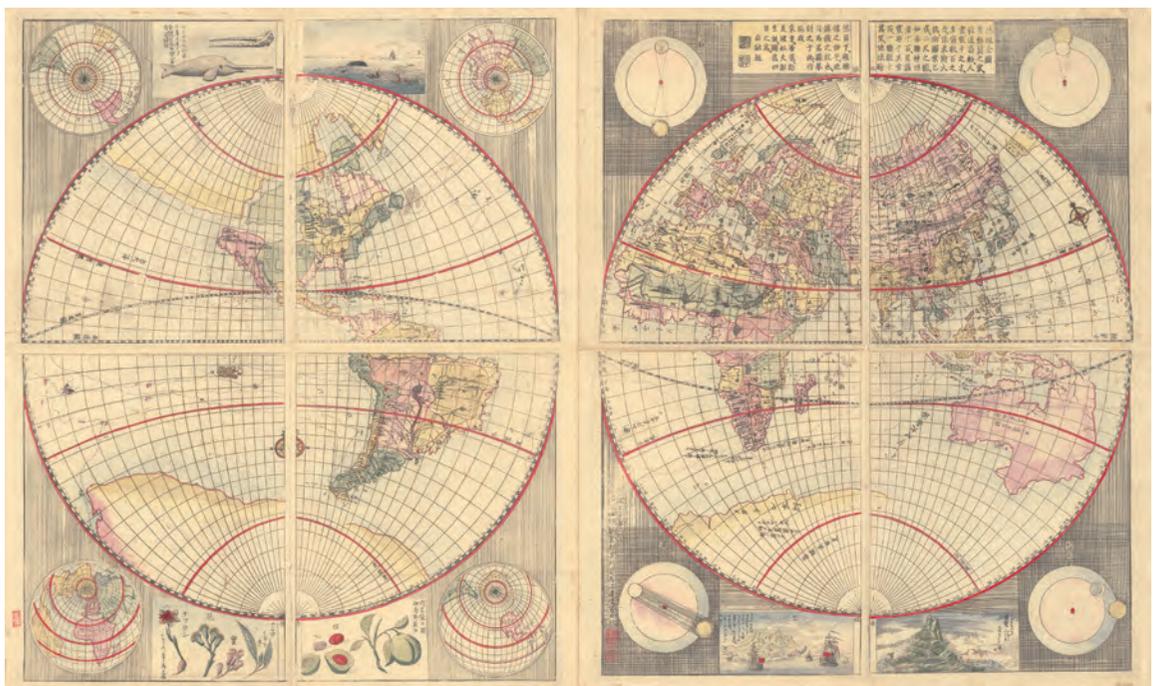
28-1 地球全図略説 1巻 寛政9年(1797)刊 司馬江漢著 (二宮259-1)

『地球全図略説』は、司馬江漢作製の「銅版地球全図」の解説書として刊行された『輿地略説』を改題・増補して刊行された。絵師でありながら大槻玄沢らの蘭学者と深い親交があった江漢が著した地理書で、世界各地の風俗や産物などを絵入で紹介している。冒頭に日食、月食、天動説、地動説の説明がある。



28-2 銅版地球全図 1舗 寛政4年(1792)刊 銅版 司馬江漢著
560 × 910 mm (二宮259-2)

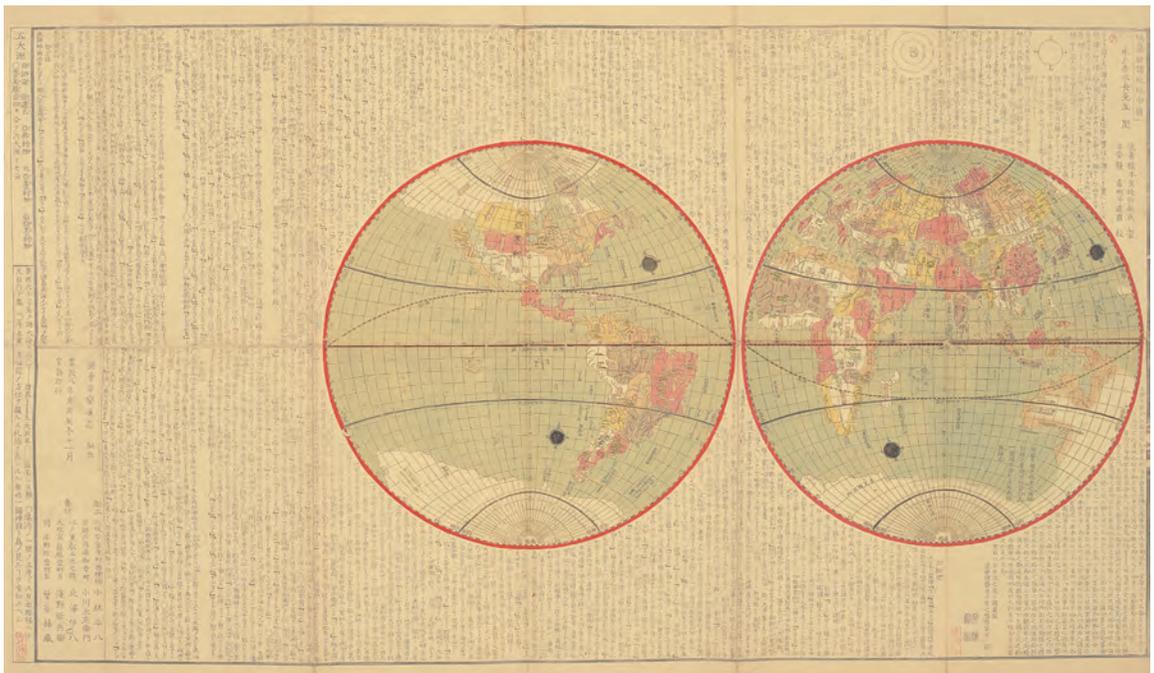
日本初の銅版による世界図であると共に初の両半球図。司馬江漢著『地球全図略説』の対応図として寛政4年(1792)に初版が刊行された。江戸後期の洋風画家として知られる江漢は、日本で初めて銅版画(エッチング)を制作した人物としても知られる。銅版画創製のためのオランダ語資料翻訳で大槻玄沢と親交があった江漢は、この「地球全図」の原図となった1730年頃にフランスで発刊されたモルティエの地図帳に収められたA. H. ジャイヨ作製の世界地図も玄沢から入手したとされる。日本北辺は江漢が所持する最新情報に基づいて改訂され、両半球図の余白に外国の風景・産物、月の満ち欠けや日食・月食の説明図を配すなど、多才な江漢の面目躍如たる作品といえる。



29 啁蘭新訳地球全図 1 舗 寛政 8 年 (1796) 刊 木版 橋本宗吉著
560 × 934 mm (常陸 414)

司馬江漢の地球全図に次いで刊行された両半球世界図。エレキテル研究で有名な大阪の医家・蘭学者であった橋本宗吉の作製、「地球万国山海輿地全図説」の著者・長久保赤水の校閲による。日本で初めての両半球図である司馬江漢の「地球全図」(寛政 4 年 (1792) : 銅版) から 4 年後の発表であるにもかかわらず、カリフォルニア半島は島として描かれ、ニューギニアはオーストラリアと地続きで、オーストラリア南西部は不分明で未知の大陸マゲリカンに続いているなど、江漢が参考にしたジャイヨの地図より古い 17 世紀後半の世界図を手本にしたものと思われる。投影法は球状図法。東西両半球図のまわりには和漢の史書・地理書を典拠としたヨーロッパ・北アメリカなどの地誌的情報が細かく書き込まれている。

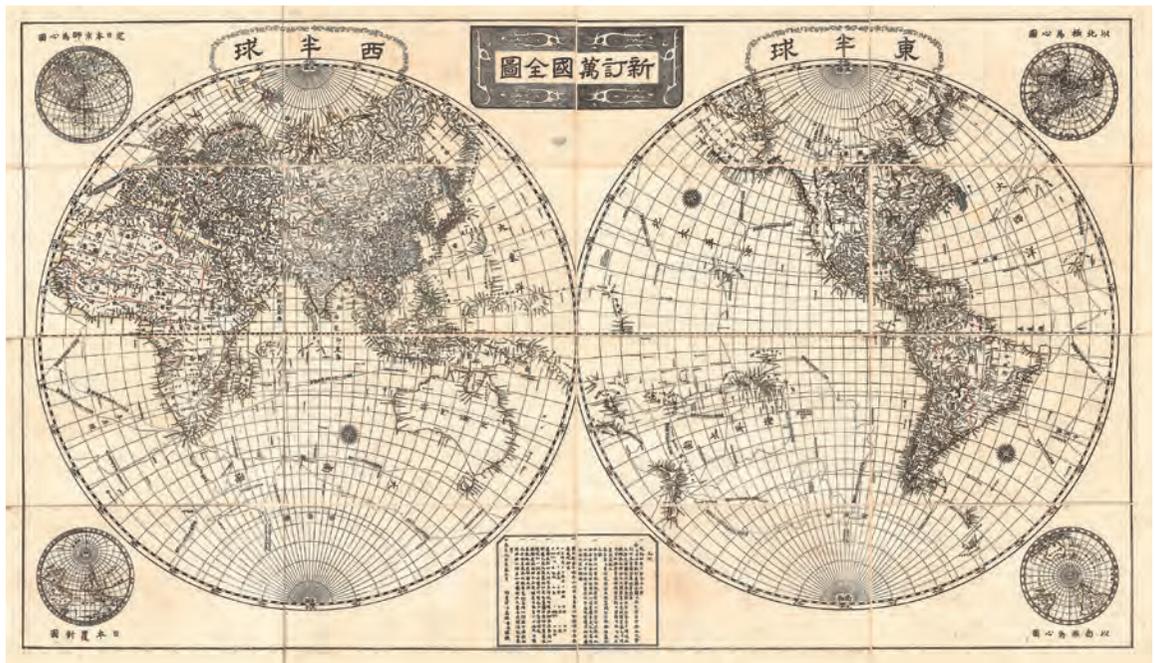
* 啁蘭はオランダの音訳



30 新訂万国全図 1 舗 文化7年(1810)成立 文化13年(1816)刊 銅版
高橋景保編、亜欧堂田善刻 1140 × 1970 mm (二宮 255)

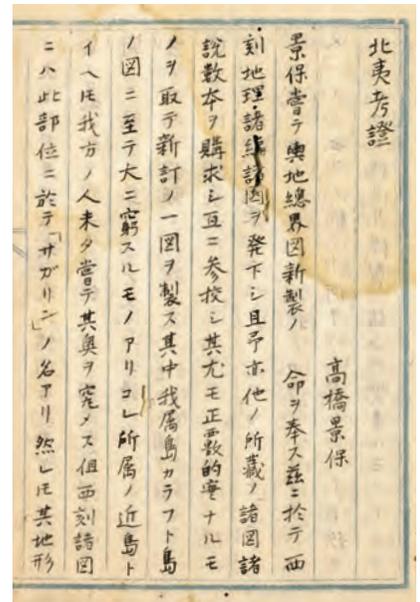
文化4年(1807)に幕府の命で世界地図の作製を命じられた天文方・高橋景保^{たかはしかげやす}が、天文学者・^{はざましげとみ}間重富や通詞・馬場佐十郎貞由らの協力の下、3年の歳月をかけて完成させた横軸平射図法による両半球世界図。幕府天文台や紅葉山文庫所蔵の地理書・地図類をすべて研究したうえで、世界探検航海の情報を反映して英国人アーロン・アロウスミスが作成したメルカトル法世界地図(アロウスミス方図)を底本に、前年(1809年)に間宮海峡を発見した間宮林蔵の樺太探検情報を盛り込んだ、当時最新の世界地図であった。後年、シーボルトから本図を見せられた探検家クルーゼンシュテルンがその精確さに感嘆、絶賛したとされる。それまでの西欧製両半球図と同様、カナリア諸島を起点とし、10度毎に経線が引かれているが、経度は記入されていない。副図として図幅右上に南極中心の南半球図、右下に北極中心の北半球図が、左上に京都を経度の起点とした「定日本京師為心図」、左下にその対称図である「日本覆対図」が配されている。

凡例にある文化7年は景保が手書きの地図を完成させた年で、刊行は文化13年、印刷は当時の最新技術であった銅版彫刻が用いられ、刻したのは『東都名所図』や『医範提綱内象銅版図』でも有名な銅版画家、亜欧堂田善であった。



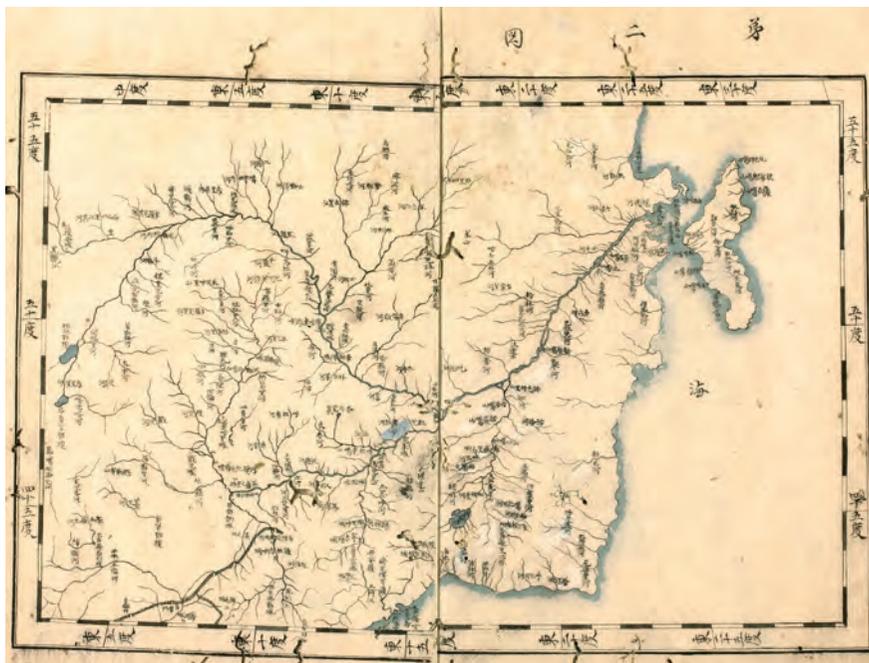
31 北夷考証 1巻 文化6年(1809)成立 高橋景保著 (二宮249)

幕府から世界地図作製の命を受けた高橋景保が、入手できるすべての資料を研究し、正確な最新地図作製の基本姿勢を纏めたもので、作製すべき地図の概要、作製方針、その理由等を記している。景保は、マゼランの世界一周以降、探検航海を繰り返して各地の測量情報を取り込んで修正を繰り返す西洋の最新地図を基本とすべきこと、その西洋地図においても不正確な蝦夷、北蝦夷部分は日本の探検家の最新情報を取り入れることとし、「樺太」は西洋地図にある「サガリイン」と同じ「島」であり、半島ではないという「樺太一島論」を採用した。巻末には新地図校訂のために考慮すべき4種の地図(『乾隆年間所刻十六省九辺図』、ピートルホンデ著『万国紀事』の韃靼地図、「諳厄里亜国1780年製世界地図」、「閩宮林蔵実験カラフト島図」と、それらに則って作製する新地図の約図、合わせて5図を附図として挙げている。



附図第二図：乾隆年間所刻「十六省及九辺図」黒龍江口図

高橋景保が見た本図の原本は、大坂の文人画家にして本草学者、蔵書家でもあった木村兼葎堂(孔恭)所蔵の乾隆年間所刻「十六省及九辺図」で、官が歴局に命じて模写させたもの。高橋景保と同時代の地理学者・山田聯は「本図は乾隆年間ではなく、康熙年間に作製された「皇輿全覽図」であろう」とした。景保自身も『北夷考証』の中で「製作年が乾隆年間であるかは不明である」旨を述べている。『北夷考証』の第二図はその「黒龍江口図」で、黒龍江河口の東方に1つの島を描いている。



第二図(黒龍江口図)

附図第三図：デ・ホントの地理書『万国紀事』所収の韃靼図

歴局の和蘭訳士・馬場佐十郎貞由が、オランダの書籍商ピーテル・デ・ホント (Pieter de Hondt) の地理書『万国紀事』中に見出した図。佐十郎からこの話を聞いた景保は2人で2図を比較し、「漢字と洋字の違いこそあれ、乾隆年間所刻「十六省及九辺図」と寸分の差もない」ことを確認した。本附図第三図の地名は洋字からカタカナ書きに改められている。景保は『北夷考証』本文中で両図にある地名30か所を比較して列記し、全て同じことから両図が同じものである証左と述べている。附図第三図の表題にある「西士ピートルホンデ」とは「デ・ホント」のことである。



第三図(韃靼図)の右辺

附図第四図：諸厄里亜国 1780 年製世界地図の部分図

景保が最も重要視した 1800 年頃改訂の「アロウスミス方図」(11 頁参照) の左端に描かれた、いわゆるラ・ペルーズ型の日本北方海域の部分図。景保が本図を 1780 年製としたのは、タイトルにあるクックの航海の最終年である 1780 年を刊行年と誤認したためという説が有力である。

附図第五図：間宮生実験図

1808 年夏の間宮林蔵と松田伝十郎の南樺太、および翌 1809 年にかけての間宮林蔵単独樺太西岸探検の情報を盛り込んだ樺太図。最初の探検の実験図と二度目に林蔵が樺太南部のトンナイより景保に送った見聞図を併合して此の図を作ったと記されている。景保は樺太が「島」であることの根拠とすべく作製・掲載したと思われる。



第四図

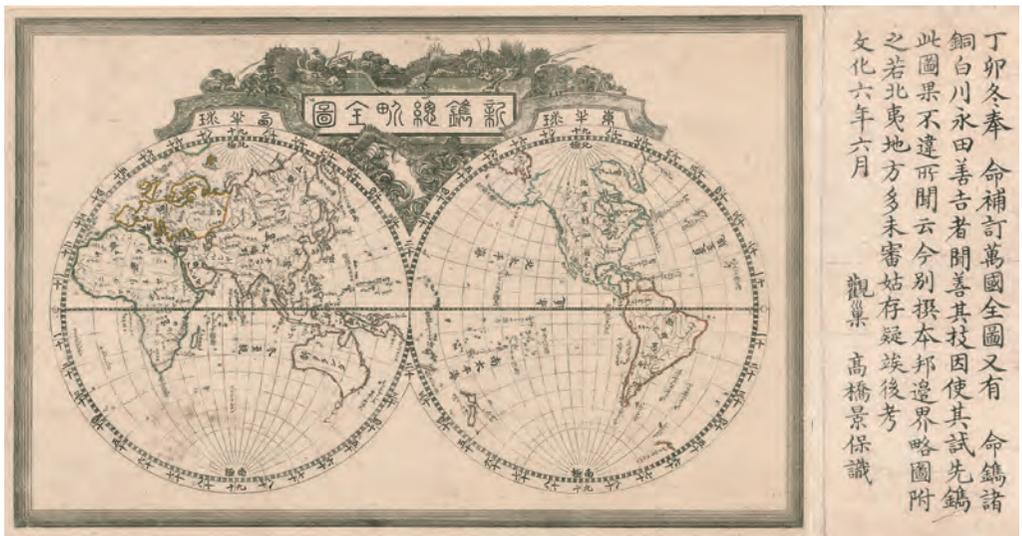


第五図

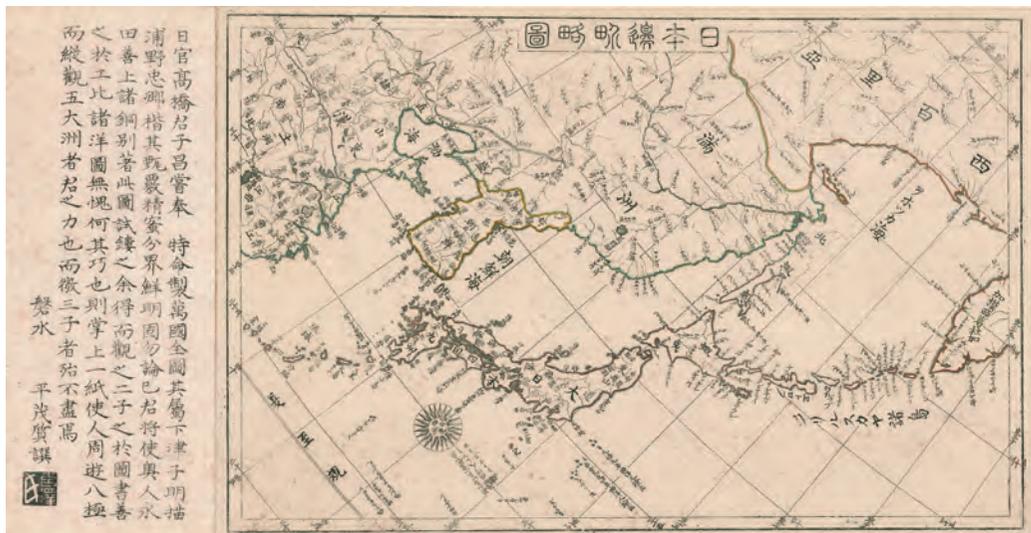
32 銅刻地球全図(新鑄總界全図、日本境界略図) 1巻 文化6年(1809)

高橋景保著、大槻磬水(玄沢)跋、亜欧堂田善刻 (二宮 258)

新鑄^{せん}總界全図に日本境界略図を附す。両図とも銅版刷りで国境部分が筆で彩色されている。新鑄總界全図は、文化4年(1807)に幕府から万国全図作製を命ぜられた高橋景保が作製した試作図で、後の新訂万国全図と同様の平射図法による両半球世界図となっている。経度はカナリア諸島を0度とし、ユーラシア、アフリカ、オーストラリア大陸を西半球、南北アメリカ大陸を東半球としており、欧米製の両半球図とは東西が逆になっている。附属の日本境界略図は経度が京都を0度として描かれた日本付近の拡大図。景保はアロウスミスの1801年製アジア図(13頁参照)も参考にしたが、北海道は伊能忠敬と間宮林蔵の実測図を採用し、日本北辺は間宮林蔵の情報を加味しており、当時の世界最新地図となっている。樺太は島となっているが、間宮未到地は細い線で描かれている。本図は後にシーボルト著『日本』に転載され、間宮海峡が Str. Mamiya-(Seto)-1808として紹介された。



新鑄總界全図 (230 × 350 mm)

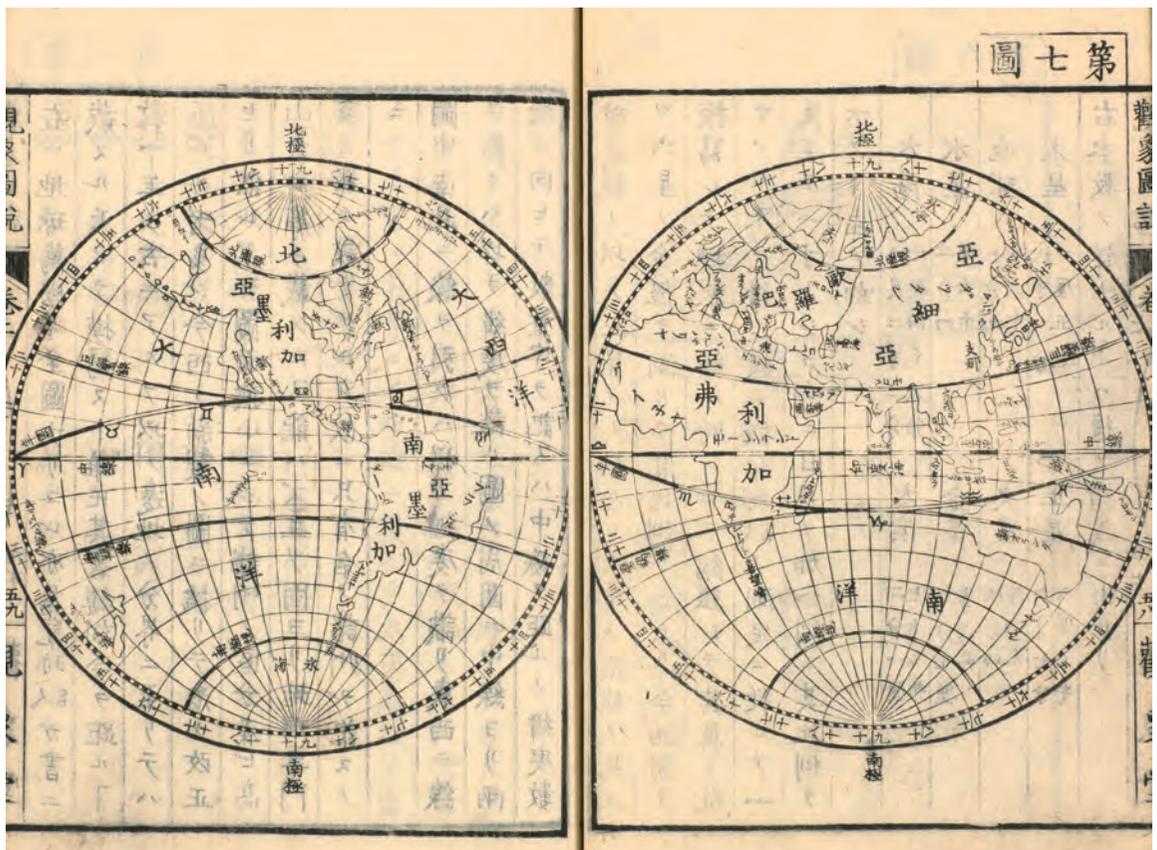


日本境界略図 (230 × 350 mm)

33 理学入式遠西観象図説 3卷 文政6年(1826)刊 吉雄俊蔵述、草野養準編
(乾々斎 5256)

日本人の手になる地動説以降の体系的な天文学書。オランダ通詞・吉雄耕牛の孫で尾張藩蘭学者・吉雄俊蔵が家塾「観象塾」で行った講義を、門人の一人である草野養準が編纂し、出版したものである。ベンジャミン・マーティンの『Filozooftische Onderwyzer; of Algemeene schets der hedendaagsche Ondervindelyke Natuurkunde』(1744 アムステルダム) (9頁参照)、ヨハネス・マルチネットの『Katechismus der Natuur』(1782 アムステルダム) 等のオランダ語版自然科学書に依っているが、巻一の第7図として載る地球両半図について、「マーティンの地図は数十年前のもので不正確なので最新の西洋地図を参考に修正した」と記されている。

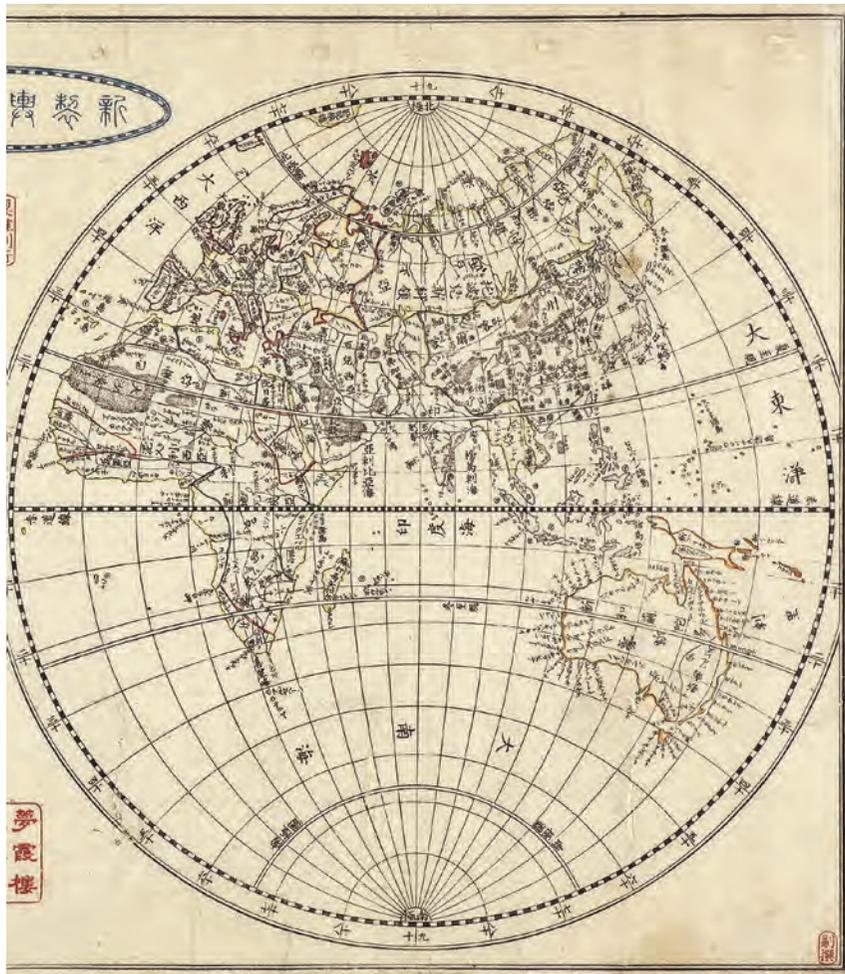
吉雄俊蔵：諱は尚貞、名は俊蔵・常三、号は南阜・観象堂。吉雄耕牛の孫。30歳で尾張藩侍医となり、以後藩命により翻訳にも従事した。編著書は医書『和蘭内外要方』(1820)、天文学書『遠西観象図説』(1823)、農家のための『晴雨考』(文政・天保期)、雷管銃に関する『粉砲考』(1842頃)など多数。雷管銃に使用する衝撃に弱い火薬の雷汞粉らいこうふんの作製実験中に雷汞粉の爆発によって死去した。



34 新製輿地全図 1巻 天保15年(1844) 箕作省吾編

350 × 1180 (335 × 590) mm (新杏2514)

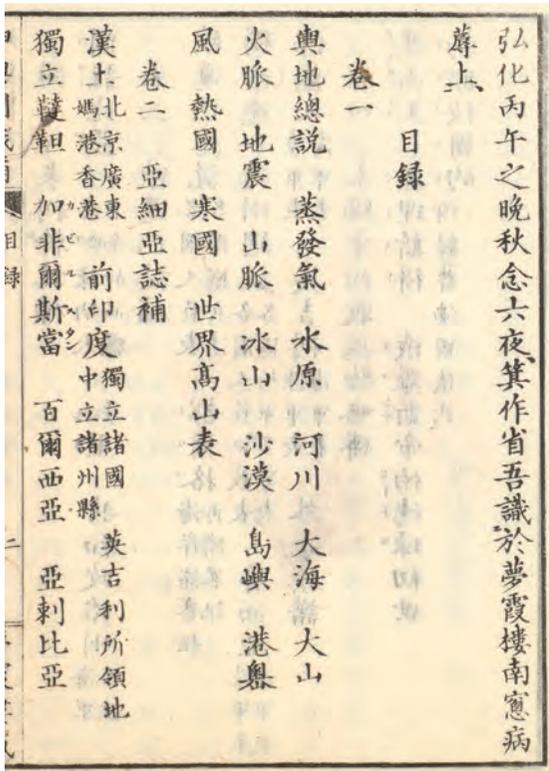
洋学者・地理学者の箕作省吾^{みつくりしやうご}が1835年刊のフランスの世界地図を編訳した銅版世界地図。大槻磐溪撰。イギリスは「エ」、スペイン(イスパニア)は「イ」のように欧米列強の植民地が地図上にカタカナ記号で明示されていることが特徴。翌年、省吾が義父・箕作阮甫^{げんぽ}の協力を得て発刊した『坤輿図識』は本図解の解説書にあたる。



右半球拡大図

- 35 坤輿図識 5卷 弘化2年(1845)刊 箕作省吾著 (常陸155)
 36 坤輿図識補 4卷 弘化3-4年(1846-7)刊 箕作省吾著 箕作阮甫補
 (常陸156)

箕作省吾が数種の蘭書を基に編述した地理書。正編五卷には六大洲(亜細亜、欧邏巴、亜弗利加、南亜墨利加、北亜墨利加、豪斯多辣里)の総括、諸国の沿革や人口、気候や産業等について記載され、続編では巻一で自然地理に関する正編の補完、巻二以降でアヘン戦争やインドの現状、南米の独立戦争、ヨーロッパの軍事勢力図、アレクサンダー大王、ピョートル大帝、ナポレオン等の伝記等が紹介されている。幕末最も優れた地理書といわれ、その最新の世界情報は幕末の開明派として有名な肥前藩主・鍋島閑叟(直正)や大老・井伊直弼の外交指針となり、吉田松陰や坂本龍馬など幕末の志士たちの世界観にも大きな影響を与えたといわれている。省吾は『坤輿図識補』の完成目前に吐血して倒れ、義父・箕作阮甫の補校により全4巻を完成させたが、発刊を見ずに26歳の若さでこの世を去った。



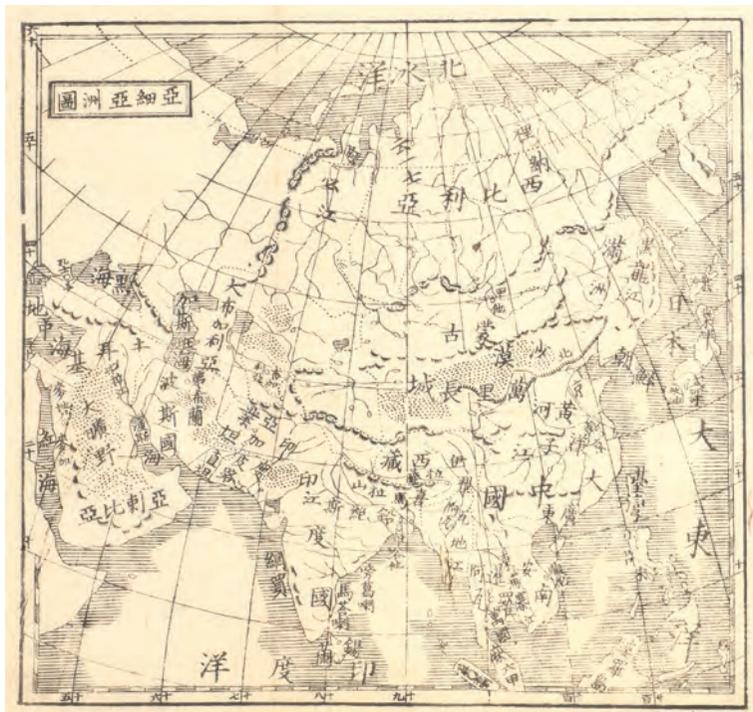
坤輿図識補



坤輿図識

37 地球説略 3巻 万延元年(1860)刊 箕作阮甫訓点 (常陸 227)

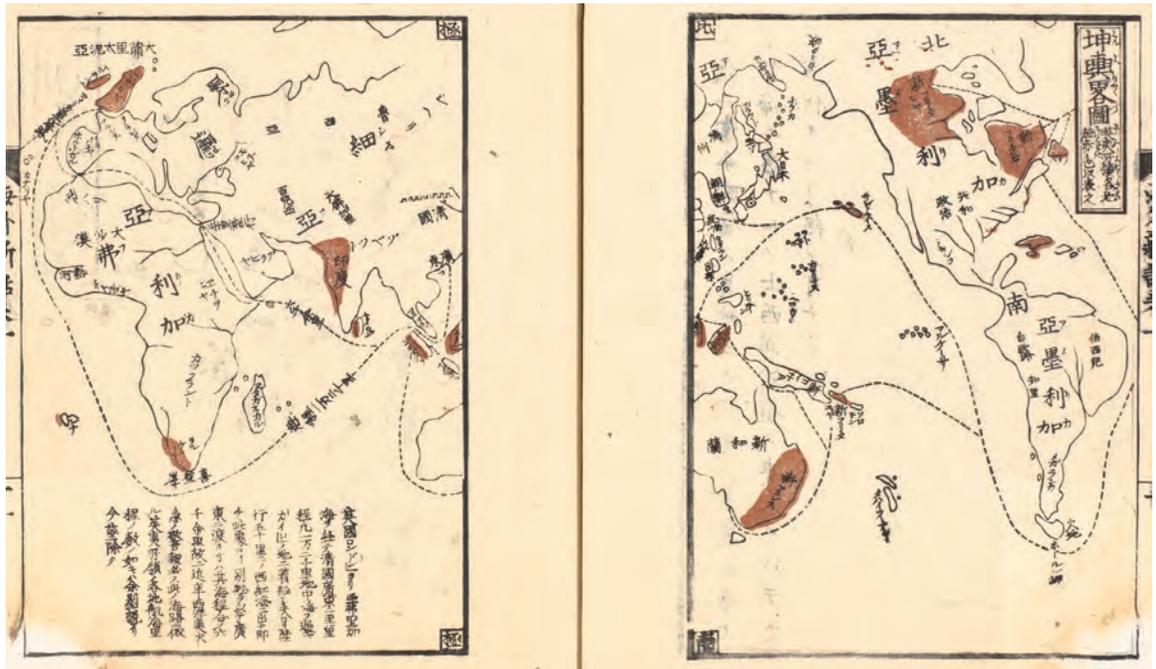
1856年に寧波で発刊されたアメリカ人牧師リチャード・クオーターマン・ウェイの原著を、蕃書調所教授・箕作阮甫が校訂、訓点を施して万延元年(1860)に発刊した。地球球体説、地球・大洲・大洋の各図説等を概説後に、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、アフリカの順で地誌が記されている。阮甫の校訂でキリスト教に関する記述は削除されている。附図としては「地球両半球図」と「亜細亞洲図」が収載されている。



亞細亞洲圖 (195 × 205 mm)

38 海外新話 5卷 嘉永2年(1849) 嶺田雋(楓江)著 (常陸177)

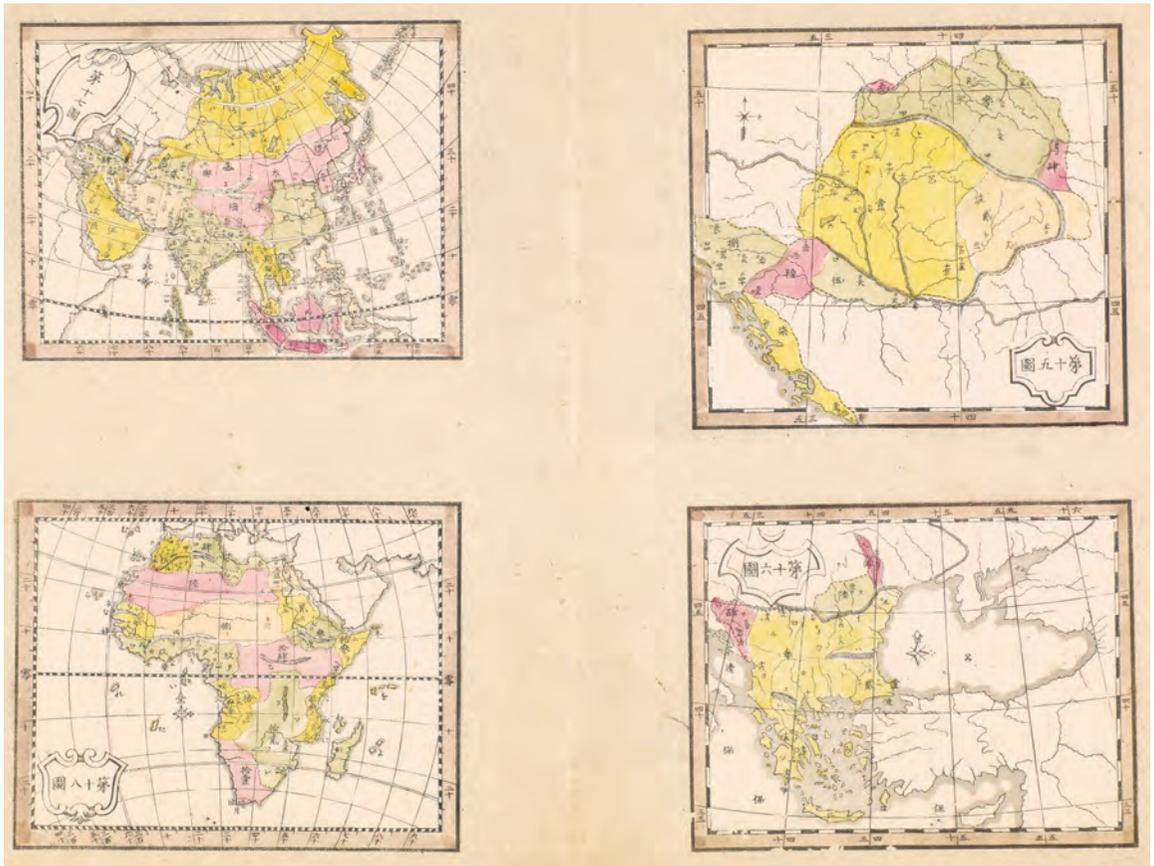
田辺藩士で幕末の儒学者・嶺田楓江がアヘン戦争の実態を知らせるために刊行した書。世界および中国の略図を付し、当時のイギリスの軍事力やアジア侵略の様子を多くの挿絵と共に紹介している。本書は発刊直後に幕府によって発禁処分となり、著者楓江は押込処分の後、江戸・京・大坂の市中立ち入り禁止、いわゆる「三都払い」となったが、幕末の日本人の国際感覚を一変させたと言われる。



坤輿略図

39 地学正宗図 2巻 嘉永4年(1851) 杉田玄瑞著 (常陸176)

杉田玄白の曾孫で医者・蘭学者の杉田玄瑞が嘉永4年(1851)に発刊した『地学正宗』は、世界各国の地理、気候、物産等を紹介した地理書だが、7巻7冊の本編に地図帳『正宗図』2巻20図が付随しているのが特徴である。オランダの地理学者で教師でもあるペーター・ヨハネス・プリンセンの地理学教科書『Geographische Oefeningen; of Leerboek der Aardrijkunde, met XX Genommerde Kaarten.』(1817年刊)(16頁参照)が原本。学術書というよりは教科書に近く、幕末における日本人の世界観形成に大いに貢献した。杏雨書屋には『地学正宗図』のみが架蔵される。



40 満洲魯西亜臨海図 1 舗 嘉永6年(1853)頃 愛我山房 445 × 675 mm
(新杏 2515)

北海道から満洲、カムチャツカ半島まで、オホーツク海沿岸部を描いた地図。樺太南部と択捉島までの千島を日本と同色で描いている。北海道、千島列島は比較的正確に描かれているが、樺太北部は満洲と繋がっており、その北にサガイリンが島として描かれている。明治大学図書館蘆田文庫蔵本の袋に「江都 愛我山房蔵梓 嘉永癸丑晩冬」とあることから、嘉永6年(1853)頃の成立と考えられる。間宮海峡の発見から40年以上経った19世紀半ばにおいても、樺太が島であることは一般にはまだ共有されていなかったことが分かる。



41 官許射号万国訳図 2 舗 明治9年(1876)刊 大屋愷叟訳 (常陸442)

大屋愷叟(暁山)による両半球世界図。明治初期の小・中学校の教材として作製された。木版色刷りの明治9年(1876)刊の初版版主は石川県学校用出版会社で、凡例には都府、府・商市・開港場等、国界、山脈、大河、砂洲、暗礁とある。江戸期に日本で作製された多くの両半球図とは東西が逆、すなわち西欧型に戻っている。西半球図には大陸名、国名をはじめ地理的名称が記載されているが、何故か東半球図は地理的名称が欠落している。

杏雨書屋所蔵品には刊記は無く、当該部に「東備 野田要吉模写」とあることから、備前国邑久郡磯上村(現・岡山県瀬戸内市)出身で大阪・奈良で小・中学校の教員を務めた後、兵庫・報徳商業学校(現・報徳学園)校長を務めた野田要吉(俳号は別天楼)が明治中期に模写したものと思われる。出版品と異なり、東半球図にも西半球図と同じく地理的名称が記載されている。



西半球図 1050 × 950 mm



東半球図 1055 × 955 mm

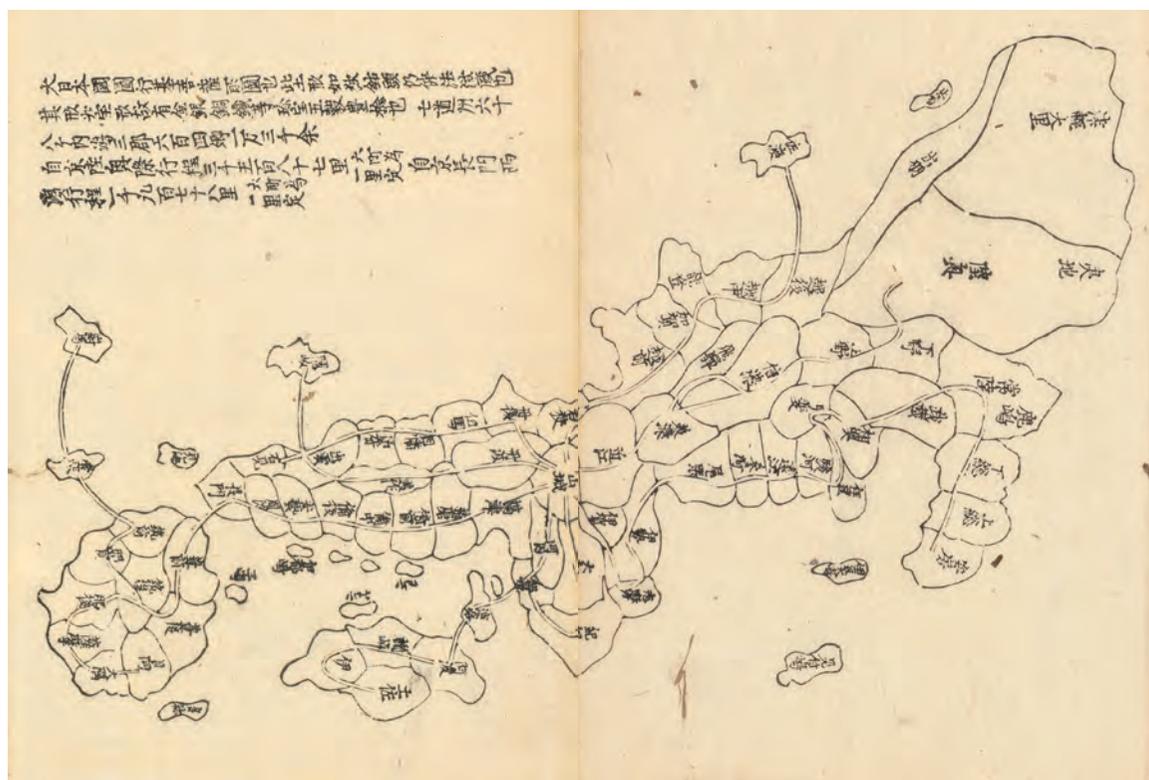
IV. 日本で作製された日本地図・日本周辺図

42 ^{しゅうがいはしやう}拾芥抄 3巻 南北朝時代成立 慶長活字刊本 (杏雨 1920)

南北朝時代に著された類書、いわゆる百科事典で、略要抄、拾芥略要抄とも呼ばれる。撰者については諸説あるが、藤原公賢編、藤原実熙補という説が有力である。貴族としての必須事項を72部門に分け、訓と注釈を記したもの。その中巻第23本朝国郡部に行基図が掲載されている。

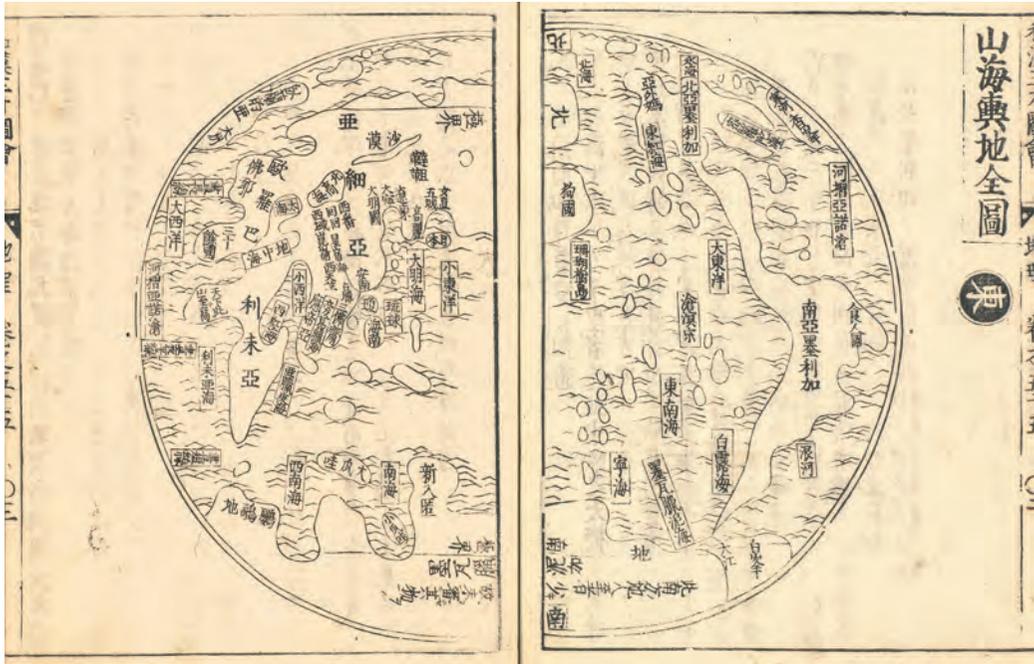
大日本国図 (行基図)

図の左上に「大日本国図は行基菩薩図する所也」との記載があり、奈良時代の僧・行基が作ったとの説がある。ただ、行基が地図を作成したという記録がないこと、山城国(平安京)を図の中心としていることなどから彼に仮託したものという説が有力である。卵型の五畿七道の国々が連なって街道で繋がれている。東西にまっすぐ伸びた日本列島の形状は独鈷杵に擬えており、少なからぬ仏教の影響がうかがえる。原図は存在しないが、中世から江戸初期まで日本で作られていた日本地図の原型となり、本系統の日本図はすべて行基図と総称される。掲出の行基図は『拾芥抄』(慶長活字刊本)所収のもの。

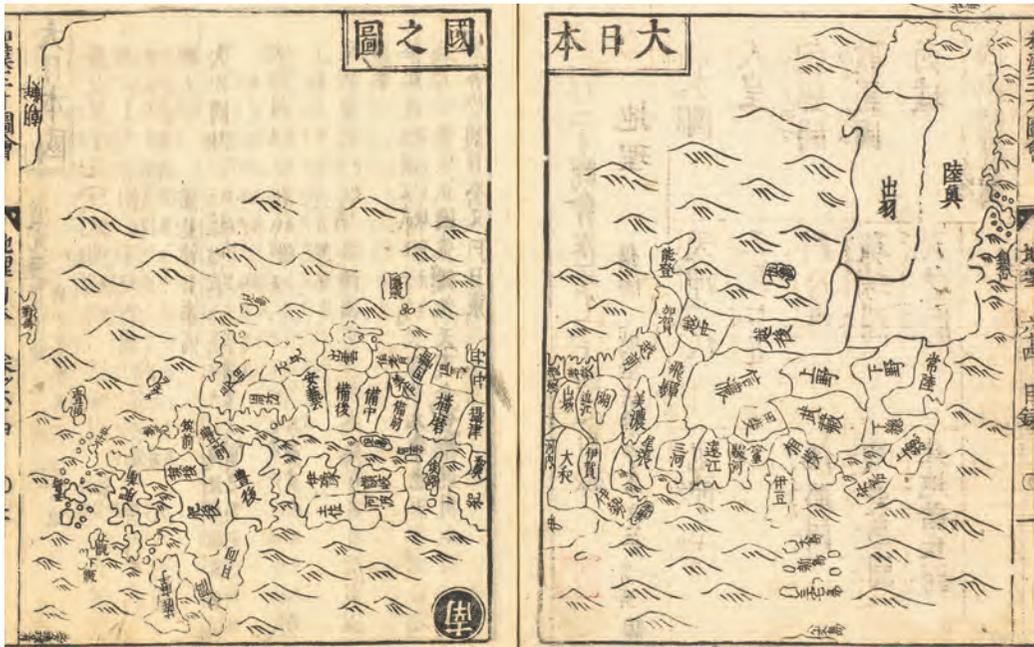


43 和漢三才図会 105 卷 正徳 2 年 (1712) 成立 寺島尚順 (良安) 著
 (小曾戸 2367)

中国の『三才図会』(19 頁参照) に倣い、和漢の万物を天部・人部・地部の「三才」に分類して図解・漢文解説した類書。地図としては『三才図会』に掲載される「山海輿地全図」「華夷一統図」等はほぼ修正無く掲載され、「大日本国之図」「北地諸狄之図」「蝦夷之図」「琉球図」等が追加されている。



山海輿地全図



大日本国之図



北地諸狄之圖



蝦夷之圖



44 三国通覧図説 1巻5 舖 林子平著 天明5~6年(1785-6) (常陸69)

林子平により書かれた軍事地理書。天明5年(1785)に蝦夷国全図、三国通覧全図、朝鮮八道図、琉球三省三十六嶋図、無人島八十余山図から成る附図5図が刊行され、その翌年に解説書一巻が刊行された。日本を中心に隣接する三国(朝鮮、琉球、蝦夷)と無人島(ぶにんとう、むにんしま:小笠原諸島)を含む日本近海の島々の地理、風俗を解説し、特にロシアの蝦夷地侵略の危険性とそれに対抗すべく蝦夷地開発の重要性を指摘している。幕末の海防思想の普及に貢献したが、寛政4年(1792)に同じく子平著の『海国兵談』と共に禁書絶版となった。ロシアを経てヨーロッパに伝えられ、1832年にパリにて翻訳出版された。後の小笠原諸島の日本帰属問題で日本側の有力資料となったとされる。本書附図の島の色分けが、竹島、尖閣諸島領有権問題において、韓国、中国の領有権主張の根拠の一つとなっている。



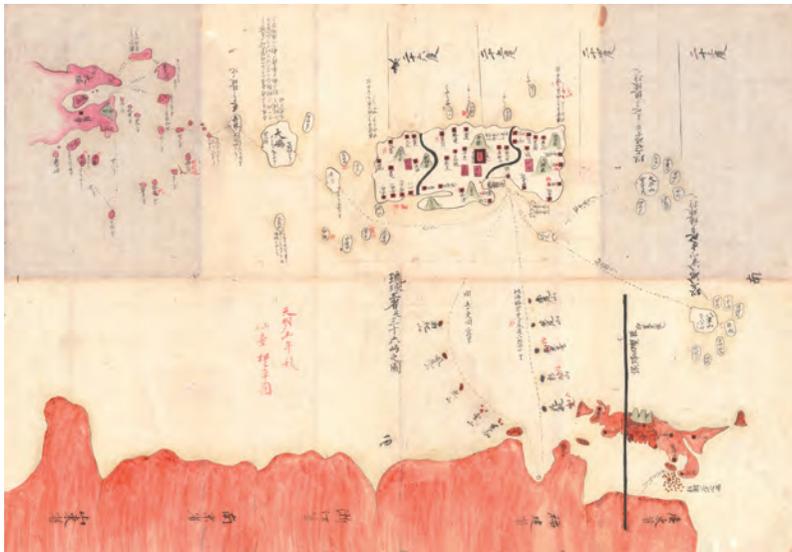
蝦夷国全図 578 × 930 mm



三国通覧全図 532 × 764 mm



朝鮮八道圖 532×764 mm



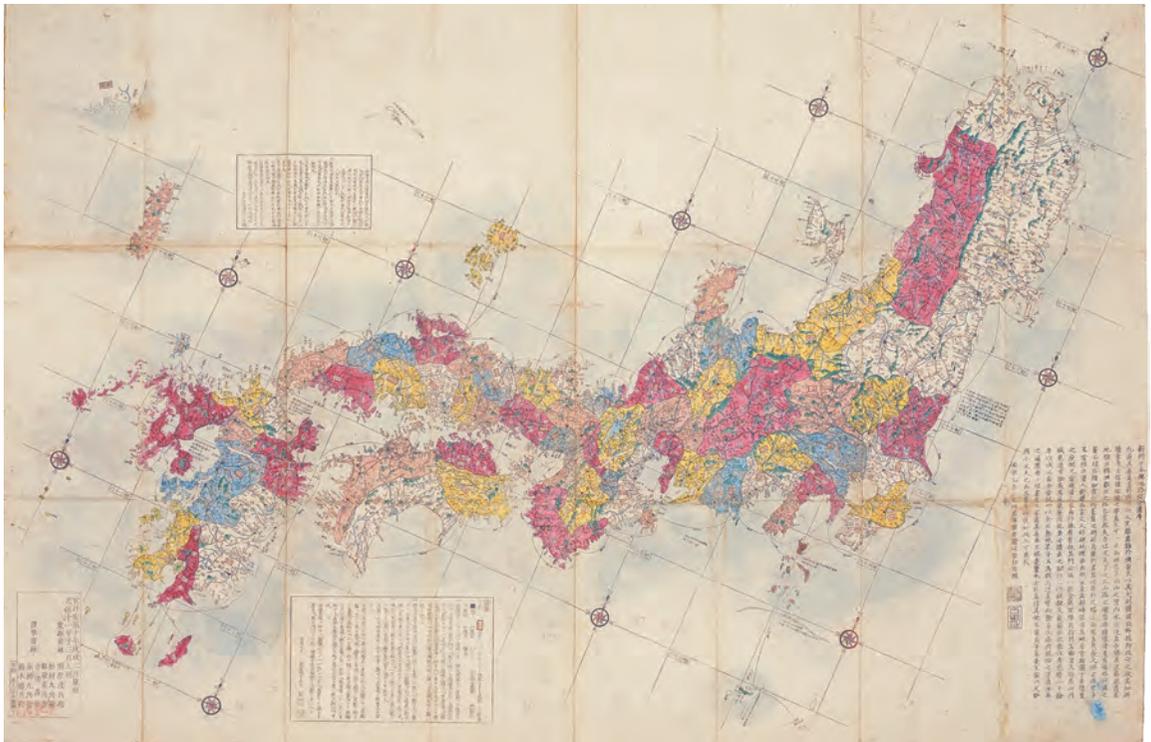
琉球三省三十六嶋圖 532×764 mm



無人島八十余山圖 390×764 mm

45 改正日本輿地路程全図 1 舗 安永 8 年 (1779) 初版 (天保 11 年 (1840) 再刊)
長久保赤水著 860 × 1305 mm (常陸 417)

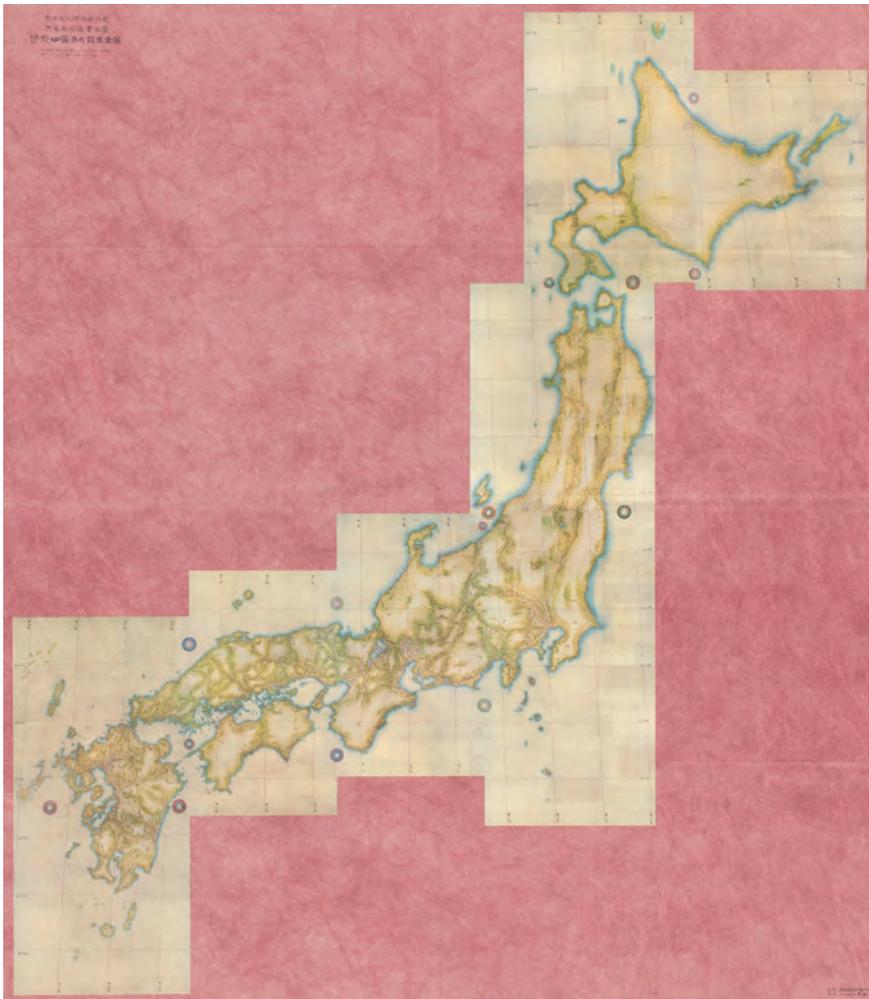
江戸中期の地図製作者・森幸安の「日本分野図」を参考にして、水戸の地理学者・長久保赤水により安永 8 年 (1779) に初版が完成し、翌年大坂で刊行された。諸国が 4 色で塗分けられている。寛永 3 年 (1791) の再刊後も度々重版され、「赤水図」と呼ばれた。日本で初めて経緯線が引かれた地図で、経線は京都を中心に引かれている。島嶼として伊豆、大隅、五島の諸島のほか、日本海上の佐渡、隠岐、松島 (現・竹島)、奄岐、対馬が描かれているが、蝦夷や琉球は含まれていない。全国測量を基に作製された伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」(伊能図) より 42 年も前に、考証のみで作製された地図としては驚くほど正確である。展示品は天保 11 年 (1840) の版。



46 大日本沿海実測図 (伊能中図) 8 舗 文政 4 年 (1821) 成立 (新杏 2507-1)

寛政 12 年 (1800) の第 1 次蝦夷測量から文化 13 年 (1816) の第 9 次伊豆諸島、第 10 次江戸府内測量まで、足掛け 17 年をかけて自身の足で 4 万キロ以上を踏破して日本全国を測量した伊能忠敬は、地図作成作業の途中の文政元年 (1818) 4 月、74 歳でこの世を去った。地図作成は高橋景保らによって続けられ、文政 4 年 (1821) に完成し「大日本沿海輿地全図」として幕府に献上された。大日本沿海輿地全図は縮尺 1/36,000 の大図 214 枚、同 1/216,000 の中図 8 枚、同 1/432,000 の小図 3 枚から成る。掲示の大日本沿海実測図は東京国立博物館所蔵「伊能中図」の約 1/9 大 (実測の 1/2,000,000) の複製品で、伊能忠敬没 175 年・日本国際地図学会創立 30 周年記念として刊行されたもの。

忠敬は 20 歳年下の師匠・高橋^{よしとき}至時 (幕府天文方) と図り、正確な地図作製に必要な子午線上の緯度 1 度の距離を第 1 次蝦夷測量に向かう奥州街道往路での実測値から算出した。その後も全国測量行の中で実測・計算を繰り返し、最終的に「緯度 1 度 = 28.20 里 (111.85 km)」という数値を幕府に報告した。この数値は実際の値 (北緯 35 度において 111.95 km) との誤差 0.1% 以下という正確さであった。



伊能中図 (約9分の1大の複製品)

47 大日本早引細見絵図 1 舗 天保6年(1835)刊 絵図屋庄八著
392 × 1192 mm (常陸416)

北は蝦夷・松前から南は九州までを描いた日本全国道中案内図。五街道をはじめ様々な道筋、沿道の宿場町、その間の距離など諸情報が記載されている。海上には海路も描かれている。折り畳んで懐中にて持ち運べるこのような道中案内図は旅行人気が高まった江戸後期に大量に出回った。地理的正確性よりも道中の情報掲載に重きが置かれている。

絵図屋庄八：貞享元年(1684)に東大寺大仏殿前で開業した地図・絵図専門の出版業者。奈良の山川、道路、町名、神社、仏閣、年中行事などが記載された「和州奈良之図」や「ならめい志よゑづ」など、奈良名所案内図は人気を呼んだ。



部分拡大図

48 増訂伊豆七島全図附無人島八十嶼図 相武房総海岸図 1 鋪
 天保 13 (1842) 序 東条琴台著 752 × 1046 mm (常陸 428)

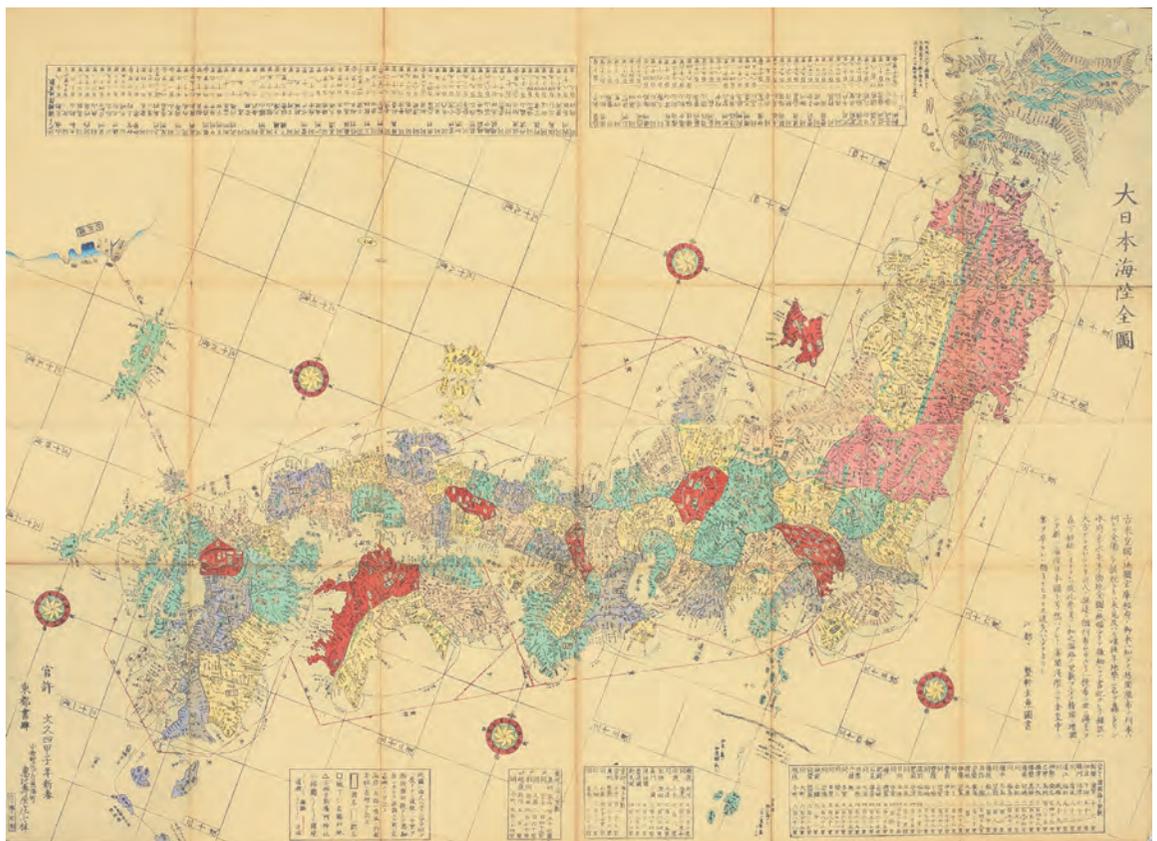
房総半島、三浦半島から伊豆半島、伊豆七島までを示す絵図。各湾岸の湊名、それを結ぶ海路、陸路が記載されている。下部に伊豆大島から八丈島・小島・青ヶ島までの各島々の島間距離、地理、産物、神社仏閣、山川等が略記され、上部に八丈島より続く無人島(小笠原諸島)の略図が描かれ、「此無人島ノ図ハ仙台ノ林子平ガ著ス所ノ三国通覧ニ附載スル者ヲ以テ本トシ、又漂流人ノ稟帖ニ依テ纂写スル也…」とある。嘉永元年(1848)頃に発刊されたとされる本図は幕府の禁に触れて絶版とされ、著者の東条琴台(信耕)は高田藩邸幽閉になったとされる。図面に「謹以内吉ノ邸報判板ノ限五百部ノ無此印者ノ係于偽刻」の墨印が押され、左下に「不許市売」とあることから、限定 500 部が刷られ、仲間内で流通した(ことにした)ものと思われる。



49 大日本海陸全図 1 舗 文久4年(1864)刊 整軒玄魚改訂
714 × 980 mm (常陸420)

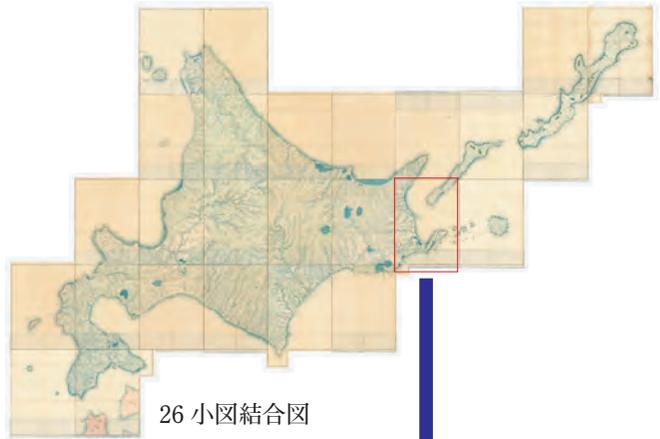
長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」を基に、官の許可を得て^{せいけんげんぎょ}整軒玄魚が改訂、刊行したもの。「改正日本輿地路程全図」と同じように国ごとに彩色されているが、対象範囲がより広くなり、蝦夷、国後・樺太の南端、沖永良部・喜界島、朝鮮半島南端が加わっている。本図の上下には江戸からの陸海路の距離も掲載されている。文久4年は「大日本沿海輿地全図」(伊能図)の完成から40年余りを経ているが、正確な伊能図は幕府内で極秘であり、官許は80年前の赤水図と同等の精度までという当時の状況がうかがえる。

整軒玄魚(1817~1880):文化14年生まれ。幕末から明治前期の図案家、浮世絵師。姓は宮城、名は喜三郎、号は梅素亭・玄魚・整軒など多数。独学で絵を学び、安政以降、錦絵、目録図、一枚刷りの浮世絵、看板意匠などでその技量を発揮して人気を博した。

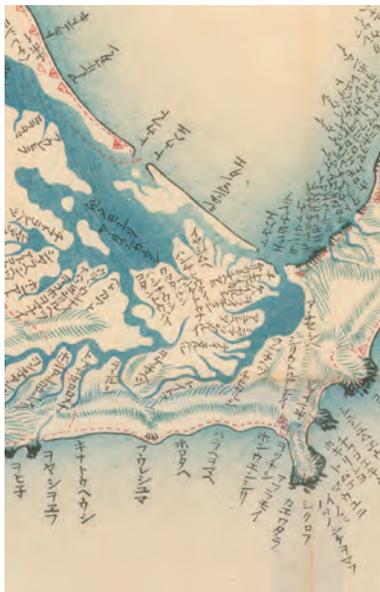


50 東西蝦夷山川地理取調図 27 舗 安政6年(1859)成立 松浦武四郎著
(新杏 2520)

松浦武四郎が10数年をかけた蝦夷地探検の末に、安政6年(1859)に完成させた日本で初めての北海道詳細図。木版三色刷りの刊本で、海岸部と大河のみが描かれた「大日本沿海実測全図」(伊能中図)の北海道図を基に、内陸部の山地を緑色のケバ図法(等高線に直角にクサビ形の「ケバ」を急傾斜では太く短く、緩傾斜では細く長く描く図法)で、河川・湖沼は青、道路は赤点線、番屋等の記号は赤、調査で得られたアイヌ語の地名は黒色で細かく書き入れたもの。経緯度1度の範囲を大きさ約48cm×36cmで描いた小図26枚を合わせると択捉島まで含む北海道全図となり、縦横約240cm×360cmの大図となる。本資料は小図以外に凡例、「東西蝦夷山川地理取調大概図」、調査に協力したアイヌ人の名前、地名、里数、山川名、名所、離島情報などが記された首尾2舗を合わせて28舗から成るが、杏雨書屋所蔵品は尾1舗を欠く。



26小図結合図



部分拡大図

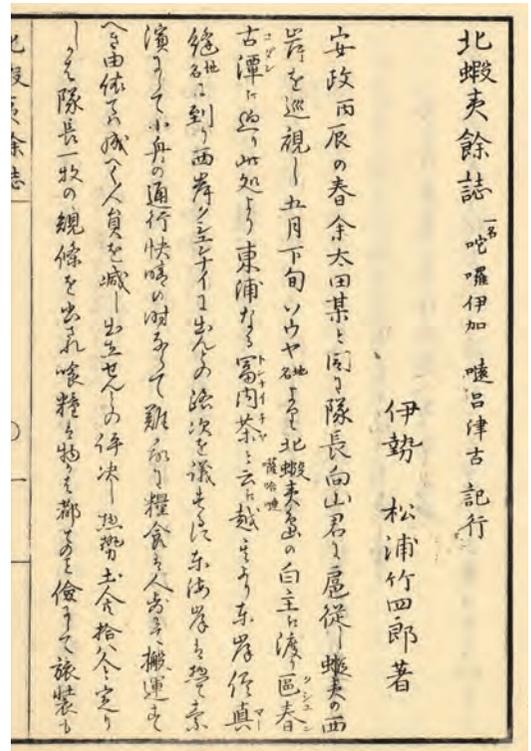


14 図：厚岸～納沙布～国後島

51 北蝦夷余誌 1巻 松浦武四郎著 万延元年(1860)刊 (杏雨4909)

安政2年(1855)に第4回蝦夷地探査で北蝦夷と呼ばれていた樺太(サハリン)南部を探検調査したときの記録を、多色刷りの絵図をまじえて読みやすく纏めたもの。掲出の挿絵はアイヌの男性の案内で歩く武四郎の姿が描かれており、その後ろにはウィルタ(ツングース系)やニヴフ(ギリヤーク人)といった北方民族の姿も見られる。武四郎が現地の人々と交流しながら探査を進めたことが表現されている。

この時の地理的探査情報を基に「東西蝦夷山川地理取調図」と同様の樺太南部の地図「北蝦夷山川地理取調図」を作製したが出版はされなかった。



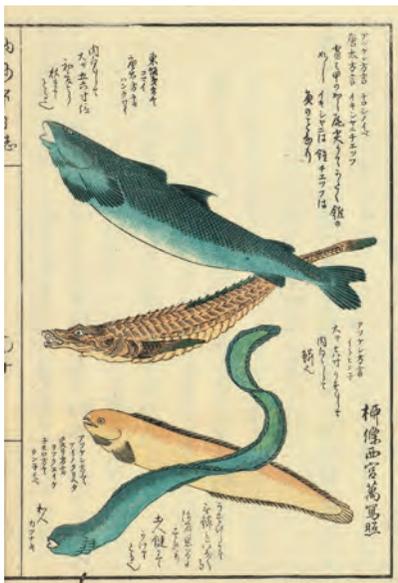
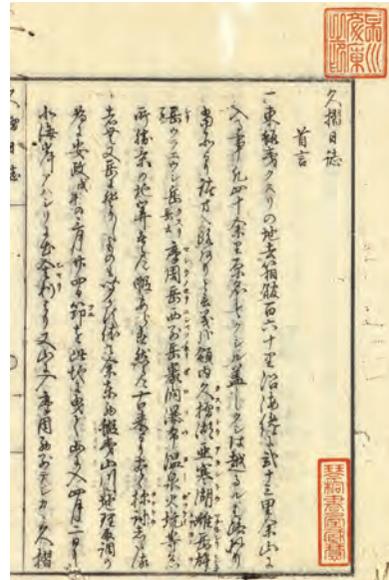
52 東西蝦夷山川地理取調紀行 万延元年 (1860) ~ 文久5年 (1865)

松浦武四郎著 (杏雨 2063・杏雨 5798・杏雨 1543 他)

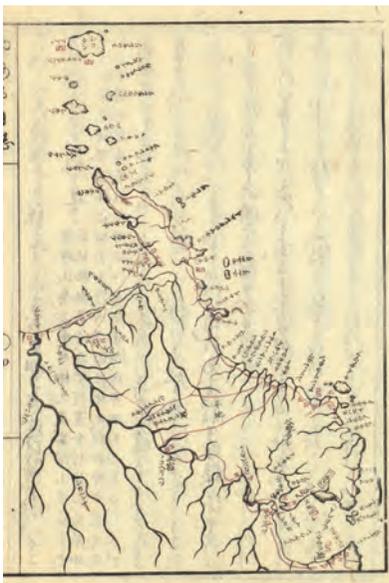
松浦武四郎は調査・記録した情報を『三航蝦夷日誌 (蝦夷日誌)』(1850年: 35巻)、『武四郎廻浦日記 (丙辰日記)』(1856年: 31巻)、『丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌 (丁巳日誌)』(1857年: 24巻)、『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』(1858年: 61巻)、合わせて151冊に纏めて報告した。その内容を地域毎に纏め直し、東西蝦夷山川地理取調紀行と銘打った紀行本として『天塩日誌』、『知床日誌』、『納紗布日誌』、『十勝日誌』、『夕張日誌』、『後方羊蹄日誌』、『久摺日誌』、『石狩日誌』、『東蝦夷日誌』、『西蝦夷日誌』を公刊した。樺太の調査記録を纏めた『北蝦夷余誌』と合わせ、蝦夷地の地理、歴史、文化の理解に貢献した。



久摺日誌 (杏雨2063)



野紗布日誌 (杏雨5798)



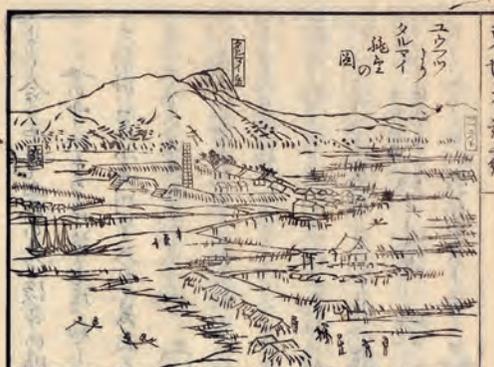
東蝦夷日誌

山越内領

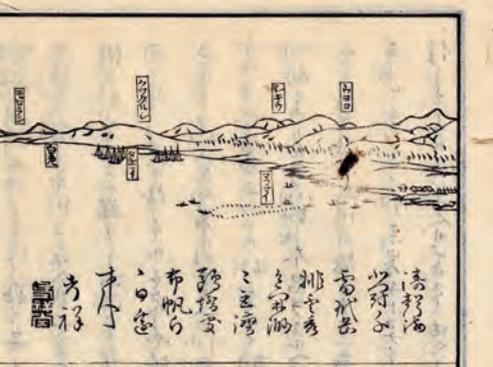
伊集 松浦竹中郎一誌

豊平が原の水越り末豊の國 厚情太神皇と春櫻丸を奉り今元
 まのりもあまて茶名林今原を命しまを 命解まあひ喜良者
 いと玉唱も今と背浦の利袖の儀もあまは奉るを命し願
 昌の地あり奉り昌平の御代の儀も仰れ奉り市中も多し芳の
 一甲塚原のふき出の由れも爰に塚橋原社も奉り今もいり捧物
 一遠中のある祈り入るも或時此を記書湖よりいり
 天地の神もあまの國の原千島の奥に思ひ入る身

踏人断未階此地為誰問
 絶域縦横跡看君碎百骸
 田原 笠生元價



の或此川上の力一海々あろくとア
 ワマ川是アワマの枝也
 アワ川の中を流る 勢も急流なり
 とせりモ力と云歎く遊さ城を
 ひく号と云は歎の舟とてマを流
 ると云又アワと木筋の舟も云
 六月廿一日 豊平と打むアワ
 同而石板板屋ト云村
 板屋のイナキホトより上をイタラ
 △力此のイナキホトより上をイタラ



連出と云と云云を了つ木小
 此を流地也と云と南トイホチ小
 昔イトユフツ此組入るも是修め
 ウニハフ同ウニキナと云ソ子と云
 果てて東家向ふかく山ト云りキ
 タニ人等山村の天母を物も力
 ヤ台の力此を道月十三日女の
 取事と引切も娘も云と云
 新編一又娘と娘も出地と云
 多て難事と云云ヤヤヤハ川中

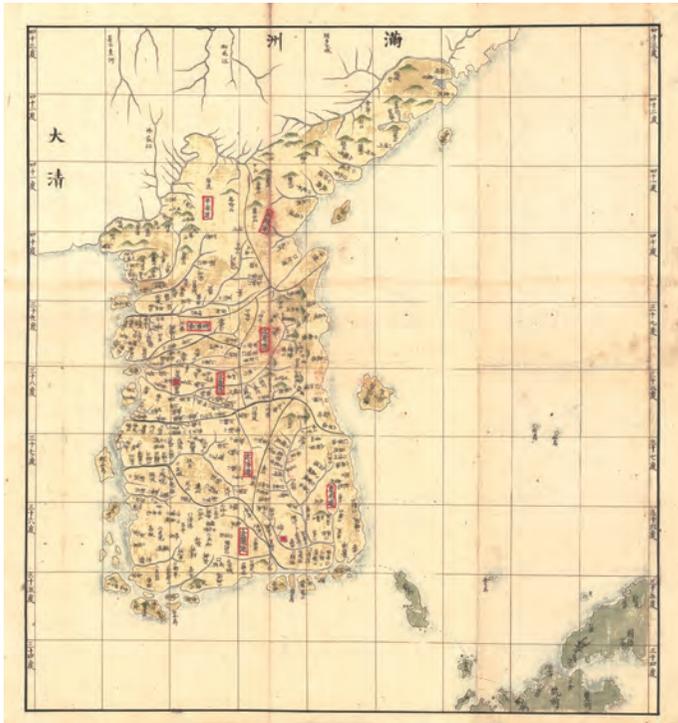
東蝦夷日誌 (杏雨1543)

53 朝鮮全図 1 舗 江戸後期写本 (三木 277)

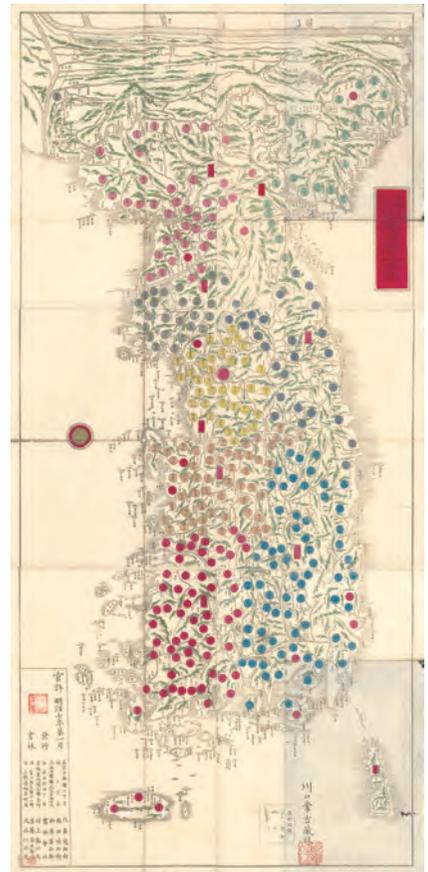
清、満洲に繋がる朝鮮五畿八道、鬱陵島などの島々と、対馬、壹岐、日本の一部が描かれている。朝鮮本土の形は東西に比べて南北が短く、朝鮮で長らく使われていた「八道総図」、「五畿八道図」系統の地図 (23、24、25 頁参照) を写したものと考えられる。

54 五畿八道朝鮮国細見全図 1 舗 明治7年(1874)官許 川口常吉蔵版 (三木 278)

石田旭山刀、川口常吉蔵版。明治7年、日本で刊行された朝鮮図。朝鮮五畿八道と対馬が描かれている。対馬は1島として描かれている。



朝鮮全図 420 × 400 mm



五畿八道朝鮮国細見全図
980 × 470 mm

55 古伊万里 地図皿 1枚 天保年間(1830~1844) 磁器 染付

25.5 × 29 cm 高 4.5 cm 高台径 16 cm (常陸 570)

地図を意匠とする地図皿は源内焼から始まる。源内焼(志度焼)は宝暦5年(1755)に讃岐国志度(現さぬき市志度)で平賀源内(1728~79)が指導して生まれたと言われる三彩陶器である。源内焼に描かれている世界地図は『唐土訓蒙図彙』に含まれる「山川輿地全図」を原図とし、また日本地図には恵蘇(蝦夷)、小琉球、大琉球、朝鮮などが描かれ、縁には緯度数や南北の文字が記されている。

源内焼の地図皿以降、18世紀末~19世紀にかけて日本では地図の刊行が進み、地図の発展とあわせて人々の地図を楽しむ心が肥前有田で伊万里焼の地図皿を生み出した。天保年間(1830~44)には、円形や四角形の主に日本地図皿が大量に制作された。

本資料には多くの伊万里焼の地図皿と同じく、行基図と共に女護国、小人国など空想の国が描かれている。海の文様にはバリエーションがあり、蛸の足のような蛸唐草文は青海波文と共に最も多く用いられた文様の一つである。国名部分の釉薬が盛り上がり、裏面に「天保年製」の染付銘がある。金継ぎが施された常陸彌壯次氏旧蔵品。



肖像画・人物来歴



伊能忠敬肖像
千葉県香取市 伊能忠敬記念館所蔵



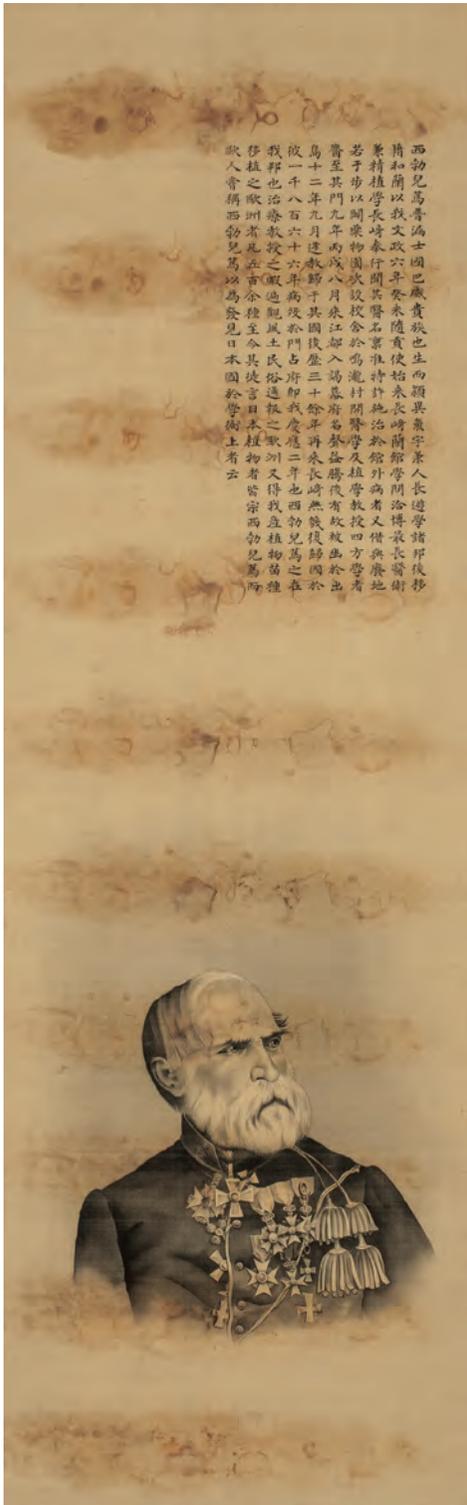
箕作阮甫肖像 (乾々斎6553-138)

最上徳内先生



最上徳内肖像 (乾々斎6553-90)

西物兒馬普滿士國巴廠資族也生而穎異最于業人長遊學諸邦後移
 簡和爾以我文政六年來隨貢使始末長崎蘭館學問洽博最長醫術
 兼精植學長崎奉行開醫名票准許地治於館外病者又借與廣地
 若干步以開藥物園次設校舍於島邊村開醫學及植學教授四方學者
 醫至其門九年而戊八月來江都入謁幕府名譽益隆後有故被出於
 島十二年九月遂載歸于其國後歷三十餘年再來長崎無幾復歸國於
 彼一千八百六十六年病歿於門占府即我慶應二年也西物兒馬之在
 我邦也治毒教授之暇通曉風土民俗通報之歐洲又得我產植物苗種
 移植之歐洲者凡在百餘種至今其徒言日本植物者皆宗西物兒馬而
 歌人嘗稱西物兒馬以為發見日本國於學術上者云



シーボルト肖像 (医史32)

いのうただたか

伊能忠敬 (1745～1818)

江戸中後期の商人、天文学者、地理学者、測量家。字は子齊、幼名は三治郎、号は東河、通称は三郎右衛門。上総国山辺郡小関村（現 千葉県山武郡九十九里町小関）の名主の家に生まれ、17歳の時、下総国香取郡佐原村（現 香取市佐原）で酒造業を営む伊能家に婿入りし、伊能三郎右衛門忠敬と名乗る。名主として浅間山噴火に続く天明の大飢饉を乗り切り、寛政6年（1794）に50歳で隠居、翌年江戸へ出て改暦のため京都から江戸へ出府した高橋至時入門、天文学、測量学を学んだ。

寛政12年（1800）、ロシアの南下を危惧した幕府から蝦夷地測量を許可され、4月江戸を徒歩で出発、5月箱館から別海町まで歩測で測量を行い、蝦夷滞在117日で帰還した。この時作製、提出された地図の評価が高く、全国測量への道が開かれたとされる。その後、第十次の江戸府内測量まで17年の歳月をかけて行われた全国測量と、忠敬が測量できなかった蝦夷地を測量した間宮林蔵らの情報を合わせて、日本で初めての実測日本図『大日本沿海輿地全図』が作製された。

たかはしかげやす

高橋景保 (1785～1829)

江戸後期の天文学者、地図製作者。天文学者・高橋至時の長男として大坂で生まれる。幼名は作助、字は子昌、通称作左衛門。20歳で父の跡を継いで幕府天文方となり、天体観測、測量、洋書翻訳に従事した。文化元年（1804）長崎に来航したロシア使節ニコライ・レザノフ持参の国書の翻訳を命じられ、『魯西亜国呈書満文訓訳強解』を作成した。文化4年（1807）、最新世界地図作製の幕命を受け、「新鑄総界全図」の試作、『北夷考証』の執筆を経て、3年の歳月をかけて「新訂万国全図」を完成させた。一方で17年に及ぶ伊能忠敬らによる全国測量を全面的に援助・監督し、忠敬の没後「大日本沿海輿地全図」を完成させた。

文政11年（1828）クルーゼンシュテルンの『世界周航記』との交換で伊能図の写しをシーボルトに供与したことが発覚（シーボルト事件）、伝馬町郎屋敷に投獄され、翌年獄死した。享年45。遺体は塩漬保存され、翌文政13年（1830）に罪状申し渡しと共に改めて斬首された。

ながく ほせきすい

長久保赤水 (1717～1801)

江戸中期の儒学者、地理学者。常陸国多賀郡赤濱村（現 茨城県高萩市）出身。農民の出ながら学問を志し、14歳から医学、漢学を学ぶ。享保18年（1733）、17歳で江戸に出て儒学者・服部南郭に師事、その後水戸・彰考館で名越南溪に儒学、天文地理を、渋川春海門下の小池友賢に天文学を学んだ。明和5年（1768）「改製日本分里図」、安永4年（1775）「新刻日本輿地路程全図」を発表。安永8年（1779）作製の「改正日本輿地路程全図」（通称「赤水図」）は翌年大坂で刊行された。「赤水図」は赤水存命中に2版、没後も修正が加えられながら版を重ね、約1世紀にわたって流通した。晩年には水戸光圀が編纂を始めた『大日本史』の地理誌の執筆にも携わった。

「赤水図」には島根県・竹島が「松島」の名で記載されており、竹島が日本の領土である証左としてしばしば引用されている。

まつうらたけしろう
松浦武四郎 (1818～1888)

江戸後期の探検家。名前表記は竹四郎とも。諱は弘。文化15年(1818)伊勢国須川村(現 松阪市小野江町)生まれ。漢学、本草学を学んだ後、16歳で江戸へ一人旅をしたことをきっかけに諸国の名所・旧跡を訪ね、地名、人口、地形、歴史、風俗などを調査して日誌に記録した。弘化2年(1845)から安政5年(1858)にかけて個人で3回、さらに幕府役人として3回蝦夷地を探検調査した。アイヌ文化を尊重し、アイヌ民族と友好を保ちながら10,000 kmを踏破、9,000以上の地名を収集した。退官後は著述に勤しみ、150冊以上の記録誌、紀行本、地図を出版した。明治新政府成立後、蝦夷地開拓判官に任命され、蝦夷地を北海道(当初は「北加伊道」と命名し、国・郡の範囲を定め、その名称もアイヌ語の地名に基づいて選定した。「北海道の名付け親」と呼ばれる所以である。ただ、アイヌ民族に対する政策方針で政府と対立して明治3年(1870)辞職、官位も返上した。

晩年は著作活動の傍ら全国を巡り、骨董品(特に奇石、勾玉、古銭等)蒐集に勤しんだ。武四郎の蒐集古物約900点が現在公益財団法人静嘉堂文庫美術館に収蔵されている。また全国八幡宮巡り、大台ヶ原の探査、70歳での富士山登山など、生涯旅人として人生を全うした。

まみやりんぞう
間宮林蔵 (1780～1844)

江戸後期の探検家、将軍家御庭番。常陸の農家の出身ながら幕府役人に取り立てられ、寛政12年(1800)、蝦夷で伊能忠敬に出会い測量術を学ぶ。忠敬が都合で測量行から抜けた後の蝦夷地の測量は林蔵主導で行われた。享和3年(1803)には西蝦夷を探索し、得撫島までの地図を作製した。文化5年(1808年)、幕命により松前奉行調所下役元締・松田伝十郎と樺太を探検した。西岸探査を担当した伝十郎は東岸担当の林蔵より先に樺太西岸北部、海峡最狭部のラッカ岬に到達した。引き返す途中で林蔵と合流した伝十郎は林蔵を伴って再度ラッカ岬に至り、「大日本国国境」の標柱を立てた。箱館帰還後、林蔵はすぐに単身で再度樺太に渡り、ラッカ岬よりさらに北のアムール川河口の対岸ナニヲーまで到達、さらに海峡を渡ってアムール川下流地域を調査した。この時の探査情報を『東韃地方紀行』『北夷分界余話』として纏め、文化8年(1811)、樺太の詳細な地図と共に幕府に提出した。文政5年(1822)普請役、文政11年(1828)勘定奉行配下となり、以降幕府隠密として各地を探査した。同年のシーボルト事件発覚の発端は林蔵の届出によるものといわれている。

ちなみに林蔵の樺太地図は緯度の設定を誤ったために樺太が実際より小さく表されており、高橋景保の新訂万国全図にもそれは反映され、樺太を島としながらもその大きさは不正確である。

みつくりげんぼ
箕作阮甫 (1799～1863)

幕末の蘭学者、津山藩士。津山藩医の家に生まれ、12歳で家督を継ぐ。文政2年(1819)京都での修行を終え帰郷して開業。文政6年(1823)江戸に出て宇田川玄真に入門し蘭学を学ぶ。幕府天文台翻訳員を経て安政3年(1856)番所調所開設と同時に首席教授となり、生涯で100部(160冊)余りの洋書を訳述した。娘婿・箕作省吾作製「新製輿地全図」の地理解説書『坤輿図識』『坤輿図識補』の出版(1845～1847)を補助した。1856年に寧波で発刊されたアメリカ人牧師リチャード・クォーターマン・ウェイの原著に訓点を施した地理書・『地球説略』を万延元年(1860)に発刊した。本書は地球球体説、地球・大洲・大洋の各図説等を概説後に、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オーストラリア、アフリカの順で地誌が記されており、阮甫の校訂でキリスト教に関する記述は削除されている。

最上徳内 (1754～1836)

江戸後期の探検家、幕府普請役。出羽国村山郡楯岡村（現 山形県村山市楯岡）の農家出身。幼名元吉、字は子員、徳内は通称。26歳の時に江戸へ出て幕府医官山田凶南の家僕となり医術を、永井正峯に数学を学ぶ。29歳で経世家・本多利明の音羽塾に入門し天文学・測量・経済学を学ぶ。天明5年（1785）、老中・田沼意次の発意による蝦夷地探検隊に病の師・本多利明に代わって参加、東蝦夷（釧路、根室）から国後島を探検。翌年、色丹島、択捉島を経て得撫島に到達した。択捉島では在住のロシア人と交流し、その情報を『蝦夷草紙』に纏め蝦夷地の重要性を幕府に訴えた。寛政元年（1789）から寛政4年にかけて3度蝦夷地を探検、得撫島北端まで至る。寛政10年（1798）、7度目の蝦夷探検で近藤重蔵と共に択捉島に「大日本恵登呂府」の標柱を建立、島の領有を宣言した。晩年の文政9年（1826）、シーボルトの江戸参府に際し面談、アイヌ文化を紹介するなど親しく交流した。間宮林蔵の樺太地図を供与したが、後のシーボルト事件では追及を免れた。

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト (1796～1866)

ドイツ人医師。オランダ東インド陸軍軍医としてジャワに赴任し、文政6年（1823）に日本研究のため長崎・出島商館に着任した。翌年鳴滝塾を開講して西洋医学および科学を講義し、多くの門人を育てると共に日本研究の資料を収集した。その中には地理的資料も含まれ、1826年の江戸参府時に、高橋景保が樺太東岸資料として入手を切望していたクルーゼンシュテルンの『世界周航記』と引き換えに伊能図「大日本沿海輿地全図」の縮図を入手した。文政11年（1828）帰国時に国禁の日本地図等を所持していることが発覚し、翌年国外追放された（シーボルト事件）。安政6年（1859）日蘭修好通商条約締結で追放解除となり、再来日して幕府外交顧問を務めた。

ラ・ペルーズ伯 (ジャン＝フランソワ・ド・ガロー) (1741～1788)

フランスの探検家。ラ・ペルーズはガロー家の領地名。国王ルイ16世から太平洋探検の命を受け、1787年マカオ経由で朝鮮半島、韃靼東岸を測量しながら北上し、樺太（サハリン）が島であるか否かを確認するため樺太西岸を測量しながら北上したが水深が浅くなり断念、引き返した。その後宗谷海峡を西洋人として初めて通過、ペトロパブロフスク経由でニュー・サウスウェールズ（オーストラリア）に向かい、1788年3月ソロモン諸島近海で消息を絶った。約40年後の1826年、サンタクルーズ諸島ヴァニコロ島近海でラ・ペルーズ艦隊アストロラブ号の備品が発見された。ラ・ペルーズの探検の詳細は、途中のペトロパブロフスクでそれまでの航海記録を持ってフランス人・バルテルミー・レセップスが下船、シベリアを横断して無事パリに帰着したことにより後世に記録として残された。

アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン (1770～1846)

ロシア海軍提督・探検家。皇帝アレキサンドル1世から世界周航艦隊を任せられ、1803年8月クロンシュタット港を出港。カナリア諸島経由で大西洋、太平洋を横断し、1804年7月ペトロパブロフスクに到着した。その後10月長崎に入港、日本の漂流民・津太夫らを引き渡した。遣日使節ニコライ・レザノフによる通商交渉は6か月に及んだが不調に終わり、1805年4月長崎を出航、日本海を北上して蝦夷（北海道）北端に寄港・上陸した。さらにラ・ペルーズ海峡を通過してサハリン東岸を測量しながら北上、サハリン北端に達し、岬を回って南下したが深度不足により南下を断念、海峡の発見には至らなかった。その後千島列島北部を測量、ペトロパブロフスク、マカオ、喜望峯経由で1806年8月にクロンシュタット港に帰着した。

世界地図・日本地図作製に関する年表(杏雨書屋所蔵品関連)

- | | |
|----------------------|------------------|
| ● ヨーロッパにおける地図作製関連 | ● ヨーロッパ人の探検・測量航海 |
| ● アジア(日本・中国)における地図関連 | ● 日本人による探検・測量 |

- 1340～90年頃 ●南北朝時代、『拾芥抄』成立。
- 1471年(成宗2) ●李氏朝鮮の宰相・申叔舟、『海東諸国記』(「日本本国之図」等含む)発刊。
- 1530年(中宗25) ●朝鮮で『新增東国輿地勝覧』発刊。
- 1570年●オルテリウスの「地図帳」発刊。(日本を含む東インド図掲載)
- 1595年●テイセラの「地図帳」1595年版発刊。(日本図が初めて掲載)
- 1599年(宣祖32)頃: ●李氏朝鮮の宰相・柳成竜、『懲愆録』(「朝鮮図」含む)発刊。
- 1600年頃(慶長頃) ●『拾芥抄』慶長古活字本(大日本国図(行基図)含む)刊行。
- 1602年(万暦30) ●キリスト教宣教師マテオ・リッチが北京で中国最初の世界地図「坤輿万国全図」(利瑪竇坤輿万国全図)発刊。
- 1606年●ホンディウスの「地図帳」1606年版発刊。(日本図、中国図掲載)
- 1607年(万暦35) ●明の学者王圻/王思義編『三才図会』(「山海輿地全図」等含む)完成。2年後に発刊。
- 1621年(天啓元) ●明の学者茅元儀『武備志』発刊。
- 1708年(宝永5) ●西川如見『増補華夷通商考』(「地球万国一覽之図」含む)発刊。
- 1712年(正徳2) ●寺島良安『和漢三才図会』成立、1715年(正徳5)発刊。
- 1718年(康熙57) ●康熙帝の命でイエズス会士ジョアシャン・ブーヴェ、ジャン＝フランソワ・ジェルビヨンらが「皇輿全覽図」(乾隆年間所刻「十六省及九辺図」と同じ)を作製。翌年康熙帝に献上された。
- 1729年●ケンペル『日本誌』オランダ語版発刊。(ショイヒツェル作成「68州に分けられた日本帝国図」掲載)
- 1734年●フランスの地理学者ブルギニョン・ダンヴィルが「シナ全図」を出版。
- 1738年 ●デンマークの探検家マーチン・シュパンベルグ、第二次ベーリング探検の別動隊として千島・日本を探検。(1739年)仙台で日本人と接触。
- 1744年●ベンジャミン・マーティン『現代自然科学の哲学的講義あるいは概論』(「マーティンの地球両半球図」含む)発刊。
- 1752年●ブルギニョン・ダンヴィルが「アジア地図」を出版。
- 1758年●ドイツ人地理学者ゲルハルト・ミュラー、「北米および周辺の未知の沿岸におけるロシア船の新発見地図」を作製、サンクトペテルブルクで出版。
- 1758年●ドイツの地理学者ヨハン・ヒュプネル、『地理要説』(「マイヤーの両半球世界図」含む)オランダ語版第6版発刊。
- 1768年 ●英国海軍の探検家ジェームズ・クック、英南部プリマスを出航(第1回航海)、大西洋を横断、ホーン岬を回って太平洋に出る。(1769年)タヒチ経由でニュージーランドに到達し周航、南島と北島を分けるクック海峡を発見した。(1770年)オーストラリア南東部にヨーロッパ人として初めて到達。北上してトレス海峡を抜け、ニューギニアとオーストラリアが陸続きでないことを確認した。その後バタヴィアを経て1771年帰国。
- 1772年 ●ジェームズ・クック、第2回航海に出発。喜望峰から南下して初めて南極圏に突入。(1773年)オーストラリア南方海上を経てニュージーランドに到達。(1774年)南太平洋諸島を経て再度ニュージーランドから南下して南緯55度付近を周航、未踏の大陸が無いことを確認し、1775年帰国。
- 1776年 ●ジェームズ・クック、第3回航海に出発。喜望峰経由でニュージーランド、タヒチへ。(1778年)北上してヨーロッパ人として初めてハワイに到達(この時ウェーク島沖を通過)。東航して北ア

メロカ西岸を北上、アラスカのクック湾を発見、ベーリング海を探索した。(1779年)ハワイに戻ったクックは島民との争いの中で死亡。遺体の一部は1780年に帰国。

- 1779年(安永8) ●地理学者・長久保赤水、「改正日本輿地路程全図」(通称赤水図)初版を完成。翌年大坂で発刊。
- 1783年(天明3) ●三橋釣客「万国地球細見全図」発刊。
- 1784年(天明4) ●幕府医官・山田因南の下僕・最上徳内が多利明の音羽塾に入門、天文学、測量学を学ぶ。
- 1785年 ●ラ・ペルーズ伯ジャン＝フランソワ・ド・ガロー、フランス国王ルイ16世の命によりフランス・ブレヒトから太平洋探検に出発。(1787年)マニラから朝鮮海峡を経て南樺太に到達。樺太北部と大陸の地理探索を試みるが断念、西欧人として初めて宗谷海峡を通過して千島を探検後カムチャツカに到達。(1789)オーストラリア東岸を探検後、南太平洋サンタクルーズ諸島バニコロ島で遭難死。
- 1785年(天明5) ●最上徳内、老中・田沼意次の発意による蝦夷地探検隊に本多利明の推薦で下人として同行、千島・国後島、さらに樺太に至る。(翌天明6年)千島列島を再訪、択捉島、得撫島に至りロシア人と接触、後日『蝦夷草紙』にて報告。
- 1785年(天明5) ●幕臣・林子平、『三国通覧図説』著す。(附:「三国通覧全図」、「琉球三省三十六嶋図」、「無人島八十余山図」、「朝鮮八道図」、「蝦夷国全図」)
- 1788年(天明8) ●長久保赤水「地球萬國山海輿地全図説」作製。
- 1790年●英国の地図製作者アロン・アロウスミス、メルカトル図法による大型世界地図(アロウスミス方図)を発刊。
- 1792年(寛政4) ●幕府普請役・最上徳内、最初の樺太南部の地理的調査を行う。
- 1792年 ●(寛政4) ●ロシア使節アダム・ラクスマンが大黒屋光太夫ら日本漂流民返還を名目に根室に來航。
- 1792年(寛政4) ●司馬江漢、「銅刻地球全図」を作製し、解説書『輿地略説』(後に増補・解題『地球全図略説』)と共に刊行。
- 1792年 ●英国探検家ウィリアム・ウェークが北太平洋ウェーク島を発見、上陸。その名は1796年に來訪したサミュエル・ウェークの命名による。
- 1794年●アロン・アロウスミス、グローブラー(球形)図法による大型世界地図を発刊。
- 1794年 ●英国の航海者ウィリアム・ブロートン、英国人として初めて日本海から蝦夷地沿岸、千島列島を測量。
- 1795年(寛政7) ●下総佐原の名主・伊能忠敬、50歳で隠居。江戸へ出て幕府天文方・高橋至時に師事、天文学、測量学を学ぶ。
- 1796年(寛政8) ●橋本宗吉「嶋蘭新訳地球全図」作製。
- 1796年 ●ウィリアム・ブロートン、蝦夷・噴火湾の虻田(現北海道虻田郡洞爺湖町)に上陸。(1797年)プロヴィデンス号、宮古島沖八重干瀬で座礁・沈没、池間島で8日間滞在。その後、僚船で樺太西岸を探索したが海峡発見には至らず。一度マカオに帰港後、那覇、仙台、箱館を訪問。
- 1797年●『ラ・ペルーズ世界周航記』フランスで発刊。
- 1798年 ●ジョージ・バス、オーストラリア東南他端のハウ岬を越え、メルボルンまで到達。
- 1798年(寛政10) ●幕臣・近藤重蔵、最上徳内と国後島、択捉島を調査、択捉島南端に「大日本恵登呂府」の木柱を建立。
- 1799年 ●英国の探検家マシュー・フリンダース、オーストラリア大陸とヴァン・ディーメンズ・ランド(現タスマニア島)の間を通過、バス海峡と命名。
- 1799年 ●ジョージ・バス、ニューサウスウェールズ総督ジョン・ハンターと共にタスマニア島を周回し、島であることを確認。
- 1800年頃●高橋景保が参考にしたアロウスミス方図(1799年増補版?)発刊。

- 1800年(寛政12) ●伊能忠敬、幕府の許可を得て全国測量を開始。(第1次は蝦夷地南岸)
- 1800年(寛政12) ●間宮林蔵、蝦夷地で伊能忠敬と出会い、測量を学ぶ。
- 1801年●アロウスミス、「アジア地図」(レンネル地図) 作製。
- 1802年(享和2) ●近藤重蔵、蝦夷及樺太ノ図(樺太半島説と離島説の2図) 作成。
- 1803年 ●ロシア海軍提督アーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルン、対日ロシア使節ニコライ・レザノフ男爵と共にロシア軍港クロンシュタットから世界一周航海に出発(日本人漂流民・津太夫ら4人も乗船。1804年長崎来航。1805年カラフト東岸を測量。1806年クロンシュタット帰港)。
- 1804年●ウィリアム・ブロートン、エゾ島(現北海道)西南岸測量に基づく「アジア北島沿岸および日本諸島海図」発刊。
- 1804年(文化元) ●出島のオランダ通詞・本木庄左衛門が長崎滞在中のレザノフからアロウスミス方図を入手、幕府に献上。
- 1804年(文化元) ●幕臣・近藤重蔵、『辺要分界図考』を著し幕府に献上。
- 1804年(文化元) ●伊能忠敬、東日本地図を幕府に提出。幕府天文方に採用さる。
- 1805年(文化2) ●伊能忠敬の全国測量が幕府直轄事業となる。(第10次測量：1816年まで継続)
- 1807年(文化4) ●幕府が天文方・高橋景保に世界地図作成を指示。
- 1808年●ウィルキンソンがロンドンで「ウィルキンソンの両半球地図」発刊。
- 1808年(文化5) ●幕臣・間宮林蔵、上役の松田伝十郎と樺太北部を探検、海峡最狭部のラッカ岬に到達。樺太の「実験自製図」を作製して高橋景保に送る。
- 1809年(文化6) ●間宮林蔵、単身樺太北部を再訪。前回到達地よりさらに北方のアムール川対岸に至り、樺太が島であることを確認。さらに国禁を犯して海峡を渡り、アムール川河口に至る。(間宮海峡の発見)
- 1809年(文化6) ●高橋景保が『北夷考証』を著す。
- 1809年(文化6) ●高橋景保が「新鑄総界全図」を試作。
- 1810年(文化7) ●「新訂万国全図」(高橋景保編、亜欧堂田善堂版刻) 完成。
- 1810年●クルーゼンシュテルン、『世界周航記』を執筆、サンクトペテルブルクで出版。
- 1811年●ダニエル・ゾッツマン、クルーゼンシュテルンの航海情報を基に「太平洋北部の海図」作製。
- 1811年(文化8) ●間宮林蔵、北蝦夷探検報告書『東韃地方紀行』、『北夷分界余話』と樺太を島として描いた樺太地図を幕府に提出。
- 1811年(文化8) ●山田聯、『北裔備攷』を著す。
- 1813年●クルーゼンシュテルン著『世界周航記』英語版がロンドンで発刊。
- 1816年●ピーター・ヨハネス・プリンセン著『プリンセン地理学教科書・付図』発刊。
- 1818年(文化15) ●伊能忠敬死去。
- 1821年(文政4) ●高橋景保監修により、「大日本沿海輿地全図」(通称：伊能図) 完成。(蝦夷以北は間宮林蔵による測量結果が反映)
- 1826年(文政9) ●『理学入式遠西観象図説』発刊。(巻一第七図として地球両半球図掲載)
- 1826年(文政9) ●最上徳内、江戸でドイツ人医師・シーボルトに面会。間宮林蔵の樺太地図を貸与。
- 1826年(文政9) ●高橋景保、江戸でシーボルトからクルーゼンシュテルン著『世界周航記』を入手、その代わりに日本地図(伊能図小図)の模写をシーボルトに贈る。
- 1828年(文政11) ●『世界周航記』が天文台翻訳局員・青地林宗訳、高橋景保校訂にて和訳、『奉使日本紀行』成る。
- 1828年(文政11) ●シーボルト事件発生、連座した高橋景保入牢。
- 1829年(文政12) ●高橋景保獄死、シーボルト国外追放。
- 1832年●シーボルト、オランダ政府の後援で『Nippon』の刊行開始。その中で間宮海峡を「マミヤ・ノ・セト」と表記。

- 1835年(天保6) ●絵図屋庄八、「大日本早引細見絵図」発刊。
- 1840年●シーボルト、石版彩色地図「日本人作製による原図および天文学観測に基づく日本地図」発刊。
- 1842年(天保13) ●東条信耕「伊豆七島全図」発刊。
- 1844年(天保15) ●箕作省吾「新製輿地全図」発刊。
- 1845年(弘化2) ●箕作省吾、「新製輿地全図」の解説書『坤輿図識』発刊。(翌年『坤輿図識補』著す)
- 1845年(弘化2) ●松浦武四郎、第1回蝦夷地探検(～1858年(安政5)まで6度渡航)
- 1849年(嘉永2) ●嶺田楓江『海外新話』(「神輿略図」含む)発刊。
- 1850年代(嘉永頃) ●「世界万国より海上里数図王城人物図」発刊。
- 1851年(嘉永4) ●杉田玄瑞著『地学正宗・正宗図』発刊。
- 1853年(嘉永6頃) ●「満洲魯西亜臨海図」成立。
- 1859年(安政6) ●松浦竹四郎「東西蝦夷山川地理取調図」作製。(翌年発刊)
- 1860年(万延元) ●松浦竹四郎『東西蝦夷山川地理取調紀行』発刊開始。(～1865年(文久5))
- 1860年(万延元) ●箕作阮甫『地球説略』発刊。
- 1861年(哲宗12) ●李氏朝鮮の地理学者・金正浩、「大東輿地図」完成。
- 1864年(文久4) ●整軒玄魚序「大日本海陸全図」発刊。
- 1874年(明治7) ●「五畿八道朝鮮細見全図」発刊。
- 1876年(明治9) ●「官許射号万国訳図」発刊。

参考資料・文献

- ・池田哲郎 江戸時代のオランダ系「地理」—日本見在蘭書目録— 福島大学学芸学部論集 社会科学 12(1), 75-91, 1961.
- ・織田武雄 地図の歴史—日本編 1974年 株式会社講談社
- ・織田武雄 地図の歴史—世界編 1974年 株式会社講談社
- ・船越昭生 「新訂万国全図」の主要資料アロウスミス原図について 史林 62(1), 1-47, 1979.
- ・天理ギャラリー第95回展 古地図の中の日本 1993年 天理ギャラリー
- ・三好唯義 図説世界古地図コレクション 1999年 河出書房新社
- ・『源内焼—平賀源内のまなざし』「特別展 源内焼—平賀源内のまなざし」図録 2003年 財団法人五島美術館
- ・二宮陸雄 高橋景保と「新訂万国全図」新発見のアロウスミス方図 2007年 北海道出版企画センター
- ・藤井譲治・杉山正明・金田章裕編 大地の肖像 絵図・地図が語る世界 2007年 京都大学学術出版会
- ・平成22年度企画展図録 日本が描いた異国—印刷博物館企画協力— 2010年 津山洋学資料館
- ・青山宏夫 マテオ=リッチ世界図と近世日本 2013年人文地理学会大会研究発表要旨, 2013(0), 12-15, 2013.
- ・青山宏夫 シーボルトが手に入れた日本図と日本の地理情報 地図 56(1), 24-39, 2018.
- ・中村拓文庫西洋古版地図目録 蘆田文庫研究会編 2018年 明治大学図書館

杏雨書屋企画展示

「杏雨書屋の古地図—地図の歴史と日本のかたち—」

編集	公益財団法人 武田科学振興財団・杏雨書屋
発行	公益財団法人 武田科学振興財団
	理事長 飯澤祐史
	〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目3番6号
発行日	2024年9月30日 初版第1刷
	2025年1月23日 第2刷
印刷	はまや印刷株式会社

杏雨書屋の活動

展 示

■展示室開館時間
午前10時から午後4時まで

展示室には常時、蔵書や巻軸を解説付きで陳列し、来館者の参観に供しています。春と秋には特別企画の展示会を開いています。

閱 覧

■閲覧時間
午前9時から午後4時まで

図書閲覧を希望される方は、閲覧申請書に所定事項を入力して御申込み下さい。複写、写真撮影、掲載等はそれぞれの規則によっていただきます。

休 館 日

土曜日・日曜日・祝祭日・年末年始
その他当館の行事に伴う臨時休館日

刊 行

科学技術振興の一環として出版物を刊行しています。

〔刊 行 書〕

杏雨書屋蔵書目録	1982年
新修恭仁山莊善本書影	1985年
本草書の研究 渡辺幸三著	1987年
杏雨書屋図録	1998年
本草学研究 森鹿三著	1999年
新修本草卷十五獣禽部 (影印本)	2000年
宝要抄 (影印本)	2002年
備像食物本草 (影印本)	2003年
穀類抄 (影印本)	2004年
生薬・薬用植物語源集成 内林政夫 著	2004年
未版 備急総効方 (影印本)	2005年3月
杏雨書屋洋書目録	2006年1月
杏雨書屋所蔵 書簡集Ⅰ、Ⅱ	2006、2009年
水谷本草Ⅰ～Ⅳ (原色 翻字本)	2005～2008年
香字鈔 (影印本)	2007年3月
黄帝内経太素 (影印本)	2007年4月
香要抄Ⅰ、Ⅱ (影印本)	2008、2009年



■アクセス



- 地下鉄堺筋線
北浜駅6号出口より徒歩4分
- 地下鉄御堂筋線
淀屋橋駅11号出口より徒歩6分



常設展示室

杏雨書屋所蔵 医家肖像集、二編	2008、2018年
敦煌秘笈 目録冊～影片冊Ⅸ (影印本)	2009～2013年
本草品彙精要Ⅰ～Ⅵ (複製本)	2010～2012年
本草品彙精要 解説・目録・索引	2015年
薬種抄Ⅰ、Ⅱ (影印本)	2010、2011年
毛詩正義Ⅰ～Ⅳ (複製本)	2011～2013年
宇田川榕菴植物学資料の研究	2014年3月
杏雨書屋「松木文庫」解説・目録	2014年3月
曲直瀬道三と近世日本医療社会	2015年10月
本草・薬物の研究 宮下三郎著	2016年1月
杏雨書屋蔵 積砂版大蔵経目録Ⅰ～Ⅻ	2017～2024年
杏雨書屋所蔵 病草紙模本集成	2017年3月
敦煌秘笈 景教經典四種	2020年9月
日本近世医学史論考Ⅰ・Ⅱ 町泉寿郎著	2022年3月
医聖像集	2022年3月
定期刊行物 紀要「杏雨」	1998年創刊

公益財団法人 武田科学振興財団

きょう う しょ おく
杏 雨 書 屋

電話 (06) 6233-6108

〒541-0045 大阪市中央区道修町二丁目3番6号

<https://www.takeda-sci.or.jp/>